
大好きです

karinko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大好きです

【Nコード】

N9888G

【作者名】

karinko

【あらすじ】

平凡な女子高生の理沙。モテモテ男の達也。そんな達也が理沙に小さな興味を抱いて…（理沙sideと達也sideにわかれてます！どちらか一つを読むかどちらも読むかは自由にしてください）

プロローグ 理沙 side

『理沙・・・』

【彼】が私の名前を呼ぶ。

私は【彼】のことが大好きなの。

けれど【彼】は行ってしまっ。

どこへ？

わからない。

けどたまらなく愛しくてさびしい。

【彼】の名前を呼びたいけれど名前がわからない。

泣きそうになる私を見て【彼】は寂しそうにほほえみ私に口付けた。

そして【彼】の姿がはなれていく。

追いかけても届かない、ずっと遠いところへ。

そこで、夢は終わる。

毎日見る夢。

【彼】の顔を思い出すことはできない。

「ふうん。なんだか・・・ロマンチックよねえ〜VV」

「変なこと言わないでよ！ほんと誰なんだろう？あの人・・・？？」

昼休み。

親友の美香に夢の話をしていた。

「だけど、ホントに顔覚えてないの??」

美香がずいっと身をのりだして聞いてくる。

「うん・・・全然・・・」

そうなんだよなあ・・・

私、その人の顔いっつも凝視してるんだけど・・・

なぜか覚えてないんだ；

「けどさ〜！理沙が好きになるぐらいなんだからきつとかっこいい
んだろうね〜！あとちよつと変なやつかも！」

「な、何よ！まあ、かっこいいのはかっこいいんだけどさあ・・・
変なやつじゃないって！」

きゃーVV

その時、急に廊下から女子が騒ぐ声が聞こえてきた。

とたんに美香の体がびくつと反応する。

「はっ！まさかっ！」

美香は廊下を見てそわそわしはじめた。

そんな様子を見て私はため息交じりに言う。

「・・・行つてきなよ。」

美香の顔が輝いた。

「ほんと！？ありがとね！理沙！」

美香は座っていた椅子がこける勢いで立ち上がると廊下に猛ダッシュしていった。

はぁ・・・

美香も好きだよねぇ・・・

1人残された教室でため息をつく。

あのさわぎようと美香の反応からして、廊下にいるのは斎藤達也。

ついこのまえに関西から転校してきたやつだ。

ルックスもよくて、何より明るくておもしろいらしい。

だから転校してきてからはいつも女子にかこまれている。

美香もあいつに一目ぼれしたらしくて・・・

いつつもおっかけをやってるんだ。

・・・一応美香も恋してるんだなあ。

私も、はやくしてみたい。

あの夢にでてくる【彼】が私の運命の人だというなら、

はやく現れて欲しいな。

はやく、会いたいよ。

ぼーっと考えながら美香はどうしているんだろう？とふと廊下を見た。

窓があいていてちょうど斎藤達也の顔が見えて・・・

えっ・・・???

目があった。

斎藤は私ににこっと笑いかけるとまた集まっている女子と話を始める。

・・・びっくりしたあ。

心臓がドキドキと脈つっている。

あいつ・・・みんなが群がるだけあるかも・・・

やっぱ、かっこいいな。

そこではっと気がついて首をふる。

ダメダメ！

何考えてるのよ、理沙！

あの人は美香の好きな人なの！！

それに・・・

あんなに女の子にもてるんだから・・・

私なんかきつと見むきもされないよ！

それに私にはあの夢の人がいるじゃない！

あの、夢で見る【彼】を思い浮かべる。

ああ・・・

あなたは今どこにいるんですか??

プロローグ 理沙 side (後書き)

初投稿作品です！

すごくへただと思いますが・・・

それをご了承の上で読んでいただけたらうれしいです

一応理沙 side と達也 side を交互におくつもりなので別々に読むか一度に読むかはおまかせします

プロローグ 達也 side

転校してきてからまだ一ヶ月。

まあ、結構日がたったような、たっていないような微妙な感じや。

けどまだオレのまわりにはアホな女子どもが集まってきた。

転校初日に比べたらまだましになった方やと思う。

けどなあ…

それなのにこんなに集まってくるんはおかしいと思うぞ？

自分で言うのもなんやと思うが…

オレはもてる。

なんでかはよわからん。

友達に聞いてみたら、ルックスとか性格がええらしい。

オレからしたら、どこが？って感じや。

というわけで、今日もオレが少し教室からでるだけでいるんなところから女子が集まってくる。

移動するんも大変やし、正直うんざりしてる。

集まってくる女子の中にはたまに可愛いと思うやつもおるが、

そいつも自分の取りまきの一人やと思うとがっかりしてまう。

ちなみにオレには彼女はおらん。

昔おったけど…

その話はおいとくわ。

とりあえず今のところはええわな。

今本気で『好き』と思えるやつがおらんから。

少なくともこの取りまきの中にはおらん。

けど、せつかくオレのことが好きやって思って集まってきたくれるんやから、

一応オレは今日も取りまきの相手をするんにおわれとった。

そんなとき…

あいつを見たんや。

1・Dの教室のまえを通った時、また教室から新しい取りまきが出てきた。

またふえた…と肩をおとしながら、ふいに教室に目をやったとき、

偶然教室におった女子もこっちを見て目があつた。

栗色のショートヘア。

整った顔だち。

可愛いやつやなあと思った。

オレはとりあえずそいつに笑いかけた。

そしてすぐにとりまき達の相手をするのに戻る。

びっくりした…

なんか…

ひさしぶりにドキドキした。

あいつの名前って…

なんやっけ??

たしか…

立川…理沙…??

プロローグ 達也 side (後書き)

なんとなくすつごくよくわからない感じになりました；

っていうか達也どんだけ関西弁やねん！（つつこみ

別に達也が関西弁なのに深い意味はありません。

単に私が大阪に住んでいて関西弁を書きたかっただけです。

あと最後に1つ。

転校してきたばっかなのになんで理沙の名前しってるんでしょうか

…???

1話 恋する美香 理沙side

ふう…

やっと学校終わったあ…

今日も一日長かったなあ。

はやく家にかえろつと！

つて…

美香は??

教室を見回してみても残っているのは数人で美香の姿がなかった。

先、帰ったのかな？

いつも一緒に帰ってるのに…

私今日何かしたっけ…??

なんとなく心配になって今日一日の行いを振り返っていると廊下で美香の声があった。

「そ、そうです！私のですっ！」

慌てて声が裏返っている。

み、美香…???

どうしたんだろう？

すごい変な声だったよ…???

不審に思いながらも廊下に出てみると、

そこには美香の大好きな…斎藤達也!?

あのモテモテくんがどうして美香としゃべってるの!?(美香には悪いけど…)

「あっ!理沙!」

美香が私に気づいた。

斎藤も私の方に顔を向ける。

「びつくりした!先帰ったと思ったんだよ??」

そう言いながら美香に近づいていくと、美香はあきらかに不満そうな顔をした。

あっ…

もしかして私お邪魔虫みたいな感じ…???

空気読めてなかった…???

「…げた箱で待つてるね。」

気をきかせてその場を離れようとする。と齋藤に呼び止められた。

「待てや！」

へ???

振り返ると齋藤がにっこりと私に笑いかけた。

「生徒手帳おとしてたみたいやから届けにきただけや。気使わんでええで！」

美香があきらかにガーンとした表情になった。

齋藤はそんなこと気にもとめないで（気づいてないだけかも…

美香に生徒手帳を手渡すとさっさと帰ってしまった。

「あゝ…行っちゃったあ…」

美香が不満気な声をもらす。

「なんかジヤマした？ゴメンね…」

「うん。かんぺっきジヤマだった！けどけど！聞いてよ！」

美香のテンションがなぜか一気にあがる。

「何??？」

多分『この生徒手帳、斎藤くんが触ったんだよ!』とかそんな感じだろな〜と思っただら…

「この生徒手帳、斎藤くんが触ったんだよ!」

考えどおりのことを言われたので少し驚いた。

美香…あんたって単純だね…

「よかったね。でも、美香と斎藤がしゃべってて正直びっくりしたよ!」

「えへへ さっき呼び出されたんだ 私も最初なんだろうって思ったよ!」

喜ぶ美香は普段からは想像もできないほど無邪気だった。

やっぱり…恋する乙女って感じだなあ…

なんだか美香がまぶしく見えるよ…

美香から神々しい光を感じてひそかに目を細めた。

「まあ、いいや。とりあえずかえろっか!」

「うん!」

いつも以上にご機嫌な美香。

なんとなく…

今日の帰り道はずっとこの話かも…

1話 恋する美香 理沙side(後書き)

美香がどれだけ達也のことが好きかっていう話です！
とりあえずすっごい好きってことで…

1話 興味 達也 side

やっと取りまきがどっかいつてくれた…

「よお、斎藤。今日も大変そうだったな。」

それを見こしてか最近友達になった吉沢が話しかけてきた。

「なんかめっちゃ疲れたわ…」

オレががっくりと肩を落とすと吉沢にこずかれた。

「それちよつとムカつくぞ！まあ正直つらやましいか、気の毒が微妙なとこだけだな…」

いや、気の毒やろ…

まあたしかにうれしいことやけど、ずっと続いたらやっぱり疲れるで…

「んっ？それより斎藤。なんかおちてるぞ？」

吉沢が何かを手にとった。

「これ…生徒手帳じゃねえか？」

たしかに…

それはついこないだもろうたやつと同じやけど…

吉沢が勝手に中を見だした。

止めようと思ったが面倒なのでほっておく。

「へえ〜！これって三浦のじゃん！あいつも結構可愛いよな！」

三浦…???

「三浦って誰??？」

吉沢はあらかじめ驚くとため息をついた。

「はあ…お前しらねえの??いつもおまえのまわりにいるけどな。ほら…あの黒髪のロングヘアの子！」

黒髪でロングヘア…???

必至に記憶をたどってやっと思い出した。

「ああっ！なんか知ってる…気がする…」

「なんだよ。名前くらい覚えてやれよな。まあこれ本人にわたしに
いってやれ。」

名前くらい覚えろって…

あんなにおっいたらさすがに全員は覚えられんわ。

つちゅーかオレ一応転校してきたばっかしなんやけど…

「わたしとけって…めんどくさいわ…」

「いいから！きつと喜ぶって！」

吉沢に無理やり生徒手帳を手にもたされた。

まあ別にわたしに行ってもええんやけどな。

帰りにでも行くか。

たしか…

A組やつけ??

…うん。A組やったはずや！

適当に核心づけて放課後、1 - Aの教室に向かった。

他の女子に囲まれると面倒なのでドアから少しだけ顔をのぞかせる。

そして三浦の姿を見つけ出すとてまねきした。

三浦は少し頬を染めてかけよってくる。

「な、なんですか??」

あきらかに慌てていて声が裏返っていた。

顔は真っ赤に染まっている。

この子…

めっちゃオレのことを好きって思ってくれてるんやな…

なんとなくうれしくなった。

「これ、おまえのやんな？」

手帳を差し出して言うと三浦は首をこくこくとふる。

「そ、そうです！私のですっ！」

「おとしてたで。」

そう言って渡そうとしたとき、三浦の視線が横にうつった。

「あっ！理沙！」

???

友達か???

そう思ってなんとなく三浦の視線の先を見ると、

昼休み目あった女子がおった。

こいつと友達やったんや…

立川は少し驚いたようにオレを見ていたが、興味なさげに三浦の方

へ視線を戻した。

「びっくりした！先帰ったと思ったんだよ？」

そう言いながら三浦に近づいて行って、なぜか急に止まって固まった。

そしてオレと三浦の顔を交互に見るとくるりと方向転換する。

「…げた箱で待ってるね。」

…???

なんか…

こいつ勘違いしてるっばいで!?

オレは生徒手帳届けにきただけやねんけど！

「待てや！」

そのままこの場をはなれようとする立川を呼びとめた。

「生徒手帳おとしてたみたいやから届けにきただけや。気使わんでええで！」

オレは立川に笑いかけると三浦に生徒手帳を手渡し、さっさとその場をはなれた。

げた箱にいくとオレを待っていたのか吉沢がかけよってきた。

「返してきたか？どうだった？」

何を想像していたのかにやにやしている吉沢。

いや、おまえが想像してたようなことは別にないけどやな…

「まあ、おもしろいこと見つけたかもな。」

そう言って小さく笑った。

「なんだなんだ!?!」

興味深げに聞いてくる吉沢を無視して、オレは1人でにやけていた。

あの立川ってやつ…

昼休みんときは可愛いやつやなあって思っただけや。

けどなんとなく興味を持った。

2回も笑いかけたのにオレに惚れへん女なんて初めてや。

他に好きなやつがあるんかもしれへんけど…

なんかこのままやつたら悔しい。

オレってどうでもいいところで負けずぎらいやねんなあ。

よし、決めた!

あいつを絶対オレに惚れさせたる！

1話 興味 達也 side (後書き)

なんだか達也のキャラがおかしくなりました…

モテるのがうっとうしいはずなのに…

なんだかよくわかりません…

けど、負けず嫌いってことで全て丸くおさめてください！

2話 図書室で 理沙 side

うん…

もう少しで中間テストだあ…

全然勉強してないよ…

けど！

今からでも遅くはない！、はず！

しっかり勉強しなくっちゃ！

と、いうわけで、

テストまで一ヶ月をきった今日。

私は図書室にきていた。

ここなら静かにできるでしょっ

美香も誘ってみただけれど、『今日はやく帰りたいから！』とか
言われて断られた…（涙）

1人でするのも寂しいけど…

他にメガネの人が数人勉強してるから！

よ〜し！私！

がんばれよ〜！！

気合いをいれてとりあえずノートをまとめようとペンをとったとき、後ろから声をかけられた。

「よっ！え〜とやなあ…そうや！立川！」

この学校じゃ1人しかいない関西弁。

いや…

けどまさかあの人がここに来るわけないよね…？

一応振り返ると、そこには予想通り斎藤達也がいた。

「なんで!?!」

思わずイスに座ったまま後ずさりすると苦笑いされた。

「なんでって言われてもやなあ…オレも勉強しにきてんで？」

手には学生カバン。

まあ、図書室にくるなんて勉強するくらいしかないよね…。

ただどだけど！

なんでこんな学校の有名人がただの平凡な私の名前をしってるのっ

っ!?

あらかさまにびっくりすると斎藤は予想通りの反応とでも言いたげに笑った。

「昨日会ったちゃん!で、勉強しようと思ったたらおったからやな、勉強教えてもらおと思って!」

「はっ?私か...??」

別にいいけど...

あゝあ。

美香も一緒にこればよかったのにな。

もし美香がいたらとんで喜ぶと思うのに...

この場に美香がいたらを想像している間に斎藤が私のまえの席に座ってきた。

「立川はなんの勉強するん??」

そう言って私のノートを覗き込んでくる。

...モテモテくんだけあってなれなれしいなあ...

多分何人も女の子に同じようなことしてるんだろなあ。

私こういうタイプの人、あんまり好きじゃないかも。

「英語だよ。」

「あつ、オレも英語よわからんねんなあ。」

私は無視してペンをとった。

話してたら時間なくなっちゃうし…

集中しなくっちゃ！

それなのに斎藤は勉強もせずに私に話しかけてくる。

「なあなあ、立川って好きな人ある??」

いや、今まったく関係ないでしょ…

けど好きな人啊…

あの夢の人…

は、誰だかわかんないや。

今のところはいないのかなあ…???

「もしかしてさあ、オレとか!??」

「そんなわけないじゃん。」

斎藤が身を乗り出して言ったのを軽く流して考えにふけた。

そういえば…

斎藤って美香のことどう思ってるんだろ??

あれだけ美香が夢中になってるんだから…

少しは何か思っているのかな??

「ねえ、斎藤って美香のことどう思ってるの??」

もし少しでもいいなあと思ってるんだったら美香にもチャンスはあるってことだよな?

って、この状況って大チャンスじゃない!?

美香がいかに可愛い子を伝えなくっちゃ!

そうだな…美香の可愛いところといえば…「美香?誰それ?」

…えっ??

思わず固まった。

…いや、さすがに名字は知ってるよね!

名前だからわからなかっただけかも!

「三浦って子だよ!昨日私と一緒にいたじゃん!」

「三浦…??知らんけど…」

ホントに…

知らないの…???

なんで???

私のこと覚えてるんだったら、普通美香のこと覚えてるはずですよ！

だって昨日一緒にいたんだから！

しかも斎藤は美香に生徒手帳を返しにきたんだし…

「ああ、もしかしてオレの取りまきの一人か？」

取りまき???

何？その言い方！

美香は本気であんたのことが好きなのに！

「あんないつぱいおるのにいちいち全員覚えられるわけないやん。」

斎藤のしれつとした態度にだんだんイライラしてきた。

ホントになんなの！？

こいつっ！

私はガタつと席を立った。

「何！？その言い方！」

「はっ??？」

斎藤が不審そうに私を見上げる。

「あんたが取りまきと誤っている子達は多分みんなあんたのことが本気で好きなんだよ!？」

それなのに…

美香は本気であんたのことが好きなのに…

なんで名前も覚えてないのよ!

「なんやねん…いきなりキレられても…大体図書室やのにめーわくやで。」

たしかに静かな図書室には私のどなり声が響いてみんなが私の方を見ている。

けど抑えきれない…!

きつとこいつは他の女の子の名前も覚えていない。

そんなの…

女の子達が…美香がかわいそうだよ…

勢いが止まって、力なく椅子に座る。

「…なあ、モテるって楽しいと思う?？」

急に斎藤が真剣な顔で問いかけてきた。

そりゃあ…

「楽しいんじゃない? 何もなくても女の子がよってくるんでしょ?」

あんたはその女の子達の気持ちも無視してもてあそんでいるんだろ
うけど。

「そりゃ間違いやで。正確には全然楽しくもうれしくもない。まあ、
これはオレがそう思うだけやけど。」

私は首をかしげた。

なんで??

楽しいんじゃないの?

斎藤ならきつと好きな人がきたらすぐに手に入れられる。

彼女が欲しくなっても斎藤のことが好きな子から探せばすぐできる
じゃない。

「オレのまわりにくる女はな。みんなオレを外見だけで判断してるんや。オレのこと好きや言ってるやつはみんなオレの外っ面が好きなだけや。ホンマにオレのことを好きなんとちゃう。」

なんだか斎藤の目が悲しそうに見えた。

まるで誰も自分のことをわかってないとも言つように。

「…美香はそんなじゃないよ。」

「おまえもわかってるやろ？美香っちゅーやつも他の女と同じや。」

たしかに…

口ではそう言えるけれど、

心の中では考えが変ってきていた。

美香もきつと…

こいつのことを外見だけで判断している。

一目惚れってというのは…大体そうだから。

「だからオレのことを外見だけで判断してるやつの名前は覚えんよ
うにしてるんや。だからおまえにそんなキレられても困るんやわ。」

…美香の名前を覚えていなかった理由を説明していたつもり??

私は納得できない!…と言いたところだけど、

なんとなく、納得してしまった。

そして斎藤に同情してしまう。

たしかに…

外見がいいっていいことばかりじゃないのかも…

みんな外見だけを気にして…

本当の自分を見てくれないんだ。

「…って、じゃあなんで私の名前は覚えてたの!？」

「おまえはオレを外見で判断してないように見えたから。それだけや!」

すくつと斎藤が立ち上がった。

「えっ? 帰るの??」

はやっ!

入ってきてからまだ15分ぐらいしかたってないよ!

しかも全然勉強してなかったし…

「…あっ! そうや! 帰る前に1つ!」

斎藤はドアのまえでふと立ち止まると、振り返って私に人差し指を向けた。

「おまえ、なんか興味あるわ！おもしろそうだから、絶対にオレに惚れさせたる！」

「…はっ！？な、なんで！？」

止める間もなく斎藤は図書室をでていく。

1人残されてぼつと顔に熱がのぼった。

はあ！？

どういう意味！？

興味持ったって…

意味わかんないよ！

っていかいきなりすぎでしょ！

さっきの話からどうつなげたらこんなことになるの！？

けど…

クスッ と小さく笑う。

惚れさせられるものなら惚れさせて見せてよ。

私、絶対に外見だけであなたに惚れたりしないから！

外見じゃなくて…

本当のあなたじゃないと私の心は動かないよ???

2話 図書室で 理沙side（後書き）

やばいです…

理沙も達也もキャラがわからなくなってきました…（汗

展開はやすぎだし…

最後の理沙の考えが意味不明です。

おいおい！美香はどうなったの！？

達也はいきなり語りだすし…

ほんつと意味不明です！

すいません…

2話 理由 達也side

さっそく行動開始や！

…と言いたいところやけど、

教室をのぞいて見ても立川の姿はなかった。

どこにおるんや???

今テスト前やし…

もしかして図書室とか、か??

図書室に足を運んでみると予想通り立川の姿があった。

おっ！マジでおった！

オレってめっちゃ勘ええやん！

気づかれへんようにそっつと立川の背後に立った。

せやな…

いきなり名前しっつたらひくわなあ…

けどウソつくんもあれやし…

「よっ！え〜とやなあ…そっつや！立川！」

名前を思い出そうと少し考えたかのように明るく声をかけた。

うっわ！オレめっちゃ演技うまいやん！

やっぱり天才や！

立川は怪訝な顔でふりむいた。

オレを目にとめると大きな目をみるみる見開いていく。

「なんで!?!」

少し大きめな声をだしイスに座ったまま後ずさりされた。

な、なんやねん。

その反応…

オレがおっいたらそんなに驚きなんか??

少し苦笑しながら言う。

「なんでって言われてもやなあ…オレも勉強しにきてんで?」

まあウソやけど。

オレアホすぎるから勉強しても意味ないわ！

そのまえに、

こいつオレが自分の名前しつとるっちゅーことにはなんも思わんのやろか？

昨日名字教えてもろつてないから普通しつとるんはおかしいんやで？

今頃気づいたのか立川は大きな目を見開いてあらかさまに驚いた。

めっっちゃ予想通りの反応や…

予想通りすぎて思わず笑いながら言う。

「昨日会ったやん！で、勉強しようと思ったらおったからやな、勉強教えてもらおと思って！」

「はっ？私が…??？」

なんとなく立川の顔が少し歪んだ気がした。

な、

オレに勉強教えるんはいやなんか…??

ちよつとシヨックや（泣

まあそんなん関係ないけどな。

立川のまえの席に腰をおろすとそのまま立川のノートを覗き込む。

「立川はなんの勉強するん??？」

「英語だよ。」

立川は顔もあげずにつぶやいた。

めっちゃそっけない…

「あつ、オレも英語よわからんねんなあ。」

無視された。

ひ、ひどいわあ…

オレってめっちゃもてるんとちゃうんかったっけ…??

なんか悲しくなってくる…

いや、オレがんばれ!

オレは一応もてるはずなんや!

そつや、オレってうざいほどもてるやんけ!

「なあなあ、立川って好きな人おる?」

なんとか自信をつけて聞いてみた。

立川はペンを動かす手を止めて考えるようにななめ上に視線をむけた。

「もしかしてさあ、オレとか!？」

「そんなわけないじゃん。」

身をのりだして言ってみたのに軽く流された。

……

なんか…

涙でそう…(涙)

オレって純情やからこれ言うんだだけでもめっちゃ勇気いってんだけど…

おちこんで頭をさげようとしたとき、

急に立川が明るい顔で話しかけてきた。

「ねえ、斎藤って美香のことどう思ってるの??」

…???

「美香?誰それ?」

立川の顔が一瞬固まった。

けどすぐに明るくなる。

「三浦って子だよ!昨日私と一緒にいたじゃん!」

「三浦……？知らんけど……」

本気でわからんわ。

昨日立川と一緒にあったやつって……

とりまきの1人くらい……

あつ！もしかしてあいつ？？

「ああ、もしかしてオレの取りまきの一人か？」

立川は固まり、そしてオレを睨みつける。

な……

なんで睨まれなあかんのや……

もしかしてそいつの名前覚えてないことにムカついとるんか？

「あんないっぱいおるのにいちいち全員覚えられるわけないやん。」

何人おるとおもつとるんや。

それに……

オレはあいつらの名前とかを覚えるんは気がひける……

「何！？その言い方！」

立川が勢いよく立ちあがった。

「はっ??？」

いきなりなんなんや???

「あんたが取りまきと思っている子達は多分みんなあんなことが本気で好きなんだよ!??」

はあ…???

意味わからへんわ…

そんなわけ、あらへん。

「なんやねん…いきなりキレられても…大体図書室やのにめーわくやで。」

立川はまわりの様子を見るとオレを睨みつけた。

そして急に表情を変えると力なくイスに座った。

立川は…

わかってない…

「…なあ、モテるって楽しいと思う??？」

立川は怪訝な顔でオレを見た。

考えるように口を開く。

「楽しいんじゃない？何もしなくても女の子がよってくるんでしょ？」

「そりゃ間違いやで。正確には全然楽しくもうれしくもない。まあ、これはオレがそう思うだけやけど。」

オレ、何言ってるんやろう？

なんでこんな話になってるんや？？

わからへん…

けどなあ。

口が勝手に動くんや。

思ってることを全部吐き出してまう。

「オレのまわりにくる女はな。みんなオレを外見だけで判断してるんや。オレのこと好きや言うてるやつはみんなオレの外っ面が好きただけや。ホンマにオレのことを好きなんとちゃう。」

オレはできることなら、

こんな顔に生まれたくなかった。

誰もホンマのオレを見てくれへんから。

記憶の中で、ある少女の顔がちらついた。

「…美香はそんなじゃないよ。」

立川はうつむきながらつぶやいた。

けどその目は揺らいでいる。

「おまえもわかってるやろ？美香っちゅーやつも他の女と同じや。」

オレのまわりによってくる女に違いがあるはずない。

「だからオレのことを外見だけで判断してるやつの名前は覚えんようにしてるんや。だからおまえにそんなキレられても困るんやわ。」

だってそんなもん、覚えたってしゃーないやろ？

そんなん覚えるくらいやったら英語の単語覚えるわ。

……

はい！終わり！

もう暗い話は終わり！

立川も納得してくれよ…???

立川は考えにふけたようにぼーっとした。

「…って、じゃあなんで私の名前は覚えてたの!?!?」

で、いきなりつつこまれた。

うん…

なんでやるうなあ？？

なんとなく、おまえはな？

「おまえはオレを外見で判断してないように見えたから。それだけや！」

言いながらオレは席を立った。

「えっ？帰るの？？」

立川が驚いたようにオレを見る。

そのまま図書室をでようとしたけど…

「…あつ！そうや！帰る前に1つ！」

言い残したことがあった！

ピシッ！と立川に人差し指を向けた。

「おまえ、なんか興味あるわ！おもしろそうだから、絶対にオレに惚れさせたる！」

「…はっ！？な、なんで！？」

立川のうるたえる声をムシしてオレは図書室をでた。

それにしてもべらべらと暗い話してしもうたのお…

まあそれはいいとして、

立川に宣戦布告はした。

昨日はなんとなく悔しくて立川をおとしたらと思っただけやけど…

理由は変わった。

立川はオレを外見だけで判断してないと思うから、

立川をオレに惚れさせることができればオレは中身も上出来やっちゅーことや。

だから、立川をおとしてみせる。

ホンマの自分を証明したいから。

オレは外見だけの男やないと証明したいから。

…あいつに、オレが外見だけの男やないと証明したいから。

2話 理由 達也 side (後書き)

お…重い！

達也の設定大幅に変えました。

昔何かあったということ…

あと達也 side のプロフィールを少し変更しました！

ヒマだったら見て欲しいです！

3話 メール 理沙 side

『おまえ、なんか興味あるわ！おもしろそうだから、絶対にオレに惚れさせたる！』

昨日の斎藤の言葉がこだまする。

なんだか…

あんなこと言われちゃったけど…

それってすつごくまずいことだよな???

だって美香は斎藤のことが好きなのに…

まあ、適当にあしらってたらすぐにあきらめてくれるでしょっ！

プラス思考で考えながらぼんやりと外を見ていると後ろから美香に声をかけられた。

「りっさ！どうしたの！？ぼんやりしちゃって！」

なんだかすつごく弾んだ声。

振り返ってみると美香は満面の笑顔をうかべていた。

「ちょっと考え事をして…で、美香何かいいことあったの??？」

美香は待つてましたと言わんばかりに身をのりだすと目を輝かせた。

「そうなの！聞いてよ！斎藤さんとメアド交換しちゃった！」

「え…うそお!?!」

なんで!?!

斎藤は美香の名前も覚えてないとか言ってたじゃない！

それがどうしていきなり…

もしかして！

美香にも興味を持ったとか!?!

そう安心しかけたとき美香がちょっとしょんぼりしたように言った。

「それで、ね？斎藤さんに理沙のメアドも教えてって言われたから教えちゃった…勝手にゴメンね？」

「え???私の???」

がっくりと肩を落としそうになった。

み、美香を利用したの…???

いや!違う!

きつと純粹に美香のメアドが知りたくてついでに私のメアドも聞いただけだ!

そう思っておこう！

けどあいつにメアド知られたってなんだかやだなあ…

「まあよかったね！一歩前進じゃん！」

「うん だからすっごくうれしいんだあ」

はしゃぐ美香。

そんなとき、チャイムが鳴った。

「あっ！座らなくちゃ！」

美香は慌てて自分の席に戻る。

私も急いで次の授業の教科書をだした。

あゝ…次歴史じゃん…

だらだら長くっもおもしろくないんだよね…

美香とメールでもしとこっかなあ…

そう思ってケータイをあけてみると一通のメールがきていた。

…???

誰だろ？

休み時間もずっとマナーモードにしてたから気付かなかった…

ばれないように机の下に隠しながらフォルダを開くとそれは知らないアドレスから。

迷惑メール？

そう思いながらもそれを開いた。

【おまえの友達にメアド教えてもらったで！登録頼むわ！ 斎藤達也】

えっ？

いきなり!？

とりあえず返信した方がいいよね…???

【登録OKだよ】

ぼちっと送信ボタンを押す。

そしてすぐにアドレス帳に登録した。

斎藤っど…

けど授業中にメール送ったら迷惑だったかな??

私は端の席だから気付かれないけど…

とりあえず美香にメールしようっと！

【美香！斎藤からメールきたよ！美香もきた??】

送信してから美香の方を見た。

美香は私の視線に気がついて机の下でケータイをあける。

その目がわずかに見開かれたような気がした。

…???

もしかして私余計なこと聞いちゃった??

返事はすぐにきた。

【うっん。きてないよ?どんなメール?】

えっ?

きてなかったの??

やっぱ…

本当に余計なメール送っちゃった…

【登録よろしくってだけ！返事きてないし!】

慌てて弁解するように返信をうった。

美香の方を見ると美香は安心したように私のメールを見ている。

よかったあ…

すっごく焦ったよ…

安心したとき、またメールがきた。

美香???

いや、でもさっき返信したばかりだし…

フォルダを開くと相手は斎藤。

ええ!??

返信きちゃったよ!

美香がこっちを見ていないかなんとか確認しながらメールを開いた。

【ありがとうな!それはそうと授業中メールしてもええんかいな…テストまえやぞ?】

……

そうだった!!

授業ちゃんと聞かなきゃ!

って…

それをいうならそっちもでしょ!?

【忘れてた；けど、あんたも授業中メールしてんじゃん!】

送信してから慌ててペンをとる。

そして先生の話に耳を傾けた。

それから10分が経過…

ね…眠いよ…

しかも授業に全然関係ない話ばっかだし…

あと何分で授業終わるんだろう…?

ケータイを開いて時間を確認しようとする…一通のメール。

【オレはもうテストはあきらめとるんや!それより今度の日曜遊びに行けへん!?!】

はあ!?!?

なんでいきなりそうなるのよ!

大体美香に見つかったら大変だし…

【ムリに決まってるでしょ！】

返事はすぐにきた。

【きてくれへんのやったら美香っちゅーやつにオレがおまえを狙ってるって言うでえっ?】

なっ…

脅しときましたか…

けどそんなこと言われちゃったら美香と友達でいられなくなっちゃう…

仕方…ないよね…

【わかったよ!どこ行くの??】

買い物とかだと困る…

美香に会う確率が高くなっちゃっし…

行くとしたらどこだろ…???

映画、とか???

考えているうちに返信がきた。

【映画でええやん。】

か、考え通りだ…

まあ映画だったらなかなか会わないよね？

ちょうど見たい映画あったし！

【いいよ。私の見たいのでいいよね！？】

【OKやで！じゃあ時間はおいおい決めるとして…ちなみにオレメー
ールしてんのばれてもうた…っちゅーことでほなな！】

ええっ！

ばれたの！？

ちゃんとかくしてやりなさいよ！

まあそれはそうとして…

斎藤と行くっていうのはなんだか気が乗らないけど…

映画、楽しみになっちゃったなあ！

日曜日が少し楽しみかも！

3話 メール 理沙 side (後書き)

授業中メールしていいのかよ(汗

とにかく!

遊ぶ約束をこぎつけました!

いよいよ恋愛物語っぽくなるでしょうか……???

(途中で美香からのメール無視してます……)

3話 授業中 達也 side

ケータイをいじりながら1人で笑う。

くっくっくっ…

実はな…

大ニユースがあるんや。

なんと、

立川のメアドをゲットしたんやー！！

昨日立川がいつとった三浦うちゅーやつに聞いたら一発で教えてもらえたわ。

これでオレは…

今度の日曜遊びに誘おうと思う！

なぜなら、それが一番てつとりばやい方法やと思うからなあ！

まあまずは教えてもらうたことを報告や！

【おまえの友達にメアド教えてもらったで！登録頼むわ！ 斎藤達也】

ささっと打ち終わるとすぐに送信ボタンを押した。

さあ！

どんな返事がかえってくるんや!?

画面を見ながら返事がくるのを待った。

…

……

……

………こーへん。

いつまでたっても返事がこーへん。

女子っていつつもケータイいじくつとるんとちやうん???

もしかしてムシられたんかなあ??

傷つくやんかあ…

がっくりと肩をおとして席に座るとちょうどチャイムが鳴った。

お、そういえばテストまえなんやっけ??

テストとかどうでもええけど…

赤点とったらオカんに怒られるからなあ…

英語って…よわからんし…

一応聞いたるか。

「動詞がここにくる場合、文法は…」

英語科の上山がアルファベットをずらりと黒板に並べながらべらべらとしゃべっている。

右から〜右から〜 何かがやってくる〜

僕は〜それを〜 左にうけながす〜 …って、

古いわ！（つつこみ

あ〜も〜

聞く気ないわあ…

意味もなくケータイをひらくと一通メールがきていた。

おっ！

もしかして立川かつ！？

メールを開くと思ったとおり立川から。

【登録OKだよ】

み、短いやる…

別にええけどやなあ…

つちゅーかこいつ昨日図書室に勉強しにきてたよな!?

テストまえで焦ってる感じやったし…

今、授業中ってわかつとるんかいな…

【ありがとうな！それはそうと授業中メールしてもええんかいな…テストまえやぞ？】

とりあえずお礼と注意をいれておいた。

まあここでメールきられても困るんやけどな。

返事がくるまでぼんやりと外を見ているとケータイが小さく光った。

おっ

きたか

【忘れてた；けど、あんたも授業中メールしてんじやん！】

ああ、

オレもう聞く気ないからな…!!

とりあえずはやいうちに誘ってしまおか。

【オレはもうテストはあきらめとるんや！それより今度の日曜遊びに行けへん！？】

【ムりに決まってるでしょ！】

すぐに返事がきた。

なんか…

即答されたみたいやわ…

けどオレはあきらめへんで！

こうなったら脅し作戦や！

【きてくれへんのやったら美香っちゅーやつにオレがおまえを狙ってるって言うてえ？？】

にやっと笑いながら送信する。

脅しなんて卑怯な手やけど…

これやったら立川は絶対にOKするはずやからな（笑

【わかったよ！どこ行くの？？】

予想通りOKがでた。

よっしやあー！

約束はこぎつけたで！

で、どこ行ってくつて言われてもなあ…

遊びに行く作戦はさっき思いついたとこやし…

ここはやっぱり遊園地とか？

いやいや、そんな金ないわ。

やっぱここは無難に映画つてところが無難かもな。

【映画でええやん。】

さして、

何を見よか。

せつかくやからオレが好きなん見たいけど…

やっぱここは『れでいふあーすと』ってやつか？

けどもし見たいのないんやったらオレのこのみでええや。

【いいよ。私が見たいのでいいよね！？】

なっ…

みたいのあるんかいな…

まあええけど。

【OKやでーじゃあ時間はおいおい決めるとして…】

そこまで打った時、横から視線を感じた。

タラーっと汗が額に伝う。

「斎藤くん？授業中にメール？」

笑顔の上山。

けど眉間にはしわがよっている。

…やっぱ

…ばれたやん。

ちなみにオレメールしてんのばれてもうた…っちゅーことではなな
【！】

急いで返事を打って送信ボタンを押した。

パタンとケータイを閉じて上山に笑顔を向ける。

「いやあ、お母さんが危篤らしいんですわ。」

「そんなわけないでしょ。廊下に立ってなさい。」

「はい。」

しづしづと教室をでる。

さりげなくケータイ没収されたし…

あとで返してもらおうか。

とりあえず日曜日はがんばるぞ！

3話 授業中 達也side (後書き)

ギャグ多めです。

達也は理沙のようにはれないようにメールすることはできず…

堂々とケータイをいじくっていたところばれてしまいました。

というか高校の授業の内容とかわかりません(涙

だって中学生だもん！(誰？

あとムーディー勝山のネタだしました！

古いですよね；

4話 気持ちの変化 理沙side(前書き)

変に長いかもです。

急展開注意！

4話 気持ちの変化 理沙 side

日曜日。

昨日速効で決めた待ち合わせの公園。

なんとなく15分まえについた私は公園のベンチに座ってぼんやりとしていた。

斎藤：まだかなあ??

っていうか私なんでこんなにはやくきてるんだろっ?

なんだかオシャレもしてきちやったし…

今日の服装はピンクのブラウスに白のパーカー。

下は淡い桃色の短めなスカート。

…いや、オシャレとはいえないかも(汗

なんで私が好きでもない斎藤と遊びに行くのにこんなに緊張しているのかというと…

私：実は男の子と遊びに行くの初めてだったりするんだ…

向こうはそりゃあ女の子と遊びに行くなんていっぱいあることだらうけど！

私は違うんだよ！

うっ！！

変に緊張するっ！！

「おっ！立川！早いなあ！」

ちょうど待ち合わせの時間5分前に斎藤が到着した。

遅いよっ！…って言いたいことだけど…

一応5分前なんだよね…

「今ついたばっかだよ？じゃ、いこっか。」

ベンチを立って映画館の方向へ足を進めた。

緊張しているせいか早足になってしまっ。

もっ！

ホントなんで私ったら緊張してるんだろ…??

斎藤は私の速さに合わせながら隣に並んできた。

「立川私服めっちゃ可愛いなあ！」

「えっ！？」

思わず頬が火照りそうになった。

な、なんでそんなことサラっと言えるの!?

さすが…こつこつというの慣れてる人は違うな…

けど、

一応結構悩んで決めたんだっ。

ちよつと…うれしいかも

「ありがとっ! 斎藤もかっこいいよ!」

言ってから口をおさえた。

な、何言ってるのよ!?! 私!

ご機嫌になって余計なこと言っちゃった!

「ち、違う! 今のウソっ!」

慌てて訂正するも時すでに遅し。

斎藤はにやにやしながら私を見てくる。

「おお? もしかしてオレの私服で惚れてもったか?」

「そ、そんなわけないでしょ!」

変にてんぱってしまっ。

…だけど、

さすがにモテるだけあって私服姿もかっこいい…

まさになんでも似合っって感じ…

あゝ！！

もう！変に意識しちゃっよ！

ここは普通の話に切り替えないと！

そんなこんなで四苦八苦ししているうちに映画館についた。

「そっいえば今日はおまえが好きな映画を見るんやったな??」

「うんっ！」

そうそう！

実はもうすぐ上映終わっっちゃうんだよねゝ！！

一番早いので何時からがあるかなあゝ??

わくわくしながら映画の上映時間の予定を見た。

えっと…

……あつ！見つけた！

上映時間はつと…

「つて！ええ！？」

驚きが思わず声に出してしまった。

「どないしたんや？？」

斎藤が私の隣から覗き込んでくる。

「最悪つ！最悪なのっ！」

「だから何が？？」

何がって…！

だからっ！

「私が見たい映画の今から一番はやい上映時間が6時からなのっ！」

「はあ！？6時からあ！？」

今の時刻は1時半。

もうすぐ上映が終わるからか1日に2本しかなくて最初の上映は朝の9時から。

なんでこんなに2本目と時刻が離れてるのよっ！？

落ち込む私の肩にポンツと手をおかれた。

「まつ、どんまいやな。ちなみに何の映画が見たかったんや？」

「…『八代山幽霊物語』」

「ええ！？どんなやねんっ！？」

斎藤が驚いて後ずさる。

だって…

私怖い話とか大好きなんだもん…

そのくせ怖がりなんだけど…

「けど見られへん時間でよかったかもな。オレそんなんみたないわ…」

「いや、見る。」

「はっ？」

「見るったら見るの！」

せっかく楽しみにしてたのにこのまま見ないなんていやだよっ！

「はあ！？今から何時間あると思ってんねんっ！？」

「すみません。学生2枚で。」

斎藤がてんぱっているうちに勝手にチケットを買っておいた。

「何勝手に買ってるんや！」

「いいから！時間つぶしにいい！」

私はごまかすように斎藤の腕を引っ張って引きずっていった。

とりあえず暇潰しをしなくっちゃ！

どうしょ…

やっぱりこういときは…

マックで時間を潰すのが一番だよな！

実はお昼をあんま食べてなかったんだよな。

とりあえずジュースとポテトの サイズを頼んだ。

斎藤はいっぱい食べてきたみたいでジュースだけ。

「暇だから何かしゃべってよ。」

一言そう言つと斎藤が目を輝かせてえんえんとしゃべりはじめた。

またその話がおもしろくって！

いっぱい笑ってしまった。

斎藤って普通におもしろいやつなんだなって思って、
少し見直せた気がした。

「それになっ！そこで近所のおばちゃんがやなあ！」

「うんっ！あ…ちょっと待って??？」

急にケータイの着信音が鳴った。

誰だろ?と見てみるとそれは美香からの電話。

…どうしょ。

今、でれないよ…

もしかしたら斎藤といるのがばれちゃうかもしれないし…

美香に悪いと思いつつも無視することにした。

ゴメンね?美香。

本当に…ごめん。

「誰からやったん??」

目の前には美香の好きな人がキョトンとした顔で私を見つめている。

なんだか、美香を裏切ってしまった気分になった。

私は美香の恋を応援していたのに…

どうして私は美香の好きな人と一緒にいるんだろう???

それには理由があるんだけど…

やっぱりいけないことだ。

そう思っているのに、

「ん？ああ！間違い電話だよ！」

そう笑顔で答える私はどうかしている。

本当にどうしよう…

私…

私…

斎藤のことを好きになりかけてるかもしれない…

なんて単純なんだろう？

たった数時間一緒にいただけなのに。

たった数時間、笑いあっていただけなのに。

こんな気持ちになってる。

…いや、違う。

好きになりかけてなんかない！

なっちゃんいけないんだからっ！

私は友達として斎藤を好きになりかけているだけなんだからっ！

美香が斎藤に抱いている気持ちとは違うのっ！

「あっ！もうこんな時間！映画館いこ！」

「おっ！ホンマやっ！急ごか！」

時刻は5時になっていた。

急いで映画館に足を進める。

なんとか上映時間ギリギリに間に合った。

ほっと、席につく。

「はあ〜！なんとか間に合ったあ！」

「めっちゃんギリギリやなあ…っちゅーか結局これ見るんかい!？」

「いいじゃんいいじゃん」

そうしているうちに映画がはじまった。

内容はごくありきたり。

八代山に登山にきた人達が霊の力によって山からでられなくなった
みたいな感じ。

最初は全然大丈夫だったんだけど…

中盤あたりの幽霊によって次々と登山客の人達が消えていく場面。

どうしょ…

すっごく怖い…

やばい…

この人絶対狙われてるよっ！

予感的中し、ある登山客の背後に血まみれの女の霊が近づいてい
く。

いや…

いやあ…

どうしょ…

私の後ろにもいるかも…

「怖い…よお…」

思わず小さくつぶやいた。

手がガタガタと震えている。

隣で斎藤が溜息をついたのがわかった。

そして震える手がそつと大きな手につつまれる。

びっくりして隣を見ると斎藤がにこつと笑った。

「オレがおるから安心しーや。」

ドキツと心臓の音が大きくなった。

頬に熱がのぼっていく。

どうしょ…

すっごく恥ずかしい…

けど…

隣に斎藤がいる。

そう思ったら恐怖が消えた。

震えはおさまりまた映画に集中する。

それから映画が終わるまで、

斎藤はずっと私の手を握っててくれた。

怖いシーンがあるたびに、

斎藤の手の暖かさを確認することで恐怖が消えていった。

そして映画が終わって…

「はあ…終わった…」

どっと大きなため息をついてしまった。

すっごく怖かった…

けど、見てよかった

「ったく…途中で本気でおびえ出すからびっくりするわ。」

斎藤も大きなため息をつく。

「だって怖かったんだもん…」

席を立とうとして、手がまだ握られたままだということに気がついた。

「あっ…手…」

慌てて離そうとすると斎藤がそれを拒むかのようにぎゅっと私の手

を握り締めた。

「外は夜やで？また怖なるやろっから家つくまでっないどったるわ。」

「

「えっ！で、でも…」

たしかに…

外はきつと真っ暗。

絶対に怖くなるに決まってる。

「…ありがとう。」

うつむきながら小さくつぶやいた。

「ええよ。」

斎藤が苦笑しながら答える。

そのまま外に出てみると本当にあたりは真っ暗になっていた。

時刻は8時。

まあ暗いのは当然か。

とりあえず待ち合わせをした公園まで一緒に帰ることになった。

斎藤はさっきとかわらさずペラペラとしゃべっていたが私はなんだか

恥ずかしくってさっきのように話せなかった。

そんなまま公園について…

「じゃ、また明日ね。」

「おおっ！じゃあな！」

斎藤の大きな手が私の手から離れていく。

手からぬくもりが消えて、急に冷たくなった気がした。

…冷たいなあ…

ぼんやりとつないでいた左手を見つめていると斎藤が小さく笑った。

「なんや？やっぱ1人で帰るんは怖いんか？」

「ち、違つよ！」

慌てて否定している間に、冷えた左手がまた温かい手に包まれる。

「しゃーない。家まで送つたるか！」

「えっ！で、でも…」

「ええから！」

有無を言わず斎藤は私の手をひっぱる。

「…ゴメン。ありがとね。」

「これでオレを好きになってくれたら早くも目標達成やけどなー！」

斎藤は笑いながら言った。

ズキッ！

胸が刺すような痛みに襲われる。

…そうだ。

斎藤は私をおとすためにやさしくしてるだけなんだ…

私といるのはただの遊び…

それなのに…

本気にとってしまっよ。

やめて？

私にやさしくしないで。

本当にあなたを好きになってしまっよ。

あなたを好きになってしまったら…

美香を裏切ることになる。

美香ともう親友ではいられなくなってしまっ。

だからあなたを好きになんてなっではいけない。

それなのに…

あなたが私にやさしくするから…

笑顔をむけたりするから…

私はあなたに恋をしてしまっ。

4話 気持ちの変化 理沙side（後書き）

もうほんとよくわかりません…

まずマクドでどんだけしゃべってるんだよって話ですよ…

しかもすっごく急展開。

えっ？理沙ってどこで斎藤のことが好きになったの！？って感じですよ…

ホント…へたくそですいません（涙

4話 映画 達也side

日曜日になった。

待ち合わせの時間まであと7分。

いつもは友達と遊びに行くときでも10分は遅れるが今日はなんとなく5分まえにつく予定できた。

のんびり鼻歌を歌いながら歩いていると待ち合わせの公園についた。

立川はもうきてるかなあ??

まだきてへんと思うけど…

ふと公園のベンチを見ると1人の少女が座っていた。

ん??…あれ、立川と違う!?

めっちゃ早いやん!

なんかオレが遅れたみたいや!

なんとなく慌てて少し早足で立川に近づく。

「おっ!立川!早いなあ!」

うつむいていた立川は顔をあげて何かを言いかけたが途中で止めた。

そして苦虫をかみつぶしたような顔をする。

…???

あつ！もしかして『遅い！』とか言いたかったんとちゃうか？？

一応5分前行動やで〜！

ちゅーか立川は何分前にきてたんや？

「今ついたばつかだよ？じゃ、いこつか。」

オレの心を見透かしたように慌てて言い、スタスタと歩いていく。

絶対めっちゃはよきとったな…

なんかしらんけどめっちゃ早足やし…

もしかして…

オレと2人きりで緊張しとるんかっ!？

なんか変にうれしくなった。

その間にもなぜか早足な立川との距離はだんだん大きくなり慌てて隣に並んだ。

なんかしゃべることないかなあ…？

じっと立川を観察してみる。

そういえば…

当然やけど今日私服やなあ。

白とピンクで統一してる感じや。

「立川私服めっちゃ可愛いなあ！」

「えっ!?!」

立川の頬がわずかに赤くなった。

お〜お〜!

照れてるんとちゃうか?

こんな言われるんはなれてないみたいやな!

まあオレも言うのなれてないけど。

けど立川はうれしそうに笑うと、

「ありがとう! 斎藤もかっこいいよ!」

…???

あれ?

今なんて言った?

オレもかっこいいって??

「ち、違う!今のウソっ!」

立川は気づいたのか慌てて訂正しようとする。

けど、いつてもうたなあ?

もう遅いでえ??

意地悪くにやにやと笑った。

「おお?もしかしてオレの私服で惚れてもったか?」

「そ、そんなわけではないでしょ!」

立川はてんぱりながらもそっけなく答えるような素振りをした。

いやいや奥さん…

めっちゃてんぱってますよ??(笑)

立川は恥ずかしくなってきたのかすぐに話題を変えてきた。

もうちょっとつっこんだろかなと思ったけどかわいそうになってきたから立川のペースにのってやることにする。

そんな感じでいつのまにか映画館に着いた。

「そういえば今日はおまえが好きな映画を見るんやっただな??」

「うんっ!」

立川は元気良く首を縦にふって上映時刻表を見にいった。

しばらくそれを見つめて…

「って!ええ!??」

急にちよつと大きめの声をあげた。

「どないしたんや??」

立川の横から時刻表を覗き込む。

「最悪っ!最悪なのっ!」

立川がこの世の終わりとも言いたげな顔でうったえてくる。

いや、そんな顔されてもやなあ…

「だから何が??」

なんで最悪なんかがわからへんのやけど…

「私が見たい映画の今から一番はやい上映時間が6時からなのっ!」

「はあ!??6時からあ!??」

6時で…!

めっちゃ遅いやないか!

そんなん時間まだまだあるし家帰るのもめっちゃおそなるし…

そりゃあみられへんな…

慰めるように立川の肩に手をおいた。

「まっ、どんまいやな。ちなみに何の映画が見たかったんや?」

そつえばまだ教えてもらってなかったな。

「…『八代山幽霊物語』」

「ええ!?!?どんなやねん!?!?」

驚いて思わず後ずさってしまった。

そんなあらかさまに怖そうなやつよう見たいと思うなあ!?!?

「けど見られへん時間でよかったかもな。オレそんなんみたないわ

…」

オレ怖い話とか嫌いやし…

「いや、見る。」

「はっ?」

もしも〜し、立川さーん。

今信じられへん言葉が聞こえた気しますよ??

「見るったら見るの!」

立川は半場やけくそだった。

「はあ!?!今から何時間あると思ってんねん?!?!」

そんなやけくそになられてもムリなもんはムリやる!

「すみません。学生2枚で。」

オレがてんぱっているうちに立川は勝手にチケットを買っていた。

「何勝手に買ってるんや!」

買ってもうたらもう見るしかないやんけっ!

「いいから!時間つぶしにいこ!」

立川はオレの腕をぐいぐいと引っ張って引きずっていく。

な、なんでオレから誘ったのに立川のペースになってるんやあ…

よりもよって『八代山幽霊物語』を見るために1、000円ださなあかんとは…

…最悪や（ガクッ

立川はオレをひっぱりながらマクドに入って行く。

なるほど…

たしかに時間つぶすにはええかもしれんけど…

オレ昼いっぱい食べたばっかしやからなんも食べられへんねんけど…

立川はおかまいなしでポテトの とジュースをたのむ。

ここでオレがたのまへんのもあれやから一応ジュースだけたのんで
おいた。

「暇だから何かしゃべってよ。」

ぱくぱくとおいしそうにポテトを食べながら立川が言った。

おっ！

このオレになんかししゃべれやって!?

ええで〜！

関西人のしゃべり力見せたる！

というわけでオレはえんえんとしゃべりたおした。

まあ普通やったらオレのしゃべりテクを使っても少しは会話も止ま

ってまうもんやが…

立川としゃべってたらそんなことは一度もなかった。

話がつきそうになっても立川がフォローするようにしゃべって…

一緒に笑って…

時間も気にせずにしゃべり続けた。

「それになっ！そこで近所のおばちゃんかなあ！」

「うんっ！あ…ちよっと待って??」

立川のケータイの着信音が鳴る。

あ…電話か。

立川はケータイを見てほんの少し止まった。

けどでようとはせずすぐにケータイをカバンの中にしまう。

「誰からやったん??」

立川は少し固まるとにこつと笑った。

「ん？ああ！間違い電話だよ！」

ああ、間違い電話か。

けどで へんかったのになんでそんなんわかつたんやろ？

…なんかでたら都合の悪い相手やったんかな？？

たとえば…

あいつ、三浦とか。

「あつ！もうこんな時間！映画館いこ！」

立川はごまかすように時計を見て立ち上がった。

「おっ！ホンマやつ！急ごか！」

オレも追及はせずに立川に合わせる。

時刻はもう5時。

急いで映画館に向かう。

なんとかぎりぎりで間に合った。

「はあ〜！なんとか間に合ったあ！」

立川が息をつきながら腰をおろす。

「めっちゃギリギリやなあ…つちゅーか結局これ見るんかい!？」

なんか結局オレ流されてるやんっ！

「いいじゃんいいじゃん」

いや…

ええことないで…？

小さくつつこんでいる間にも映画は始まっていた。

内容はホラー映画には定番な物。

山に迷い込んだ登山客が霊のせいで山からでられへんようになっ
…って感じや。

どうしよ…

オレ以外に怖がりやからなあ…

めっちゃおびえてまうかも。

けど見ているうちにそんなことは思わなくなってきた。

だってめっちゃしょーもないからな。

一言でいえば子供騙しって感じや。

それやのに中盤らへんの登山客が次々と消えていくとここで立川に変
化が現れ始めた。

急に顔が青ざめてカタカタと震えだす。

「怖い…よお…」

しまいにはそうつぶやきだした。

もしかしてこれで怖がったんのか…??

めっちゃ怖がりやん！

ちゅーか怖いんやったら見んなよっ！

はあ…と大きなため息をついた。

そしてそつと震える立川の手を握る。

驚いたのか立川がオレの方を見た。

「オレがおるから安心しーや。」

にこつとほほえむ。

暗がりによくわからなかったが立川の顔が赤く染まったような気がした。

けど、立川の手の震えはおさまった。

おお、なんかしらんけど安心したみたいやな。

良かったわ。

それから映画が終わるまでオレはずっと立川の手を握ってた。

映画が終わり部屋が明るくなって立川がどっと大きなため息をついた。

「はぁ…終わった…」

「まったく…途中で本気でおびえ出すからびっくりするわ。」

ホンマ横で震えられたらめっちゃ焦るからな？

オレの気持ちわかつとつたんか？ホンマにつ！

「だって怖かつたんだもん…」

ドキッ！

すねるようにつぶやく立川を見て思わず心臓の音が大きくなった。

…なんか、可愛いやん。

そのまま席を立とうとする立川。

「あっ…手…」

まだ握ったままの手を見て立川は慌ててそれを離そうとする。

オレはそれを拒むように立川の手を握り締めた。

「外は夜やで？また怖なるやろっから家つくまでつないどつたるわ。」

「

また震えだされても困るしな。

「えっ！で、でも…」

立川は何か反論しようとしたのか口を開いたが結局つつむきながら答えた。

「…ありがとう。」

「ええよ。」

オレは苦笑しながら答える。

外はもう真っ暗になっていた。

もう…

だいぶ暗いなあ。

ホンマに幽霊でそうやわ…

とりあえず待ち合わせの公園まで一緒に行くことになった。

さあ！トーキングタイムや！

待ってましたと言わんばかりに立川に話題をふる。

けど立川はうなずいたり小さく笑うしかなくなった。

…???

何？この空気…

なんか調子狂うねんけど…

そんな感じで歩いているといつのまにか公園についていた。

「じゃ、また明日ね。」

「おおっ！じゃあな！」

手をふって立川の手をはなした。

帰ろうとして立川がその場から動かないことに気づく。

どうしたんやろう…？と思って見てみると、

立川は自分の左手…さっきまでオレとつないでいた手を見てかたまつてた。

それを見て小さく笑う。

「なんや？やっぱ一人で帰るんは怖いんか？」

「ち、違うよー！」

慌てて否定する立川。

そのすきに左手をぎゅっと握った。

「しゃーない。家まで送ったるか！」

「えっ！で、でも…」

「ええから！」

とまどう立川の手を引っ張る。

「…ゴメン。ありがとね。」

立川は頬を赤らめながら言った。

「これでオレを好きになってくれたら早くも目標達成やけどなー！」

オレは笑いながら言う。

立川の表情が変わった。

何かにおしつぶされるかのような表情。

そんな表情の変化に気が付きながら、無視した。

核心したことがある。

立川は今オレのことを好きになりかけてるやろ。

今日の後半からの様子でわかった。

もし立川がオレのことを好きになったって言うてきたらどうする？

そうだったら…

オレはためらいなく立川から離れる。

他の取りまき達と同じ扱いをする。

それで立川がどれだけ傷つこうがオレは知らん。

オレはあの日…

決めたから。

必要以上に女とかかわらんって。

特別な女をつくらんって。

もう2度と…

オレは誰も好きになることはない。

4話 映画 達也side(後書き)

達也sideでちらほらでてきてる重い話。

一応達也には昔何かあったって設定です。

一体何があつたんでしょーねー？

まだ決めてないので(汗

ちなみに！

『八代山幽霊物語』って何…??

5話 気持ち 理沙 side

あの日曜日から1週間がすぎたころ。

私にはすっかり忘れていたことがあった…

実は今はテスト2週間前なのです。

それなのに私ったら…

日曜日も勉強もしないで遊びに行っただし…

何してんだろ…??

自分の不甲斐なさにあきれてしまった。

…よしっ！

今からでも遅くはないっ！

って、まえにもこんなことあったよね…??

いや、けど今度はまえとは違う！

立川理沙！

本気でテスト勉強に取り組みます！

そう誓いながらカバンをせおう。

よし、このまま図書室に直行だっ！

図書室にはなぜか人がいなかった。

…???

なんでだろ…???

あっ！そっか！

みんな家で勉強してるんだねっ！

さっすがあ！…じゃないや…

とにかく勉強頑張らなくちゃ！

そうシャーペンをとったとき廊下からドタドタドタッ！と大きな音が聞こえてきた。

そして図書室のドアがガラッと開く。

えっ…???

「 斎藤??? 」

斎藤は図書室のドアをそっつと閉めるとドアの影に隠れた。

「 なんているのっ!?!? もし… 」

斎藤が口の前に人差し指を当てて『静かにしろ』と伝えてきた。
言葉を途中で切る。

廊下でざわざわと女の子達の声が聞こえた。

しばらくは声が続いていたがあきらめたのか声は遠くへ消えていった。

それを確認して斎藤ははあっとため息をつきその場に座り込む。

「あゝ！ やつと撒けたあ… ちょっと取りまきに追われとったんや…」

「はあ… 大変だね。」

「しんど…」

そう言いながらも立ち上がり私の前の席に座ってきた。

「それにしてもまた勉強か？」

「えっ？ あっ、うん。だってもうテスト2週間前だよ？」

「そうか… って、ええっ!？」

斎藤はあらかさまに驚いた。

ええっ!？ って…

忘れてたんだ…

「それはやばいな…オレが勉強しても無駄やけど赤点とつたらオカ
ンに怒られるしなあ…」

頭をかきながら悩みだす斎藤。

私はクスツと笑った。

「ちよつとでも勉強したら違つてしょ！一緒に勉強しよつか！」

「…せやな。少しは努力してみるか…せやかてオレが勉強してもや
なあ…」

斎藤はぶつぶつ言いながらもカバンからノートや教科書を取り出し
始めた。

よしし！

私も勉強するぞ〜！

気合いを入れなおして数学の問題を見つめる。

集中して勉強にはげんでいるといつのまにか下校時刻が近づいてい
た。

もうこんな時間か…

そろそろ帰らなきゃね。

「斎藤、そろそろ帰らなきゃだよ？」

ノートや教科書をカバンに詰めながら言った。

けど返事は返ってこない。

…???

無視ですか??

ちょっといらっとして斎藤の方を見る。

「って…寝てるし…」

斎藤はいつからか夢の中だった。

ノートを見てみると半分もまとめていない。

いつから寝てたんだよ…

けど…

きれいな寝顔…

じっと斎藤の顔を見つめた。

いつもの大きな目は閉じられてかわりに長いまつ毛が目を守っている。

まあまあ引き締まっているはずの口元はぼかっと開いて規則正しい息をしていた。

…って私っ！

何まじまじと斎藤の寝顔を観察しちゃってるのよっ！

いけない、いけない…

ふと手を胸に当ててみた。

…ドキドキしてる。

どうしょ…

私斎藤のことを好きになりかけているなんかじゃない…

私、斎藤のことを好きになっちゃったんだ。

だって今だってすっかり勉強していたようで、

目の前に斎藤がいたから全然集中できてなかった。

最近の授業中を思い返して見ても、ずっと斎藤のことを考えていた。

私は美香を裏切ってしまったんだ。

けど、好きになってしまったんだもん。

斎藤がいけないんだ。

私をおとそうなんてするから。

私は本当にあなたを好きになってしまった。

もし…この気持ちを斎藤に伝えたら…

どうなるだろう…??

「…ん、あ、ああ、寝てたわ。」

斎藤が目を覚ました。

慌てて斎藤から視線をそらす。

「…???どうしたん？立川。」

「別につ！何にもないよっ！」

斎藤はいぶかしげに私を見る。

「あつ！もう下校時間すぎてる！はやくかえろっ！」

「お、ホンマや。かえろか。」

慌てて図書室をでた。

斎藤もおおきなあくびをしながら私についてくる。

「…ねえ、斎藤。」

「なんや？」

「もし…私が斎藤のことを好きになっちゃったって言ったらどうする??」

そのとき、

私はどんな答えを期待していたんだろう?

どんな答えを求めていたんだろう?

けど、斎藤は絶望的な言葉を私に浴びせた。

「そりゃあ…おまえもただの取りまきとして扱うようになる、かな?」

「えっ…」

一瞬信じられなかった。

だって心のどこかで私だけは特別だって思ってたから。

けど…

結局違ったんだ。

斎藤にとって私は…

他のたくさん女の子達と一緒になんだ…

「なんで?もしかしてホンマに好きになってもうたとか?」

斎藤が笑いながら聞いてきた。

私は慌てて首をふる。

「い、いやっ！そんなわけないでしょ！聞いてみただけだよ！じゃあまたねっ！」

斎藤に手をふるとう家に向かって走った。

瞳からは涙がぼろぼろとあふれでている。

私の…バカ…！

変な期待なんてするから…

こんなに悲しいんだっ！

もともと斎藤のことは好きになっちゃいけなかったのに…

斎藤は美香の好きな人だったんだから！

けど…

好きになっちゃった。

今更この気持ちを変えることなんてできないっ！

家についてお母さんにただいまも言わず部屋に入った。

そっつてスピードに遊び込む。

……

いや…

他の女の子達みたいに…

美香みたいに…

名前も覚えてもらえないような存在になるのはいや…

あんなふうにつつとっしがられるような存在になるのはいや…

今みたいに、

たとえ遊びだとしても、

私の気を引くのに必至になっていて欲しい。

私だけを見ていて欲しい。

どうすれば…

このままでいられる???

…この気持ちを斎藤に伝えなければいい。

このままだと斎藤もそのうち私をおとすという遊びにあきるかもしれない。

けど、少しでもこのままでいれる。

斎藤に見てもらえる。

この気持ちは…

絶対に知られてはいけない。

5話 気持ち 理沙 side (後書き)

空白の一週間ができてしまいました。

それまでにいつたい何があったんだ！

そしてまたまた急展開です。

いきなり理沙が達也のことを好きになりました(汗
なんとというかいきなり達也が大好きになってます；

5話 核心 達也 side

立川とよおわからん映画を見に行ってから一週間がすぎた。

まあその間にもオレはがんばって立川にアタック(?)してたわけ
で…

そろそろ立川もオレに惚れたんとちゃうかな?と思うねんけど…

なかなか言い出してこーへんねんなあ…

ちゅーかめっちゃしぶといやつかもしれない…

それになんかかわいそうになってきたなあ…

だって立川がオレのことを好きになったらもうそこで終わりやろ?

…けど、

あきらめるわけにはいかん。

もしここで立川をおとすんをあきらめたら結局オレは外見だけの男
ってことになるから。

そんな感じで今日も立川にアタックしようと思ってるんや。

ちなみに…

今の状況を一言で言つとやばい。

「斎藤くーんっ!!」

後ろからはたくさん取りまきの群れ。

ただいま追っつてから逃げている状態や。

あゝ!もうしんどいねんけどっ!

とりあえずどっかに逃げ込まな…あっ!

ちよつど廊下を曲がったところに図書室があった。

慌ててそこに入りドアを閉める。

「斎藤??」

すぐそばから声がした。

この声は…

立川??

声の方を見ると立川が唾然とした様子でオレを見ている。

「なんているのっ!?!もし…」

立川が大きな声でしゃべりだした。

慌ててしーっと口の前に人差し指をあてる。

静かにしてや…

ばれたら困るんや…

必至にアイコンタクトで伝えようと努力してみる。

なんとか伝わったのか立川の言葉が途中で止まった。

廊下でざわざわと女子の声が聞こえた。

しばらく声は続いていたがやがて声は遠くに消えていく。

それを確認するとはあ！と息をついた。

ドカツとその場に座り込む。

とりあえず…

安心や…

「あゝ！ やつと撒けたあ… ちょっと取りまきに追われとつたんや…」

「はあ… 大変だね。」

「しんじ…」

めっちゃしんどいけど…

なんかちよつと立川もおることやし…

もうひと頑張りや。

なんとか立ち上がって立川の前の席に座った。

「それにしてもまた勉強か？」

たしかこのまえも勉強してたよな…

勉強熱心でえらい！感心や！

「えっ？あつ、うん。だってもうテスト2週間前だよ？」

「そうか…って、ええっ!？」

思わずおもいつきり驚いてしまった。

そ、そうやったあ!!

すっかり忘れとったがな…

「それはやばいな…オレが勉強しても無駄やけど赤点とったらオカ
ンに怒られるしなあ…」

怒られたらケータイ没収やからなあ…

ったく、

勝手に人のケータイばいばいとりあげるなっちゅーねん。

あっちゃー！

ホンマに勉強してないわ…

焦って頭をぼりぼりとかく。

それを見て立川がクスツと小さく笑った。

「ちよつとでも勉強したら違うでしょ！一緒に勉強しよっか！」

「…せやな。少しは努力してみるか…せやかてオレが勉強してもやなあ…」

結局同じやと思うけどなあ…

まあとりあえず勉強しよか。

カバンの中からノートと教科書を取り出す。

立川は数学の問題にとりかかりはじめた。

よっしやっ！

オレもしっかりまとめるで！

気合いを入れてシャーペンを持ったが…

ほんの少しまとめたところで突如眠気が襲ってきた。

や…やばい…

眠い…

いや、けど勉強しな…

…グー（爆睡）

あっという間に夢の世界に入ってしまった。

……………んっ???

何か視線を感じて目を覚ました。

ゆっくりと目を開くと立川がじっとオレを見ている。

「…ん、あ、ああ、寝てたわ。」

小さくつぶやくと立川はオレが起きたのに気づいて慌てて視線をそらした。

「…???.?どうしたん？立川。」

「別にっ！何にもないよっ！」

慌てて答える立川。

それをいぶかし気に見る。

「あつ！もう下校時間すぎてる！はやくかえろっ！」

立川はごまかすようにきりだした。

「お、ホンマや。かえるか。」

まあ寝ぼけて頭もぼんやりとしていたから流されてやることにした。

立川は慌てた様子で図書室をでる。

オレはその後をのんびりつついていった。

途中で大きなあくびをする。

ふあああ…

まだ眠いなあ…

家帰ったらもうすぐ寝よ。

そんなどうでもいいようなことを思っているよ、

「…ねえ、斎藤。」

突然立川に名前を呼ばれた。

なんか知らんけどかなり真剣な声。

「なんや？」

立川は迷うように視線をそらすと腹をくくったように言った。

「もし…私が斎藤のことを好きになっちゃったって言ったらどうする???」

もし立川がオレのことを好きになったら???

そりゃあ…きまっとる。

「そりゃあ…おまえもただの取りまきとして扱っようになる、かな」

「えっ…」

立川の顔が固まった。

瞳に涙がたまっていく。

…???

なんでこんな顔するんや?

しかもいきなりこんなこと聞いてくるとか…

なんかあつたんやるか…

そう思ったところでふと検討がついた。

もしかして…

「なんで？もしかしてホンマに好きになってもったとか？」

ふざけるように笑って言った。

立川は慌てて首をふる。

「い、いやっ！そんなわけないでしょ！聞いてみただけだよ！じゃあまたねっ！」

そう言い残すとそのまま走って学校をでていった。

後ろ姿を見守りながら小さく皮肉気に笑う。

……核心した。

立川はオレのことが好きになったんや。

これで立川がオレに向かって好きと言えば遊びはしまいや。

さっきもいったように立川も取りまき達と同じ扱いをする……

……

…オレにはそれができるやろうか？

立川を特別視せんと他の取りまき達と一緒に扱うことができるやるか？

…不安になってくる。

だつてやで…???

ホンマの話、立川はあいつに似ている。

立川のことをおとそうと思ったのも、立川にあいつの影を重ねていただけなんかもしれへん。

だから立川を外見じゃなくて中身でおとすことができれば、

あいつにオレは外見だけの男やないって証明できると思ったんや。

けど、

これだけは言える。

オレは立川に恋愛感情を抱いていない。

それはあの日もう特別な女をつくらへんって決めたからだけじゃない。

そんな、決めたからとか、

かっこいい理由じゃない。

オレは単純に…

あいつのことを忘れられへんだけなんや…

5話 核心 達也 side (後書き)

やっと『あいつ』の正体が固まってきました！
もうちよっとしたらその人を登場させてみようかな…

6話 ショック 理沙 side

昼休み。

ざわざわと教室が話声に包まれている中、

私は1人ぼんやりと外の景色を見ていた。

「りーさっ!」

そんな私の肩を美香がポンッと叩く。

「…美香?」

ふりむいて見ると美香がうれしそうに笑っている。

「ねえねえ!聞いてよ!すごくいいことあったんだよ!?!」

「いいこと…?!?」

美香は本当にうれしそうに頬を少し染めながら笑顔で言った。

「私、今日斎藤さんと少ししゃべったんだっ!」

ドキッ!

斎藤の名前を聞くだけで心臓が高鳴った。

同時によくわからない嫉妬心がわいてくる。

「なんてしゃべったの??」

気がつかないうちに怒ったような声をだしていた私。

美香はそんなことには気がつかず笑顔のまま。

「うん! えつとねえ…勉強してるみたいだったから『がんばってね!』っていったの!」

へえ…

あいつ、ちゃんと勉強してるんだ…

「そしたらね! 斎藤くんが『ありがとう! がんばるわ!』って笑いかけてくれたんだ!」

美香の目はキラキラと輝いている。

…なんだ。

話したってそれだけか…

それにしても…

美香は本当に、斎藤のことが大好きなんだ。

きっと純粹に斎藤に恋してるんだね。

そう思うとズキッと胸が刺すような痛みが襲った。

…ゴメン。

私、美香の恋を応援しているつもりだったのに、

斎藤のことが好きになっちゃったんだ。

今だって…

美香が斎藤と少しでも話したことに嫉妬してた。

美香が斎藤と本当に少ししか話していないことを確認して安心して美香に勝った気でいた私がいた。

斎藤を好きになってもいいことなんて何も無いのに…

どうしようもない思いがあふれだすんだ。

「じゅめんね…美香。」

「んっ？何が??」

不思議そうに首をかしげる美香。

…美香に、言えるわけがない。

「うつん！なんでもないよ！」

私はにっこりと笑って首をふった。

そして放課後。

勉強しようと思つたけど、

図書室に行くと思つたけど、

なんとなく会いづらくて、

斎藤と話すとこの気持ちがばれてしまいそうで、

それが怖くって、

斎藤に会わないうちに家に帰ろうと足をはやめた。

早足で生徒玄関をでる。

よかった…

斎藤と会わないですんだ…

なんとなく安心してほっと息をつき足を進める速度をおとした。

そして校門をでようとしたとき…

「立川っ！」

後ろから呼びとめられた。

この声は…

「…斎藤？」

ふりかえるとそこには息をきらして立っている斎藤の姿。

「探しとってんで！今日一回も会ってなかったからな！」

…それは、

私が斎藤のことをさけていたから…

「一緒にかえろか！」

そう言っつて笑顔を見せてくれる斎藤。

どうしよう。

一緒に帰ったらまずいよね…

美香にはれるかもしれないし…

それに他の女の子達にも…

斎藤と一緒に帰れば他の女の子達が傷つくことになってしまう…

けど、私は…

「うん！いいよ。」

笑顔でうなずいていた。

だって、やっぱり少しでも斎藤と一緒にいたいから。

この気持ちがばれるのは…

…きつと時間の問題だから。

私達はゆっくりと並んで歩いた。

斎藤はにこにこいろいろな話をしてくれる。

その話を聞くのもおもしろかった。

けど、

私にはどうしても聞きたいことがあるんだ。

「…ねえ、斎藤。」

「ん？なんや？」

…これくらい聞いても、この気持ちはばれないよね…???

「斎藤ってさ、好きな人とかっているの？」

いるわけない。

だって、もしいたら私をおとそうなんてことはしゅじょしなはず。

けど、

なんとなく不安になって聞いてみた。

だってもしいないんだったら…

私にもチャンスがあるんじゃないかな？って思ったから。

斎藤は意地悪く笑って私を見た。

「おまえやで？」

ドキッ！

胸が高鳴る。

ウソ…冗談だよね？？

なんとなく期待をしてしまった。

「…っつのはウソで…おらんな。」

その言葉でズーンとテンションが下がる。

…まあ、わかってたけどさ。

「…けど、昔はおった。」

「えっ??？」

斎藤を見上げるとその顔は少し朱に染まっていた。

「雪乃っていうやつ。いつこ上で幼なじみやってん。」

雪乃…さん。

それが斎藤の昔好きだった人？

「その人ってどんな人だったの？」

斎藤の目が輝いた。

「めっちゃきれいでおもしろいやつやった！たよりになったし、ねえちゃんみたいな存在やったんや！」

その人のことを話す斎藤の顔はまるで小さな子供みただった。

無邪気で輝く笑顔は美香が斎藤の話をするときと同じ。

直感した。

嗚呼、

斎藤は本気で雪乃さんのことが好きだったんだ。

きつと…今も。

「斎藤は今はその人のこと好きじゃないの？」

斎藤の瞳から輝きが消えた。

「…せやな。好きと…ちゃう。あいつはオレを裏切ったから。」

寂しそうな表情。

私…聞いちゃいけないこと聞いちゃったのかな…??

「あいつだけはオレの中身を見てくれると思ってた。けど…結局あいつも他のやつらと同じやったんや。」

「齋藤…」

うつむいてしまっていて、齋藤の表情が見えない。

けど、声はふるえていた。

きつと、

雪乃さんは齋藤にとってそれだけ大切で、

裏切られたことはすごいショックなことだったんだ。

「だからオレは決めたんや。もうオレは女を好きにならん、特別な女をつくらんってな。」

その声は力強くて、本当にそう誓ったんだとわかった。

ズキッ！

胸がしめつけられる。

…私、バカだ。

斎藤に好きな人がいないのには理由があったからなの…

私にもチャンスがあるなかもなんて…

本当にバカの考え。

けど…

「じゃあなんで私を惚れさせようなんていいだしたの？」

それもある意味特別なんじゃないの？

斎藤はうつむいていた顔をあげにっこりと私に笑いかける。

「おまえはあいつに似てるねん。だからこんなことしてるんかもしれへん。」

「…そっか。」

じわっと涙があふれでてきた。

その涙を隠そうとうつむいて髪で表情を隠す。

「じゃあ私、はやく帰らなきゃいけないから。」

「えっ？ちよ、どっしたんや？」

斎藤の言葉も無視して家に向かって早足で歩く。

涙が頬に流れおちた。

昨日といい、今日といい、私はないてばっかだな…。

けど仕方ないよ。

だってわかつちやったもん。

私は雪乃さんには勝てない。

頭に浮かぶのは、

斎藤の無邪気な笑顔。

悲しそうな顔。

決意のこもった声。

好きな人がいないなんてウソじゃない。

ほら、

斎藤はこんなにもまだ雪乃さんのことが好き。

私のつけいる隙なんて全然ないじゃない。

…雪乃さんがうらやましい。

こんなにも斎藤に思ってもらえるんだから。

雪乃さんはずるいよ。

私はこんなにも斎藤のことを思っているのに…

私は斎藤にこれっぽっちも思ってもらえない。

6話 ショック 理沙 *side* (後書き)

もうわけわかんないです… (涙)

雪乃さんって誰だよっ!?

まあその人のことは達也 *side* で詳しく説明するといじりやで…
意味不明の文章ですいません…

6話 思い出 達也 side

下校時間。

カバンを背負いながらふと今日立川に会ってないなと思った。

うん…

なんか避けられてる気がするんやけどなあ…

ま、ええや。

とりあえずさがそ。

放課後やったら…

図書室とかか？

そんな感じで立川がいきそうな場所を探してみたが立川の姿はない。

もう、帰ってもうたんかな？？

そう思い窓の外を見ると生徒玄関をでようとする立川の姿が見えた。

おった！！

急いで階段をかけおり外にでる。

「立川っ！」

校門をでようとする立川に向かって大声で呼びかけた。

「…斎藤？」

立川が目を見開いてオレを見る。

「探しとってんで！今日一回も会ってなかったからな！」

立川は何も言わず目をふせる。

…???

どうしたんやろ？

なんか元気ない気がするけど…

「一緒にかえるか！」

とりあえず立川に笑いかけた。

立川は目をふせたまましばらく考えていたようだったが、

やがて顔をあげ笑顔でうなずいた。

「うん！いいよ。」

オレ達はゆっくりと並んで歩いた。

しゃべりながらふと思う。

…なんとなく立川の様子がおかしい。

オレがどんな話をして立川はむりに笑ってあいづちを打っただけ。
ときどき悲しそうにオレを見る。

立川がどんなことを考えているのかはすぐにわかった。

けど、あえてその気持ちは無視する。

「…ねえ、斎藤。」

立川が小さな声でオレに呼びかけてきた。

「ん？なんや？」

じつと真剣にオレの目を見つめる。

「斎藤ってさ、好きな人とかっているの？」

好きな人？？

なんでいきなりそんなん…

ああ、そうか。

「おまえやで？」

オレは意地悪く笑ってみせた。

立川の頬が赤く染まる。

こいつはオレのことが好きなんやっただな。

ばれてないと思ってるんかもしれんが…

こんなこと聞いてくるってどこでもつぶればれやで？

「…っつてのはウソで…おらんな。」

立川があらかじめさまに落ち込んだ。

おもしろいやつやなあ（笑

………好きなやつか。

「…けど、昔はおった。」

「えっ??？」

立川がきよとんとしてオレを見上げる。

「雪乃っていうやつ。いつこ上で幼なじみやってん。」

思い出すだけで笑顔が見えてきそうだった。

好きで、好きで、大好きだったあの笑顔。

「その人ってどんな人だったの？」

立川の間で雪乃の姿が鮮明に浮かび上がってくる。

茶髪の肩までのびた髪。

大きな目。

整った顔立ち。

そして、

あの笑顔。

「めっちゃきれいでおもろいやつやった！たよりになったし、ねえちゃんみたいな存在やったんや！」

そうや…

あいつはどんなに辛いことがあっても笑ってた。

いつもいつも笑っていて…

オレが泣いている時もそばにいてくれて…

何度あの笑顔にはげまされたことやろう？

オレにとってあいつはホンマにねえちゃんみたいで…

あこがれの存在やった。

その気持ちが好きにかわったんはいつからやったやろっ…??

「斎藤は今はその人のこと好きじゃないの?」

…!!

オレは…まだあいつのことが…

いや、違う。

あいつは…

「…せやな。好きと…ちゃう。あいつはオレを裏切ったから。」

あの日の記憶が蘇る。

雪乃に裏切られた日。

「あいつだけはオレの中身を見てくれると思ってた。けど…結局あいつも他のやつらと同じやったんや。」

小学校の高学年になったころからやろか。

いつのまにか、オレのまわりには女子がいっぱい集まってくるようになった。

そのころにはもうオレは雪乃のことが好きやったから…

まわりの女子なんて眼中になかった。

そして雪乃が中学に入ったとき、

オレは雪乃に告白した。

雪乃は笑顔でうなずいてくれて、

オレ達は付き合うことになった。

けどオレが中学に入ったとき。

自分がすごくモテることに気がついた。

それでオレは調子にのるようになったんや。

女子の相手をすることに夢中になって…

それが楽しくて…

雪乃の相手なんてする暇はなかった。

けど、それでも雪乃は笑ってたから…

オレは雪乃の気持ちなんて考えてなかった。

そんなとき…

中学にオレよりもかっこいいやつが転校してきた。

オレに集まっていた女子達は全部そいつのもとにいき、

はじめてオレのまわりに集まってきたやつらはオレの外見しかみていなかったことに気がついた。

誰もオレ自身が好きなんやなくて、オレのルックスが好きやったんや。

けど雪乃は変わらないでいてくれた。

かわらずオレのそばにいてくれた。

だからオレは雪乃だけは本当のオレを好きでいてくれたんや、と思
った。

それなのに…

それなのに…

雪乃は結局転校してきたやつのところへ行った。

『もう達也と付き合ってもステータスにはならないって気づいた
んだ。だって達也より三上くんの方がかっこいいから。』

オレにそう言い残して。

…結局雪乃にとってオレと付き合うことは自分のステータスのため
やったんや。

雪乃がオレに向けてくれていた笑顔も全部ウソやったんや。

雪乃も…

結局オレを外見で判断してたんや…

「齋藤…」

「だからオレは決めたんや。もうオレは女を好きにならん、特別な女をつくらんってな。」

もうあんな悲しい思いはしたくないから。

また裏切られるんが怖いから。

「じゃあなんで私を惚れさせようなんていいだしたの？」

立川がつぶやくように問いかけてきた。

せやな。

たしかにそれは特別な女をつくったことになるかもしれん。

「おまえはあいつに似てるねん。だからこんなことしてるんかもしれへん。」

立川…

おまえはホンマに雪乃に似ているから…

そうや。

オレはおまえとおるとき、いつも雪乃とおるつもりやった。

おまえの笑顔は、雪乃に似ていた。

八八…

なんや、

オレは結局ずっと雪乃のことを思ってたんや。

オレはまだ、

こんなにも雪乃のことが好きなんや。

けど忘れなあかん。

思い出したら辛くなるだけやから。

「…そっか。」

立川はうつむきながらつぶやいた。

「じゃあ私、はやく帰らなきゃいけないから。」

「えっ？ちよ、どうしたんや？」

立川はオレの言葉を無視して早足で家に向かっていく。

後を追いかけてよとしてふとだしかけた足が止まった。

「達也。」

なつかしい声がオレの名を呼ぶ。

この声は…

「雪…乃…??」

立川と入れ替わるように雪乃がオレの方に向かってきた。

6話 思い出 達也side (後書き)

一応達也の過去の話のつもりです…
むりやりいれました。

ほんとむりやりですいません；

しかもわけわかんないですし… (涙

最後にまさかの雪乃さん登場ですっ！

7話 再会 達也 side

「ひさしぶりやね。達也。」

そう言つて雪乃はオレに笑いかけた。

関西弁が少し混じつた声。

懐かしくて、同時に悲しくなった。

「…今更、何や。」

会えてうれしいはずなのに。

再会の言葉が先のはずやのに。

冷たい声を投げかけてしまう。

雪乃は振り返つて立川を見た。

「あの子…達也の新しい彼女?？」

「おまえには関係ないやろ。」

そう言つて雪乃に背をむけた。

もう雪乃の顔を見たくない。

辛くなるから。

「あの子…泣いてた。また女の子を傷つけたんだ。」

立川…

泣いてたんや。

オレは傷つけることなんてしてへんと思うけどな。

けどオレにはどうでもいいこと。

どれだけ傷つけてしまおうと知らん。

「どっかたってや。なんで今更オレんとこくるんや。」

後ろで雪乃が小さく笑う声が聞こえた。

「今更って…ウチは達也に謝りたかったんやよ?」

謝るって…

何を謝るって言うんや…

そんなん…

「謝られたって知らん。」

すねたように言つと雪乃がくすくすと笑った。

そしてふわりと後ろからオレを抱きしめる。

「っ!!」

振り払ってしまおうと思ったが体は逆におとなしく雪乃に抱きしめられていた。

雪乃はオレの肩に顔をのせて耳元で囁くように言う。

「…達也はウチのことを嫌いになったん？」

「そんなわけ…あらへん。」

雪乃のことが嫌いになれるわけがない。

あんだけ好きやったやつをそう簡単に忘れられるわけがない。

「ウチも…まだ達也のことが好きやねん。」

ドキッ!

心臓が高鳴った。

けど…

そんなわけない。

「…ウソや。」

だっておまえはオレに言ったやんか。

三上の方がかつこいいからオレはやめるって。

おまえはステータスのためにオレと付き合ってたんやろ？

それやのにオレのことが好きなのじゃない。

「信じて？ウチはほんまに達也のことが好き。だからこうしてこいまで会いに来た。」

心が揺れ動く。

信じたらあかんと思っ気持ちと…

雪乃を信じきってしまったという気持ち。

「…じゃあなんであんなこと言ったん？」

「それは…達也をこらしめてやるつもりだったから。」

…???

こらしめてやるつもりって…

どういふことや？

「達也、あんたが他の女の子としゃべってたとき、ウチがどんな気持ちだったかわかる??？」

肩に粟がおちた。

「すっごい傷ついてたんやよ？だからほんの冗談のつもりやった。なのに…」

雪乃の声が止まった。

けどその先は予想できた。

きつと…

オレが雪乃のことをさけるようになったって言いたかったんや…

「ゴメン。達也…ウチ、そこまで達也が傷つくとは思わなかった…
達也がウチから離れていってしまうとは思わなかった…」

「雪乃…」

そんな言われたら…

せっかく決めたことが…

壊れてしまう。

またおまえを好きになっていってしまう…

「達也…ホンマにゴメンなあ…!!」

雪乃の声はふるえていて肩にはポタポタと大粒の雫がこぼれおちていた。

オレは雪乃の手をふりほどいた。

そして振りかえり自分から雪乃を抱きしめる。

「うん。オレも…ゴメン…」

懐かしい雪乃の香り。

やっぱり…

オレは雪乃のことが好き。

ゴメンなあ。

立川。

せつかくオレのことを好きになってくれたのに…

オレは雪乃のことが好きやねん。

オレはもう…

雪乃のことをはなさへん。

7話 再会 達也side (後書き)

達也と雪乃がひつついてしまいました…

理沙はどうなるんだろう？？

まだまだ考え中ですっ！（汗

短くって内容が適当になってすみません；

ちなみに理沙sideは7話なしです。

8話 告白 理沙 side

『放課後、校門のまえきて欲しいねんけど…ええかな?』

5時間目、斎藤からメールがきた。

不安と期待が胸によぎる。

もしかしたら私の気持ちがばれてしまったのかも…

もしかしたら斎藤の気持ちが私に向いてくれたのかも…

相対する二つの気持ち。

でも二つ目はないだろうな、と思った。

だって昨日の斎藤の言葉でわかってしまったから。

斎藤は忘れられない人がいる。

だから私を好きになってくれるはずがないんだ。

でも、もしかしたら…

どうしても小さな希望を持ってしまつ。

『うん。わかった』

ゆっくりと返事を打った。

そして放課後

先生の話が長引いて帰るのが遅くなってしまった。

斎藤待つてるかもっ!!

そう思い慌てて教室をとびだす。

斎藤は校門のまえでぼんやりと空を見上げていた。

「斎藤!ごめん、遅れたっ!」

斎藤は私に気がついてにこっと笑った。

「ええで。オレもそんなに待ってないから。」

なんとなくその顔は幸せそうにみえた。

なんでだろう…?

考えているうちに斎藤が悲しいことを告げる。

「オレなあ、雪乃ともう一回やり直すことになってん!」

本当に幸せそうな笑顔。

それは斎藤にとっては本当にうれしくって幸せなこと。

「…えっ???」

けど私にとっては残酷な言葉。

…ウソ、でしょ？

斎藤は雪乃さんに裏切られたっていつてたじゃない…？

雪乃さんは斎藤を裏切ったんでしょ…？

それなのに…

どうしていきなり…

「昨日な、おまえが帰ったあとに雪乃に会ったんや。それでオレに謝ってくれてな？ほんでもう一回信じてみようと思った。」

斎藤は頭をかいて頬を少し染めた。

「やっぱり…オレはまだ雪乃のことが好きやから…」

そんな…

そんな…

そんな…

ウソでしょ？

お願い、ウソっていつて？

昨日私に言ったみたいに…

…ウソなわけない。

だって昨日からわかってたことじゃない。

斎藤はまだ雪乃さんのことが好き。

だから雪乃さんが謝ったのなら斎藤はすぐに許してしまうに決まっている。

「だからもうおまえをおとそうとするんはやめるわ。今日はそれがいいたかってん。」

「……………!!」

このときが…来てしまった。

もう、斎藤は私を見てくれなくなるんだ…

私は他の女の子とおんなじになってしまっただ…

なら…

どうせ同じになってしまっただ…

この気持ちをあなたに伝えてしまおう。

どうせ叶わないのはわかっている。

でもね？

伝えてしまわないと胸の中で気持ちがつまってしまっの。

「ねえ斎藤。」

「…??？」

私の気持ち。

しっかりと聞いてよね。

「やめなくてももう終わりだったんだよ？だって私は…」

瞳に涙がたまった。

瞬きすると大粒の涙が頬を伝う。

それを拭きとろうともせずには私は必至で伝えた。

「私は…もう斎藤のことが好きになってたんだからっ！！！」

斎藤の表情に影が入った。

そして言いにくそうにつぶやく。

「…しってた。」

「…へっ??？」

斎藤はしっかりと私の目を見据えた。

「オレはおまえの気持ちに気がついてたんや。」

「う…そ…」

それじゃあ私の気持ちを知っていながら知らないふりしてたの…???

どうして…???

斎藤は目に悲しい光を宿すと私の顔に手をあてて涙をふきとった。

「ごめんなあ…立川…おまえにひどいことしたな。うん。オレを恨んでもいい。」

斎藤の手は温かくって…

冷たかった。

「それでもオレは雪乃のことが好きなんや。」

「…!!…!!…」

知ってるよ…それくらい…!!

それでも…

それでも…

私の頬に触れている斎藤の手をぐっとつかんだ。

「斎藤なんて大っきらい!!」

さっき好きなんていっておいて何言ってるんだろ???

けど頭にはそれしか浮かばなかった。

斎藤の手を振り払うと私は走りだした。

「立川っ!!」

斎藤が私の名前を呼ぶのが聞こえる。

けど振り返らずに走り続けた。

夢中になって、家に帰らなきゃいけないことも忘れて、

脇目もふらずに走り続けた。

走って走って、息が苦しくなって、それでも走り続けた。

斎藤なんてきらい!

きらい!

きらい!!

大っきらい!!

足が動かなくなっ、

近くの公園でフラフラと立ち止まる。

そしてその場に崩れおちた。

涙は止まることなくあふれ出ている。

ひびく...

ひびくよ...

どうせふるならもっとつきはなしてよ...

ひどいやつだったって思わせてよ...

ひどい言葉も平気で言っはすなのに...

どうして謝るの？

どうして私に触れるの？

どうして恨んでもいいなんて言うの...??

私が斎藤を恨めるわけなんてないじゃない...!

ただひとつ私はあなたを好きになってしまった自分を呪う。

はじめからあなたを好きになってもいいことなんてなかった。

してはいけない恋だったんだ。

何度も何度もそう思ったのに…

何度も自分に忠告したのに…

あなたの小さな優しさが…

私をあなたに夢中にさせてしまった。

『それでも雪乃が好きなんや。』??

何それ??

そんなこと言うなら私だって…

私だって…!

斎藤にふられちゃっても…

斎藤の心の中に私がいなくても…

それでも斎藤のことが好きなの!!

もういや…

私はきつと斎藤のことは忘れられないよ…

どうしてくれるの…??

あなたがくだらない遊びなんて始めたせいで…

私はこんなにも辛くて…

苦しみの…

8話 告白 理沙side (後書き)

ふられちゃいました(涙

書いてて本当に思うこと。

理沙はいつからそんなに達也のことが好きになったんだろっ?…っ?…?

8話 拒絶 達也 side

あれから雪乃が言っていたこと。

雪乃の通っている大阪の高校とこの近くとの交流で3日間だけ生徒を交換することになったらしい。

そして雪乃はオレに会うためにそれに進んで参加してくれてんて！

まあ3日やからあと今日合わせて2日しか雪乃とおられへんねんけど…

けど2日間も一緒におれたら上等や！

あ…

オレはホンマに幸せな男やなあ…

そんな感じで今日一日幸せに浸っていた。

そして5時間目の授業のとき。

ふと、あることに気がついた。

…そういえば、このこと立川にも言った方がええかな…??

でもなんて言えばええんやろ？

…とりあえず今日の放課後言うか。

ちなみに今の授業は英語。

今度こそはばれないように立川にメールを打つ。

『放課後、校門のまえきて欲しいねんけど…ええかな?』

しばらくしてから返事がきた。

『うん。わかった。』

おそらく何を言われるかもわかっていないだろう立川からのメール。

…どつやっていえばいいんやろっ…??

いきなり不安になってきた。

まあそれはその時に考えるとするか。

とりあえず…

英語の上山がこっちを睨んでいるんはなんでやるか…(汗

後ろの席の吉沢がオレの背中をつついてケータイを指さしていた。

そして放課後。

立川がまだきていないことを確認して校門の柱に背中を預けて空を見上げた。

…さあ、なんて言っかや。

変にごまかすもへんやし…

やっぱり正直に言った方がええよな。

「斎藤！ごめん、遅れたっ！」

そう考えていたとき、そばで立川の声がした。

立川は走ってきたのか息を切らしている。

そんな立川ににこつと笑いかけた。

「ええで。オレもそんなに待ってないから。」

やっぱり…

正直にいつてしまおう。

なんとなく、そう思えた。

立川を正面から見据え、また笑顔をつくる。

「オレなあ、雪乃ともう一回やり直すことになってん！」

言葉にするだけでうれしくて幸せな気持ちになった。

これからは雪乃がそばにいてくれる。

それだけのことがオレにとっては最高に幸せなことやった。

けど、それはオレにとってはうれしいことで…

立川にとっては…

「…えっ??」

立川の顔が蒼白する。

どうして?でも言いたげな顔でオレを見てきた。

「昨日な、おまえが帰ったあとに雪乃に会ったんや。それでオレに謝ってくれてな?ほんでもう一回信じてみようと思った。」

信じるしかなかった。

信じてしまった方が辛くなるから。

信じたら雪乃はオレのそばにいてくれるから。

だってオレは…

ぽりぽりと頭をかく。

「やっぱり…オレはまだ雪乃のことが好きやから…」

雪乃はこれからはずっとオレのそばにいてくれる。

だから…

…これが、おまえにホンマに言いたかったこと。

「だからもうおまえをおとそうとするんはやめるわ。今日はそれがいいかったん。」

「……！！」

立川は目を見開いて、うつむいた。

それを見てなんだか悪いことをしたような気分になる。

なんでかはわからんけど、そんな気分になった。

やがて立川はほんの小さな声でつぶやくように言った。

「ねえ斎藤。」

「……?」

立川はふるえながら顔をあげ、笑みの形をつくる。

そしてじつとオレの目をみつめた。

「やめなくてももう終わりだったんだよ？だって私は……」

立川の瞳に涙がたまっていく。

立川が瞬きすると大粒の雫が立川の瞳から流れおちた。

どんと流れてくるそれを立川はふきとろつともせず必至に震える声で言葉をしぼりだすように言った。

「私は…もう斎藤のことが好きになってたんだからっ!!」

必至の告白に、思わず胸が高鳴った。

一瞬、雪乃への気持ちが揺れ動いた。

けど心の中でぶんぶんと首をふる。

オレは何を思っているんや…

立川の気持ちは…

「…しってた。」

「…へっ??」

おまえと2人で映画を見に行った日から…

そう、はじめから知ってた。

「オレはおまえの気持ちに気がついてたんや。」

それに気がつきながら、ずっと知らんふりをしていた。

知っていたのに、おまえにひどい言葉を何度もあびせた。

「う…そ…」

立川はかすれる声でつぶやく。

オレは立川の頬に手を当てて流れおちていく涙をふきとった。

この涙はオレのせいで流れている。

そう思うと余計に悲しくなってきた。

「ごめんなあ…立川…おまえにひどいことしたな。うん。オレを恨んでもいい。」

オレのせいでおまえはオレのことを好きになっちゃってしまったんやから。

オレのせいでおまえはこんなにも辛い思いをしてるんやから。

…なんかオレは、おまえを傷つけてばっかやな。

けどな…

「それでもオレは雪乃のことが好きなんや。」

「…!?!?!」

立川は絶句するとふるえながら頬にふれているオレの手を握り締め
た。

そしてきつとオレを睨む。

「斎藤なんて大っきらい!?!」

そう叫ぶとオレの手を振り払ってオレに背を向けると走りだした。

「立川っ！！」

呼びとめようと叫んでも立川は振り返らずに走り去っていく。

オレはしばらくぼうぜんとして立川の走り去ったあとを見つめていた。

そしてぽつぽつと家に向かって足を進める。

…『大っきらい！』、か。

そんなこといわれたんは…初めてや。

…きっと立川は雪乃と同じで、

本当のオレを好きになってくれたんやと思う。

けどそれはオレがしむけたこと。

オレは立川に告白されたらためらいなくふるつもりやった。

それなのに…

立川の告白に…

必至にオレに伝えようとしてくれた言葉に…

その言葉にこめられた思いに…

心が揺れ動いた。

雪乃への気持ち揺らいだ。

立川にそれでも雪乃のことが好きっていったのは…

自分自身に言い聞かせるために言ったのかもしれない…

けど…

その言葉で立川はきつと傷ついてもうた。

だからオレは立川に恨まれて当然や。

でも…

それでも…

『大っきらい!』

立川の言葉が頭の中でこだまする。

胸がズキズキとした痛みを襲われた。

立川の言葉がオレの胸をしめつける。

やっほじ…

『大っきらい!』は傷つくわ…

「達也っ！」

名前を呼ばれてふと後ろを振り返るとそこには笑顔でオレに走りよってくる雪乃の姿。

もう学校はおわったんやるか…

ぼんやりと考えながら大好きな雪乃の笑顔に立川の笑顔を重ねていることに気がついた。

…なんで、立川のことを考えてしまっくんやろう???

初めて見たときは、雪乃に似てるなあって思った。

図書室でしゃべったときは、友達のために本気で怒りだしておかしくなやつやと思った。

2人で映画を見に行ったときは、おもしろいやつなんやなあって思った。

さっきの告白で…

あの涙で…

ドキッとしてしまった。

「達也…何か悲しいことでもあったん??」

雪乃が心配そうにオレの顔をのぞきこんだ。

「別に…そんななかつたで??」

雪乃は顔をしかめるとさっきオレが立川にしたようにオレの頬に手をあてた。

そしてめもとをぬぐう。

「じゃあどうして達也は泣いてるん?」

「…!!」

うそ…

オレが泣いてる…??

なんで…??

オレの頬にふれている雪乃の手はオレの涙でぬれていた。

それを見て本当に自分が泣いているのだと自覚する。

「…せやなあ。なんでやろっ…」

立川をふってしまったからかなあ…??

立川に『大っきらい!』って言われたからなんかなあ…??

理由はわからへん。

けど、

それが立川に関係していることはたしか。

「今な？オレを好きやっていってくれた女子をふってきてもうてん。

」

そいつは本気でオレなんかのことを好きになってしまっ…

オレのせいで傷ついてしまった。

『大っきらい！』と叫んだときの立川の泣き顔が頭から離れへんねん。

「なんでやろうな…オレがふられたわけとちゃうのに…」

ズキズキと胸がしめつけられて、

流れおちる涙は冷たくて、

息がうまくできない。

そんなオレを雪乃はそつと抱きしめた。

「こんなにも…苦しいんや…」

ぽつりとつぶやいた言葉に雪乃が目を見開いて唇をぎゅっとかみしめた。

けどオレにはそんなことは気がつけなかった。

頭の中にあるのはただひたすらに立川のことだけ。

「…大丈夫。達也のそばには…ウチがおるから…」

立川はきつともう、

オレのそばにはきてくれない。

オレが拒絶したから。

オレのせいだ。

そう思うと余計に涙があふれた。

8話 拒絶 達也side(後書き)

達也は一体どっちが好きなんですか…???

よくわかりません；

なんで泣いてるんでしょうかね???

9話 悲しい 理沙 side

どんな人のところにも、

みんな平等に新しい朝はくる。

それは変わらずに私のところにもきてしまった。

耳で鳴る目覚まし時計を止めながらふうっとため息をつく。

…学校、行きたくないなあ…

しばらく布団にくるまっていると下からお母さんが私を呼ぶ声が聞こえた。

「理沙ー！はやくおきなさいよー！ー！」

無理やり体を引きずって布団からでる。

鏡を見ると目が赤くはれていた。

…昨日、一晩中泣きあかしたもんね…

こんな顔、斎藤に見せられないよ…

そのまえに…

斎藤に会いたくない…

会うのが怖い。

斎藤に拒絶されるのが怖い。

斎藤を見るのが辛い。

自分が壊れてしまいそうで…

怖い。

「やだ…やだあ…!!」

行きたくないっ！

斎藤に会いたくないっ！

うずくまって頭を抱えた。

「……………」

けど…

…こんなんじゃないダメ…

ふるえる足を必至に動かして立ち上がる。

制服に袖をとおした。

もしここで学校に行かなかったら、

斎藤と会うことを拒んだら、

私はずっと学校にも行けないし斎藤と会うこともできない。

私にとって一番辛いのは…

斎藤と会うこともできなくなることでしょ…??

好きな人と会えなくなるなんて…嫌。

それに斎藤がもう一度雪乃さんと付き合うことになったのなら…

いつか斎藤は大阪に戻ってしまうかもしれない。

そしたらホントに会えなくなるかもしれない。

それだけは…

絶対、絶対に嫌だから。

ギュッと拳を握り締めると階段を駆けおりた。

そしてお母さんが用意していた朝ご飯を急いで食べると学校へと駆け出した。

ほらっ！

はやくいかないと遅刻だよっ!?

早く走らなくっちゃっ！

学校につき教室に入ったところでちょうどチャイムが鳴った。

「おゝ、ギリギリセーフだね！理沙。」

美香がにこつと私に笑いかける。

「よかったぁ…」

ほつと息をつきカバンを机の上においてイスに腰をおろした。

「それにしても理沙が遅刻なんて珍しいねっ！なにかあったの？」

何かって…

それは…

「うゝん…寝坊しちゃった！」

笑顔をつくっていった。

言えるわけがない。

言えば私が斎藤を好きだったことがばれてしまうし…

それに斎藤が誰かと付き合うことを知れば美香もショックをうけることになる。

美香も私と同じに気持ちにさせるのは…嫌だから…

「あつ！先生きたつ！」

担任が教室に入ってきたのを確認して美香は慌てて席に戻る。

朝のホームルーム、1時間目の授業。

私はそれに全然集中できなかった。

やっぱり、頭の中は斎藤でいっぱい。

そして斎藤のことを考えれば考えるほど悲しくなってくる。

今日一日ちゃんと過ごせるかな…??

そう心配になる程だった。

それでもなんとかがんばって、

昼休み

お弁当を食べて一息つく。

美香はお弁当を忘れたとかで食堂に食べに行っていた。

私はそんな元気もなかったから1人教室で。

いつものように廊下で女の子達が騒ぐ声が聞こえる。

斎藤かな…

ぼんやりとそう思った。

1・Dは金曜日の昼休みはいつも移動教室で私達の教室の前を通る。

窓から目が合うといつも笑いかけてくれた。

けど…

今日はそつちを見ない。

やっぱり…

まだ斎藤の顔を見る勇気がない。

だって、昨日ふられちゃったばっかだよ？

ムリに…

決まってるよ…

「立川っ！」

うつむいていると突然耳元で声がした。

「うわぁっ!?!」

突然の大声に驚いて思わず素っ頓狂な声をあげてしまう。

だ、誰よ、もう!?!

まだ驚きながらも声のした方を見る。

「な、なんだ…坂崎かあ…びっくりした…」

そこには私の反応に満足した様子の坂崎がいた。

坂崎は私の隣の席のやつ。

腐れ縁で実は中学の時からずっと一緒だったりする。

「さすが！今の驚き方、百点満点！」

私の驚いた声をまねしてくっくっくつと笑う。

明るくて元気なやつ。

中学のときから坂崎はクラスの盛り上げ役だ。

…明るい…か、

なんとなくそれが斎藤に重なって余計悲しくなってしまった。

そんな私を見て坂崎は急に真顔になる。

「…立川、今日朝から元気ないよな？何かあったのか？」

『何かあったのか？』って…

だからそれには答えられないんだよ…

「うっん…なんでもないよ…??」

坂崎は顔をしかめると、小さくため息をついた。

「ま、いいけどさ。1人でかかえこむより誰かに言った方が少しは楽になると思っぜ??オレはいつでも相談にのるからなっ!」

にこつと私に笑いかけてくれる坂崎。

その言葉だけでなんとなくほんの少しだけ楽になった気がした。

「うん…ありがと。おちついたら…相談するかも…」

坂崎になら…

相談できるかもしれない。

斎藤とは無関係な人間だし…

坂崎が私が斎藤のことを好きだったってことを美香に言うとは思えないし…

けど、今日はやっぱりムリだな。

「おお!いつでもいいからな!あっ、それはそうと!」

坂崎がポンツと手をうった。

「オレの妹知ってるよな?」

坂崎の妹…???

たしか…今中学2年生だったよね…???

坂崎にすっごいそっくりな子!

「うん、知ってるよ??」

「そいつが明後日誕生日なんだ!それでプレゼント買ってやりた
いんだけどさ…女の欲しがるものなんていまいちよくわかんねんだ
…」

それで!つと坂崎が私に人差し指を向ける。

「明日それ選ぶのに付き合ってくれよ!」

「はっ?私…??」

プレゼント選ぶの手伝ってなんて言われても…

ま、いつか。

どうせ家にいてもおちこんじゃうだけだし…

やっぱり男一人で女の子の欲しがるものなんてわからないよねっ!

「いいよっ!仕方ないから付き合っ
てあげる!」

そう言った時、坂崎が本当にうれしそうな顔をしたのには気がつか
なかつた。

「そうか！ありがとな！じゃあ時間と場所は…」

ちょうどその時チャイムが鳴った。

「あとでいいじゃん！はやく用意しないと次数学だよ？」

「あっ！そうだった…数学の佐藤厳しいんだよなあ…」

ぶつぶつ言いながらも坂崎は席につき教科書やノートを机に広げる。

それを見ながら小さく笑った。

…相談にのる、か。

坂崎って以外とやさしいんだなあ…

…

斎藤を思ってこんなに辛くて苦しい思いをするのなら…

いつそのこと、坂崎を好きになってしまおうかなあ…

思わず、そんなことを考えてしまった。

9話 悲しい 理沙 side (後書き)

新しい人でできました！

またまた解読不可能な文章ですいません；

9話 変な気持ち 達也 side

オレと雪乃は並んで学校に向かった。

学校は違っんやで？

でも方向が同じやからせっかくやから一緒に行くことになったんや。

「それで結局ウチは明日には大阪帰らなあかんのやけど…」

「そつやな。」

「達也とはなれないといけなくなるんはやっぱ悲しいなあ…」

「そつやな。」

「達也はどっ思ってるん？」

「そつやな。」

ぎゅうううう！！

急に雪乃がオレの頬をつねった。

「いったっ！！何するんや！やめろ！！」

雪乃はかまわずつねる手に思いつきり力をいれる。

いったあっ！！

ホンマに痛いつちゅーねんっ!!

やっと雪乃が手をはなした。

や、やっと解放されたあ…

「いきなり何するんやっ!…ホンマ痛かったわ…」

まだヒリヒリする頬を押さえて言う。

すると雪乃はすねたように唇をとがらせた。

「だって達也、さつきから『そうやな』しか言わんもん。」

「はっ??そうやったか??」

「そうだったっ!どーせ立川さんのこと考えてたんでしょ!まったく彼女が隣にいるっていうのに!」

彼女…

そうや、

雪乃はオレの彼女になってくれたんやった…

ちなみに雪乃が立川のことをしってるんは昨日の夜オレが立川と
ことを全部はなしたから。

雪乃は実はオレの家に泊ってたりするんや。

言っとくけどなんも間違いはないで!?

オレはそんな男とちゃうからな…

…

それにしても…

ホンマにオレ同じ返事しかしてへんかったか…??

ちゃんと返事してたと思うけどなあ…

「達也、ホントは立川さんのことが好きなんじゃないん??」

雪乃がオレを睨む。

「そんなことないっ！オレが好きなのは雪乃だけやっ！」

慌てて言つと雪乃がにこつとうれしそうに笑った。

「そんなん知ってるわ！じゃあウチはこっちやから！また帰りなっ

！」

雪乃は元気よくオレに手をふるどスキップで言ってしまった。

…よし、オレもはよいかな。

雪乃がおらんようになった瞬間、

頭の中が立川のことですめつくされた。

今日どんな顔して立川に会えばいいのかな…??

いや、まずそのまえに立川に会うかもわからへん。

きっと立川はオレのこと避けるやろし…

それに立川がオレを好きになればもう特別な扱いはせーへんってこのまえ言ってもうたからな…

いや、そのまえに立川に『大っきらい!』って言われたんや。

会ったとしても普通に無視されるんやろな…

それは…

なんとなく、寂しいな…

ぼんやり考えているうちに学校についていて席に座っていた。

そして自分が今までずっと立川のことばかりを考えてたのに気づく。

つちゅーか!!

なんでオレは立川のことばっか考えとんねんっ!?

オレは雪乃が好きはずやろ!?

…けど、雪乃としゃべってたときもずっと立川のことを考えてたの

かもしれへん…

でも、それは立川が好きやからとかじゃなくて…

ただ友達が減ることになったから悲しいだけなんや。

友達に無視されるんはそりゃ寂しいやろ？

だからオレはこんなに立川のことばっか考えてるんや。

うん。

絶対そうなんやっ！

とりあえずそう決めつけた。

そして昼休み

そついや今日は金曜日やった。

次の授業は理科で理科室に移動や。

そこで立川の教室のまえ通るねんなあ…

いつも窓から教室を見て立川と目あったら笑いあうんやけど…

今日は立川目もあわせてくれへんやろなあ…

ぼーっと考えている間にいつのまにか女子が集まってくる。

けどその相手をする余裕はオレにはなかった。

そして1 - Aの教室のまえにさしかかる。

ちらつと窓から教室の様子をのぞいた。

いつもならここで立川と目が合う。

けど立川とは目はあわなかった。

いや、目が合うどころか立川はこっちさえ見ていなかった。

楽しそうにクラスの男子としゃべっている。

な、なんやっ!?

オレにふられたからってすぐに新しい男つくってるんかいなっ!?

ちよつとはやないか...??

まあ、それは立川の自由やし?

オレが気にすることでもないし?

とりあえず...

立川のことなんか真剣に考えてたオレがアホみたいやっ!

なんでか変にイライラした。

もうあいつなんて知らんわっ！

そして放課後

帰ろうとするのと急に吉沢にオレを呼んで欲しいというてるやつがおるって言われた。

もしかしてまた告白とかか…？

もうだるいねんけど…

そう思いながらもしぶしぶと吉沢が言っていた場所にいくとそこには昼休み立川としゃべっていた男子がいた。

…???

なんでこいつがオレを呼ぶんや？

オレは男に好かれることをした覚えはないけどなあ…

どうでもいいことを考えているとそいつがオレをじろじろ見ながら口を開いた。

「おまえ、昨日立川に告られたよな？そんで立川ふったよな？」

…はっ？

「なんや…いきなり…ちゅーかおまえ誰やねん…」

なんでいきなり知らんやつにそんな言われなあかんねん。

はい。

オレは昨日たしかに立川に告られました。

それをふってオレは真剣に悩んでたけど立川は気にせずおまえのこといってました。

それがどないしたんやつ!!

「オレは坂崎。立川とは中学からずっと一緒だったんだ。」

そんなんオレに言われてもしらん。

「それがどないしてん。」

オレ今イライラしとんのや。

これ以上立川の話せんといひて欲しいねんけど。

「オレは立川のが好きだ。」

「…!？」

…なんで、それをオレに言うねん。

「明日、立川と一緒に買い物に行くことになった。そのときに言う。多分おまえにふられてショックになってる立川ならOKしてくれる

と思う。」

「…そうかもな。」

冷静に言いながらも内心焦っていた。

立川をとられてまっ…!!

めっちゃ勝手な考え。

オレには雪乃がおるのに。

オレは立川を突き放したのに。

それでもそう思ってしまった。

「それで？なんでそれをオレに言うん？」

坂崎は一瞬固まった。

そして視線を斜め下に向ける。

悔しそうに唇をかみしめた。

「立川はまだおまえのことが好きっぽいから…今日だってずっと落ち込んでた。だから…」

坂崎は視線をあげ、まっすぐにオレを見る。

「オレが立川からおまえの影を消してやりたい。だから一応そのの

宣言をしにきた。」

「…さよか。」

それだけか…

じゃあ要件はすんだんやな。

オレは坂崎に背を向けた。

「止めるんだつたら止めに来てもいいんだぞ！場所はここ近くの公園だ！」

後ろから坂崎の声が聞こえる。

けどオレはその声を無視した。

今更止める…??

そんなことするわけないやろ。

オレは立川をふったんや。

さっきは理不尽な怒りがでてもったが…

立川もきつと辛いんや。

ずっとオレのことを思ってたら…

オレが雪乃を思っていたのと同じように…

ずっと辛い思いすることになる。

だから新しい相手をつくるんが一番なんや。

それを…

邪魔しようとするわけないやろ…

ゆっくりと歩いているといつのまにか家についていた。

…あ、雪乃待っん忘れてた…

あとで怒られるな…

まあええか。

雪乃はもう明日おらんようになるのに。

オレは雪乃のことを考える余裕がなかった。

がくつとベッドに倒れる。

ハア…

もうオレ自分がわからんようになってきた…

ホンマ、しんどいわぁ…

いつのまにか、オレはそのまま眠ってしまった。

「達也、達也！起きてー！」

雪乃の声で目が覚める。

「ん…ああ、おはよう。」

まだ寝ぼけた目をこすって言う。

「何言ってるん？？まだ夜だよ！あれ？でもおはようであってるかも…」

そうや、

起きたんやったら普通おはようやる。

なんやあ…

あってるやないかあ…

問題も解決したところで…もうひと眠り…」「するなっ！」

雪乃が耳元で大声をだす。

「あゝ！なんやっ！！！」

「達也！あんた今日私おいて帰ったやろっ！？」

ああ…

それが…

「すまんすまん。忘れとったわ…」

「忘れてたって…ウチもう明日帰らなあかんのやで??」

雪乃の目が少し潤んだ気がした。

けどすぐににこつと笑顔に変わる。

「まあ許したる!その変わり…」

雪乃がずいっとオレに近づいてきた。

びっくりして少し後ずさる。

「な、なんやねん…」

雪乃は少し頬を赤らめた。

「…キスしょ?」

「…!??」

キ…キス…???

そ、そんなん以外に初めてやねんけど…

「ちよ、待ってや!」

雪乃はオレの静止も聞かずに顔をよせてくる。

ごくっと思をのんだ。

オレは雪乃のことが好き。

その雪乃とキスできるっちゅーことは…

めっちゃうれしいことやんな…???

けど…

あと少し唇が触れるというところで雪乃の肩をつかみ押し戻した。

「…それは無理や。」

雪乃の目がつるむ。

「なんで…??？」

それは…

なんとなく気分じゃないから。

っていったら怒られるかな？

けどホンマにそんな理由なんや。

なんか雪乃とキスしたらあかん気がしたから。

「だって眠いもん！おやすみっ！！」

オレは布団をつかむと頭からすっぽりとかぶった。

雪乃の声が入ってくるが返事はしない。

とりあえず、眠ることに専念した。

9話 変な気持ち 達也 side (後書き)

坂崎さんは理沙のことが好きだったんですよ。

多分ばれれば良かったと思いますが…

と…うかなんで坂崎さんは理沙が達也にふられたこと知ってるの???

疑問点…いっぱいです；

雪乃さん！積極的になってます！

10話 幸せ 理沙 side

昨日坂崎と買い物に行く約束をして…

今日、私達は大きめのショッピングモールへきていた。

「…何がいいかな?」

「立川っ!こんなのはどうだ!」

坂崎がどこからか大きなクマの人形をもって私にみせにきた。

クマの首には赤いネクタイがしてあつて結構可愛い。

…たしかに可愛いけど、

「…でかいね。」

それはとにかくでかかった。

私がちょうどかくれるくらい。

「そんなの持って帰れないでしょ?直してきなよ!」

「ちえ…いいと思つたのにな…」

坂崎は舌うちしながらそれをもとの場所に直しに行く。

さあ、私も何か探さなくちゃ!

何がいいだろう…???

とりあえず私がもらってうれしいものだとしたら…

服…とかかなあ???

そう思っでとりあえず小さなブティックに入った。

たしか…

坂崎の妹っておとなしい感じだったよね？

じゃあシンプルの方がいいかな？

「立川！何か見つかったか！」

「ああ、坂崎。うん…服にしようかと思っただけ…これなんてどうかな??」

坂崎は私の持つている服を凝視すると首をかしげた。

「なんとなく愛美っぽくない気がする…」

そうかな？

私的にはいいと思うけど…

まあ坂崎の妹のことなんだから坂崎が一番詳しいよね！

せつかくの誕生日プレゼントなんだしじっくり悩んで考えてあげなきゃ！

そんな感じで悩みに悩んで数時間…

帰りの電車にのってにこっと坂崎に笑いかけた。

「はあ！やっと選べたよ…いいの買えてよかったね！」

「ああ！今日はありがとな！立川！」

結局買ったのは白のワンポイントがついたパーカーとシンプルなTシャツ。

結構高かったけど坂崎が奮発したみたい。

坂崎は今月の金がなくなっただけで嘆いてたけどね（笑

けどすっごい悩んだなあ…

だってお昼ぐらいにいったのにもう夕方。

一応はやく帰るつもりだったんだけどなあ…

まっ、いっか

とりあえず…

今日は楽しかった。

少しの間だけど…

斎藤のことを忘れることができた。

お礼を言わなきゃいけないのはこっちだよ。

ありがとね。坂崎。

「そうだ、そういえば悩みってなんだっただんだけ？」

坂崎が思い出したようにいった。

ズキッ…

胸がしめつけられる。

坂崎の言葉でまた斎藤を思い出してしまった。

悩み…か。

…人にいつてしまった方が楽かもしれない…

そう思つて口を開く。

「うん…実はね…私、おととい好きな人にふられちゃったの。」

斎藤の名前はださなかった。

口にだすだけで泣き出してしまいそうだったから。

「…そうか。」

坂崎は名前まで追及しなかった。

ただ一言つぶやいて私に笑いかける。

「まっ！気にすんな！元気じゃねえとおまえらしくないぜ!？」

明るく励ましてくれる坂崎。

少しだけど、元気がでた気がした。

「うん…そうだよ。元気、ださなきゃね!」

そうだ。

「元気ださなきゃ。」

ずっとこんな感じじゃ…

私らしくない。

そんな話をしているうちに駅についた。

「さあ！かえろっか!」

元気良く言つと坂崎が一瞬戸惑いそして真剣な顔で私を見てきた。

「いや、そのまえに…ちょっと来て欲しいところがあるんだ。いいか？」

「えっ??別にいいけど…」

なんだろう???

そう思いながらも先を歩いていく坂崎の後についていく。

なぜか坂崎は何も話さなかった。

そして学校の近くの公園のまえで止まる。

「…なんで公園??何があるの??」

別に公園に変わった様子はない。

何かを見せたかったのかな?と思ってたけどそうじゃなかったみたいだ。

「…ここじゃなきゃ、ダメなんだ…」

坂崎はつぶやくと急に私の正面に立った。

うつむきながら、頬を染める。

「坂…」

「立川っ!」

不思議に思っただけで坂崎に問いかけようとしたらそれをさえぎられた。

坂崎の顔は真っ赤に染まっていて、それでも必至に私の目をみつめている。

それで、坂崎が何をしようとしているのかが大体わかってしまった。

これってもしかして…

坂崎は自分をおちつかせようとしているのか大きく息をはくとじつと正面から私を見る。

そしてはつきりした声で言った。

「オレ、立川が好きなんだっ！オレと、つき合ってください！」

大きく頭を下げられる。

「えっ…??」

けど私は啞然とするしかなかった。

何がなんだかわからなかった。

えっ…

もしかして私…

告白、されちゃった??

……!!

思わず顔に熱がのぼる。

うそっ！

どうしよう…

どうしよう…

私、坂崎に告白されちゃった…

頭の中に斎藤の顔がうかぶ。

で、でも…

私、やっぱりまだ…

「坂崎…私…その…」

「…やっぱり斎藤のことが好き？」

坂崎が頭をあげて口を開いた。

ドキッと心臓が鳴る。

えっ???

なんで知ってるの??

さっき…名前は言わなかったのに…

「どうして…??」

「…ごめん。オレ、実はおととい見たんだ。…おまえが斎藤に告げて…その…ふられてたところを…」

うそ…

見てたの…??

じゃあ…

どうして言ってくれなかったの??

どうして知らないふりしてたの…??

「マジでごめん！けど、立川はまだ斎藤のことを思ってるんだろ？けどそれじゃあ立川が辛いだだけだ。だから…斎藤を忘れるために、オレを利用していいから…」

坂崎の言葉が途中で止まる。

…坂崎は本当に私を思ってくれてるんだ…

自分を利用してでもいいなんて…

普通じゃ言えない…

…

坂崎と付き合ってしまったえば斎藤のことを忘れられるのかなあ？

坂崎を好きになれば斎藤への気持ちも忘れられるのかなあ??

…斎藤を思っくてこんな苦しい思いをするのはもう嫌…

私…

もう、坂崎と付き合っっちゃおうかな…

そうすれば楽になれるのなら。

そうすれば苦しみから解放されるといっなら。

「…うん。私、坂崎と…」

OKしようと思ったとき、

「んっ!?!」

急に誰かに口をふさがれた。

だ、誰!?!

「それ以上はいわせへん。」

誰かが口を開く。

このあたりでは珍しい関西弁。

明るい茶髪の髪。

誰もが思わずかっこいいと思ってしまっ、
整った顔立ち。

さい…とう…??

それはこんなにも私を苦しめている、

大嫌いで、

大好きな人だった。

斎藤は坂崎を睨むと私の腕をつかんでひっぱった。

「んっ!?!んんっ!?!」

そしてそのまま私の手を引いて走って行く。

坂崎は何も言わず、ただ私達の背中を見ていた。

「…ぶはっ!?!どうして…??どうしてあんたがいるの!?!」

なんとか斎藤の手をのがれて問いかける。

けど斎藤は答えずに無言で私の手を引っ張った。

…どうして???

せっかくあなたを忘れて坂崎と付き合ってしまったおつと思っただのに…

どうして、邪魔するの…???

雪乃さんのことが好きだったんじゃないの??

私をふったんじゃないの??

ねえ。やめてよ、斎藤。

こんなことされたら…

また、期待してしまう。

斎藤への気持ちが大きくなってしまつよ…

斎藤は私の家の前で止まった。

「はあ、はあ…斎藤…なんで…??」

斎藤は振り返らずに私の手をゆっくりと離れた。

そして小さく口を開く。

「…別に。…おまえが坂崎っちゅーやつにとられるんが嫌やったから。」

「…!!」

それって…

どういふこと…???

雪乃さんが好きっていったじゃないっ！

私をふつたじゃないっ！！

それなのに…

それなのに…

どうして『とられるのが嫌』なんて言っの…???

やめてよ…

そんなこと言わないで…???

そんなの…

そんなの…

勝手すぎるよっ！！

急に怒りが頭にのぼってきた。

いつのまにか涙があふれでてきて、

ぼろぼろと涙を流しながら無我夢中に斎藤を怒鳴りつけた。

「何それっ！？あんたは雪乃さんのことが好きなんでしょっ！？私

のままで…そういったじゃないっ!…!」

「……………」

斎藤は何も答えない。

それが余計に腹が立った。

何よっ!?

何か答えなさいよ!!

「私斎藤にふられてすっごい悲しかったんだよっ!?!そんなときに坂崎に告白されて…あなたのことを忘れようと思ったのに!なんで邪魔するのよお!」

「……………」

「私、苦しいの!あなたのこと思ってるままじゃ苦しいのっ!…!…!」

体が何かに包まれた。

気がつくときと斎藤の顔がすぐ近くにある。

腰に回された大きな手を感じて、やっと自分が斎藤に抱きしめられていることに気がついた。

「ごめん…ごめん、立川。」

ぎゅっぎゅっに、苦しくなるほど抱きしめられた。

「痛い…痛いよ…斎藤…」

苦しくて、痛い。

胸が???

体が???

わかんない。

けど、どっちにしてもあなたのせい。

やめてよ。

離してよ、斎藤。

お願い…

期待させないで…???

斎藤は私の肩に顔をうずめると小さくつぶやいた。

「でもな…オレ、気づいてしまったん。」

斎藤は少しためらうように間をおいて本当に、本当に小さく、耳元で囁くように言った。

「オレ…立川のことが好きや…」

「えっ…??」

空耳かと思った。

いや、聞き間違えたのかもしれない。

だって…

斎藤が私のことを好きはずがないもん。

だからウソ。

私の聞き間違い。

でも、考えとは逆に心臓はドキドキと鳴り響いている。

嘘…ウソ…うそ…

ホントなわけない…

「うそ…でしょ…??」

「…ホンマやて。ほら…」

斎藤は私を解放すると私の右手をつかんで自分の胸にあてた。

「心臓…音、やばいやろ?」

右手に斎藤の心音を感じる。

それはドキドキとすごいスピードで脈うっていた。

「じゃ…ほんと、に…??？」

斎藤は私が心音を感じたのを確認するともう一度私を抱きしめた。

「嘘なわけ…ないやろ…」

斎藤はまたぎゅうぎゅうに私をしめつける。

苦しくて痛かったけどうれしかった。

斎藤のぬくもりが私に伝わってきて、

斎藤の香りが私を包んで、

もっともっと斎藤を感じたくて、

私も、斎藤の背中に手をまわした。

「ごめん…自分からふったくせに都合よすぎやんな…」

その言葉に首を横にふる。

「いいの。私…今、とっても幸せだよ？」

すっごく幸せ。

今まで悩んだり苦しんだりしてたのがウソみたい。

斎藤が…

本当に私を好きっていつてくれる。

私を抱きしめてくれる。

これを何度望んだんだろう??

「私も…斎藤が大好きだから…!!」

夢みたい。

けど夢じゃないんだよね？

だってあなたのおぬくもりを感じてる。

あなたの気持ちを感じてる。

あなたを…

こんなにも感じてるんだから。

やっぱり私は…

あなたが大好きです。

10話 幸せ 理沙side（後書き）

一応私の中では第一部が終了しました。

名前をつけるとしたら『出会いと恋愛編』??

…意味わかりません…すいません（涙

理沙sideでは一部終わることに最後に『大好きです』っていれるつもりです！

一応タイトルなんです…

10話 告白 達也side

「今日で…最後、やね。」

「…ああ。」

今日で3日目。

もう、雪乃は大阪に帰らなあかん。

…はやすぎるやろ…

ほんまにちよつとしか…

雪乃と一緒におられへんかった…

今日はずっと雪乃と一緒に家におった。

別にどこかにいくわけでもなく…

ずっと2人で話してた。

どっかに行ったら時間がすごいスピードですぎてしまつから。

家におつたら…

時間が長く感じる。

雪乃といられる時間がのびる気がした。

けど…

そんな時間ももう…終わりや。

「最後に…駅まで送ってくれる??」

「…ええよ。」

手をつなぎ並んで駅に向かう。

なんとなく何も話されへんかった。

そのかわり、つないだ手を固く握り締めた。

一歩一歩をゆっくりと踏みしめているうちに、駅のホームに着く。

ちょうど、電車がきた。

「雪乃は…これに乗るん??」

「いや、違う。もう一つ後のやつや!」

そう言って笑う笑顔は寂しかった。

あと一つ…

電車がきたらもう雪乃とはお別れか…

せっかく雪乃ともう一回付き合うことができたのに…

また、離れ離れになるんやな。

頭の中は雪乃のことでいっぱいだった。

それで、少し安心する。

昨日はなぜか立川のことでいっぱいだった。

けど、今は雪乃のことでいっぱい。

ということは、やっぱりオレは雪乃一筋なんや。

良かった…

雪乃にばれんように小さく安堵する。

けど、今きた電車のドアがあいたとき…

オレは思わず目を見開いた。

今きた電車から…

立川と…

昨日、オレをよびだしたやつ…坂崎が並んでてきた。

その瞬間、頭の中から雪乃のことが消え去った。

全部、立川一色に染まる。

なっ!?

なんで…

あいつらが一緒にでてくるんやっ!?

昨日、坂崎に呼び出されたときのことを思い出した。

…『明日、立川と一緒に買い物に行くことになった。そのときと言
う。』

…そうや。

あいつ…

このあと立川に告るんやな…

「あの子が立川さん?」

「えっ!?!」

後ろから雪乃が覗き込んできた。

「ふ〜ん…可愛い子やないの。達也が好きになるんもわかるわ。」

「はあ!?!オレは別にあいつを好きとちゃう…!」

振り向いて雪乃の顔を見たとき、びっくりした。

…雪乃が、泣いていた。

なんでかはわからんけど…

泣いてた。

「雪乃…??どないしたん??」

オレ…なんかしたか…??

雪乃は涙をふきながらなんとか笑顔をつくりだす。

「達也…やっぱり、ウチら付き合っんやめとこっ!」

「…えっ??」

今、なんて言った??

付き合っんやめとこっって…

「な、んで??ウソやんな?」

笑われへんで?

そんなウソ…

なあ、ウソって言うって?

けど雪乃は首をふる。

「うっくん、ウソとちゃうよ。ほんまに。達也、つき合ひなせめと」
か。」

「…なんで??？」

嫌や…

オレはずっと雪乃のことと思ってたんやで？

それで雪乃と付き合えたんは夢みたいにいれしいことやったのに…

なんで？

「だって達也の気持ちはもうウチには向いてないもん…」

「なにいうとんねん…オレは雪乃のことが好きやで？」

おまえ以外に誰がおるっちゅーねん。

オレにはおまえしかおらん…

それでも雪乃は首をふる。

「違う。達也が今好きなのは…立川さん。」

はっ???

立川???

なんで…

そうなるねん…

「そんなわけ…ないやん。」

たしかに立川のことは気になってはいた。

立川をぶっつてもうて悪いと思ってた。

けどそれは好きとかじゃない。

絶対に…そんなわけない。

「じゃあ質問するけど…達也は立川さんをぶっつてからいつも誰の」とを考えてたん？」

「…それは…」

そりゃあ…

立川のこと考えてた。

…けどっ！

それはかわいそうと思っただけやっ！

なんでそれが好きにつながるねん！

「なんであの日泣いてたん？なんでウチとおるときでも立川さんのことを考えてたん？なんで昨日ウチとキスするんを拒んだん??」

「……」

そう考えてみたら…

なんでやるの…???

なんで立川に『だいつきらい!』って言われてあんなに傷ついたんやろ?

なんで雪乃とおるときまで立川のことを考えてたんやろ?

なんで昨日雪乃とキスしたらあかん気がしたんやろ?

なんで昨日坂崎に明日立川に告白するって宣言されて焦ったんやろ?

今だって…

なんで坂崎に立川をとられるかもしれへんって思ってるんやろ???

わからへん…

わからへん…

オレはなんでこんなにも立川を気にしてるんや…???

自分が…

わからへん…

「でも…オレは雪乃が好きなんや…」

「達也…それは違うねん。達也がウチに抱いている気持ちはおねえちゃんに抱くような気持ち。達也は『好き』って言葉を知ってからその気持ちを勘違いしてしまったんやよ。」

ねえちゃんに抱く気持ち…??

…違う。

オレはたしかに…

雪乃のことが…好き。

……

…ホンマに??

わからへん。

何もわからへん。

「オレは…誰が好きなんや??」

雪乃はくすつと小さく笑った。

そしてオレの頭をなでる。

まるで、弟にするような動作で。

「達也。比べてみて？立川さんに抱く気持ちと…ウチに抱く気持ちとを…」

比べる…???

立川に抱く気持ちと…

雪乃に抱く気持ち…

「目をつぶって…自分自身と向き合ってみ？そしたらきつと答えは見つかるから…」

雪乃に言われたとおりに固く目を閉じる。

そして自分の気持ちを整理してみた。

…雪乃を好きになったのはいつからやつけ??

それは…

『好きっていうのはな？その人を大切に思うことなんやよ??』

小3くらいの頃…雪乃にそう教えてもらったときから。

『ふん…じゃあオレは雪乃のことが好きやねんなっ！』

そう答えたオレの気持ちは…

どんなやつたやろっ…???

それはきつと…

家族に抱くような…

そんな気持ちや。

立川に抱く気持ちは???

可愛くておもしろいやつ。

そして…

本当のオレを見てくれる、変わったやつ。

オレにどんなにひどい言葉を浴びせられても…

それでもオレに告白してくれたやつ。

オレは立川をどう思ってるんや？

…好き???

…そんなわけない。

けど、

それを当てはめてしまえば、さっきの疑問にも全部説明がつく。

立川に『大っきらい!』って言われてあんなにも傷ついたのは…

好きなやつに嫌われるんは辛いことやから。

雪乃とおるときまで立川のことを考えてたのは…

好きなやつがオレのせいで傷ついてしまったのが悲しかったから。

昨日雪乃とキスしたらあかん気がしたのは…

立川を裏切ってしまう気がしたから。

昨日坂崎に明日立川に告るって宣言されたときに焦ったのは…

立川の気持ちがおれ以外のやつに向くのが怖かったから。

…なんや。

めっちゃ簡単やん。

そうか。

オレは立川のことを好きなんか。

いつのまに好きになっ たんやろっ…???

わからへんけど…

今のオレの気持ち。

オレは立川のことが好きなんや。

ゆっくりと、目を開いた。

「自分の気持ち…わかった??」

「ああ…ごめん、雪乃。オレは立川のが好きや。」

雪乃は悲しそうに笑うと立川達がさった方向を指差した。

「ほら、追いかけないと！あの隣にいた男の子にとられてしまうぞ
！」

そうや！

はやくせんと！

立川が坂崎の告白をOKしてもうたら終わりや!!

走って行くこうとして、そのまえにもう一度雪乃の方に向きなおる。

「雪乃…ほんまにごめん。…ありがとう。」

雪乃は笑顔で返事をした。

それを確認して立川達の後を追う。

…ありがとう。雪乃。

オレは絶対に坂崎なんか立川をわたさんから。

…たしかあいつ…

近くの公園とかぬかしとったな…

あの、高校の近くの公園か??

全速力でその公園まで走って行った。

もしかしたら違う公園かもしれへん。

でも…

お願いやっ！

ここであってくれ！！

公園の中をのぞいてみると…

向かい合う、立川と坂崎がいた。

ほっと息をつき、安堵する。

…よかった。

まだ、間に合うか…??

坂崎はじつと立川を見つめている。

もしかして…

立川の返事待ち…??

立川は頬を染めながらうつむいていた。

そして顔をあげる。

なんとなく、OKする気だと思った。

慌ててその間にはいる。

「…うん。私、坂崎と…」

返事を言いかける立川の口をふさいだ。

「んっ!？」

立川がびっくりしたのか声をあげる。

「それ以上はいわせへん。」

OKの返事なんて…

絶対に…

言わせるわけにはいかん。

立川がオレを見て目を見開いた。

けどオレはそれを無視して坂崎を睨む。

坂崎はまるで予想通りとでもいうような顔でオレを見ていた。

…このままここにおるわけにはいかん。

オレは立川の腕をつかむとひっぱった。

「んっ! ? んんっ! ?」

うめく立川の手を引いて公園から走り出る。

坂崎が追ってくると思ったが、追ってくる気配はなかった。

「…ぷはっ! どうして…?? どうしてあんたがいるの! ?」

立川がオレの手からのがれて口を開く。

けどオレは答えなかった。

無言で立川の手をひっぱる。

さあ、どこまで行くか。

とりあえず…

立川の家の前まで…

そこまで立川を引っ張っていき、

立川の家の前についたところで止まる。

「はあ、はあ… 斎藤… なんで…??」

息をきらして問う立川。

その手を振り返らずにゆっくりと離れた。

「…別に。…おまえが坂崎っちゅーやつにとられるんが嫌やったから。」

あんまり大きい声で言うんも恥ずかしいから…

小さな声で言った。

「…!」

立川の表情が驚きが変わる。

そりゃ…

そりゃんな。

オレは立川のことぶつたのに…

おかしいことをいってる…ってのはわかつとるんや。

立川は急にぼろぼろと涙を流して怒鳴りつけてきた。

「何それっ!?!あんたは雪乃さんのことが好きなんでしょっ!?!私のまえで…そういったじゃないっ!?!」

「……」

オレは何も答えない。

答えられる言葉が…ない。

「私斎藤にふられてすつごい悲しかったんだよ！？そんなときに坂崎に告白されて…あんたのことを忘れようと思ったのに！なんで邪魔するのよお！」

「……」

「私、苦しいの！あんたのこと思ってるままじゃ苦しいのっ！…！」

返事のかわりに、立川を抱きしめた。

立川は思ったよりも小さくて…

こんなやつを自分はこのまで苦しませていたのかと思つと罪悪感がわいてきた。

「ごめん…ごめん、立川。」

そんな立川をぎゅうぎゅうに抱きしめる。

「痛い…痛いよ…斎藤…」

そんな立川の言葉は聞こえない。

ただもう絶対に立川を誰にもわたせへん。

そう思つて立川を抱きしめていた。

たしかにオレはおまえの邪魔をしたのかもしれない…

おまえは坂崎と付き合つた方が幸せなんかもしれない…

けど、それは我慢ならへんのや。

おまえが誰かに取られてもうたら…

苦しい思いをすることになるから。

ホンマに…

自分から立川を拒絶しておいて…

ほんまに勝手な話や。

でも…

顔に熱がのぼっていく。

それを隠すように立川の肩に顔をうずめた。

「でもな…オレ、気づいてしまつてん。」

小さな声でつぶやく。

次の言葉を言おうとして、ためらった。

……

…立川に…ホンマにこの気持ちを伝えてしまってもいいやろか…？

迷惑にならへんやろか…？？

不安になってくる。

そして立川もオレに告白するときこんな気持ちやったんかな？と思
った。

それでも立川はオレに気持ちを伝えてくれた。

だから…

オレもおまえにこの気持ちを伝える。

でもやっぱり恥ずかしいから…

オレはホンマに小さく、耳元で囁くように言った。

「オレ…立川のことが好きや…」

「えっ…？？？」

立川の声色が変わる。

驚きと喜びと疑惑が入り混じった声。

「うそ…でしょ…??」

そんなわけないやろ…

「…ホンマやて。ほら…」

オレは立川を解放するとその右手をつかんで自分の胸に触れさせた。

「心臓…音、やばいやろ??」

めっちゃドキドキしてるんぞ。

ドキドキして…

胸がしめつけられて…

緊張でめっちゃ苦しくなってる。

「じゃ…ほんと、こ…??」

立川がオレの心音を感じたのを確認して、もう一度抱きしめる。

「嘘なわけ…ないやろ…」

抱きしめて初めて分かる立川のこと。

小さくて、折れそうな体。

立川の体温。

髪の毛の香り。

そのすべてがオレを魅了させる。

もっと立川を感じようと痛いほど抱きしめた。

立川はとまどいながらもオレの背中に手をまわしてくる。

「ごめん…自分からふったくせに都合よすぎやんな…」

立川は首を横にふった。

「いいの。私…今、とつても幸せだよ？」

幸せ…??

オレとおつて幸せつていつてくれるんか…??

おまえは…

坂崎の方にいった方が幸せやったんかもしれんねんで？

ほんまにオレでいいんか??

「私も…斎藤が大好きだから…!!」

立川はにこつと笑顔をつくった。

それを見て、安心する。

…よかった。

立川はまだオレを好きでいてくれたんや。

幸せ…か。

うん。

オレもや。

オレも今、めっちゃ幸せ。

始めは、遊びから始まった。

それがホンマにおまえを好きになってしまつとは思わんかった。

けど、

今実際にオレはおまえを好きになつてる。

この気持ちがいままで続くかわからんけど…

この気持ちが続くかぎり…

おまえを手放しはせーへんからな？

10話 告白 達也side（後書き）

理沙sideの8話と同じサブタイトルです。

達也sideと理沙sideは別物だからいいんです（無理矢理）
理沙sideの10話でも書きましたが、一応私の中の第一部は終わりです。

ここまで読んでくれた方…いるんでしょうか…??

まあいると信じて…！

次は『美香との友情編』?? 『三角関係編』かな??

まあよくわからないですけどそんな感じですよ！

読んでくださればうれしいですよ！

11話 いじめの始まり 理沙 side

斎藤が私に告白してくれて…

とてもうれしくて、幸せだった。

けど私は…

一つ、大事なことを忘れてたんだ…

それは…

斎藤を好きな女の子はたくさんいるってこと。

そして…

美香も、斎藤のことが好きだったこと。

月曜日の朝。

また新しい一週間が始まる。

けどきつといつもより輝く一週間になるはずだ。

だって、斎藤と両想いになっちゃったんだから！

きっと毎日が楽しくてしかたなくなるんだろうね！

そんな感じでわくわくしながら教室に入った。

じっ…

なぜか教室中の女の子の視線が私に集まる。

…えっ??何???

私、何かついてる???

教室に入りづらくてドアの前でぼーっとしていると美香が私の方へ近づいてきた。

「美香??おはよう!私…何かついてるの??」

美香は黙って私を睨んだ。

なぜかその目は赤くはれている。

…???

どうしたんだろう…???

美香はふるえながら口を開いた。

「理沙…ひどい…信じてたのに…」

「えっ…??何が??」

美香は泣き出してしまった。

けどなぜ泣いているのかもわからない。

自分が何かした覚えもないし…

とまどいながら立ち止っていると小倉さんが美香の肩を抱いて私を睨んできた。

「あなた…昨日斎藤くんと一緒にいたでしょ？」

「えっ…??」

顔に熱がのぼる。

た、たしかに…

昨日、斎藤に『好き』って言われて…!!

そこでやっと気がついた。

そういえば小倉さんは斎藤のことが好きだったんだ。

そして…

美香も。

「とぼけてもムダよ？見てたんだから。あなたと斎藤くんが抱きしめあつてるところ。」

「そ…それは…」

まさか…

見られてたなんて…

どうしょ…

言い訳なんかできない。

だって…

本当のことなんだもん…

「…えぐっ…り、りさあ…」

美香がしゃくりながら必至に私の名前を呼ぶ。

そして無理やりに笑った。

「う、うそだよね？りさは…そんなことしてないよね…？？」

「……………」

私には答えることはできない。

だって…

ホントのことだから。

美香はそんな私の態度を見て顔を蒼白させた。

「ほん、と…なの…??」

「……………」

ゴメン…

ゴメン…美香…

私…あなたを裏切った…

親友だったのに…

裏切ったの…

美香は強く私を睨んだ。

その気迫に思わずビクッと震える。

「理沙なんて…もう、大っきらい。」

「…!!」

美香の言葉が頭に響いた。

目に温かいものがあふれる。

いや…

大っきらいなんて言わないで…??

だって…

親友でしょ???

美香…

そんなとき、廊下にちょうど斎藤が通りかかった。

私を見て、顔が急に明るくなる。

「立川っ！おはようさん！」

「あっ…斎藤…」

好きな人を朝から見られてうれしいけど…

タイミング…悪いよ…

美香は斎藤を見て頬を赤くする。

頬を伝う涙の量が多くなった気がした。

「…斎藤くん…」

美香がふるえる声で斎藤の名前を呼んだ。

けどそれ以上は言えないかのように口を閉ざす。

代わりに小倉さんが口を開いた。

「斎藤くんは…立川さんと付き合ってるの…??」

「はっ??」

斎藤はきよとんとして私を見た。

お願い…

背定しないで…

必至でアイコンタクトをとってみたりする。

けど斎藤には伝わらなかったようで…

斎藤は少し頬を染めて笑った。

「…ああ！昨日からな！」

小倉さんが驚いたように目を見開く。

美香も目を見開いて口に手を当てた。

も…

もう!!

なんで正直に言うのよ！

「…へっ??オレ何か悪いこといったか??」

全く気づいてない様子の斎藤。

小倉さんは私をキツと睨むと人差し指を突きつけた。

「私達、あんたが斎藤くんと付き合うなんて絶対認めないからっ
！！」

「……！！」

そんなこと言われたって……

チラッと斎藤の顔を見た。

斎藤は不機嫌そうに顔をゆがめた。

そして冷たく言い放つ。

「はあ??オレが誰と付き合いおうがオレの勝手やる??おまえらみ
たいにどうでもいい奴らなんか決められたくないねんけど。」

「ちよっ！斎藤っ！」

そんなこと言わないでよ！

美香が……

傷ついちゃう……

美香は何も言わずにうつむいていた。

その表情はどんなのになってるんだろっ…???

私に対する怒りの表情???

斎藤をあきらめなきゃいけなくなって悲しいと思っている表情???

どっちにしても…

私のせい。

私のせいで美香が悲しい思いをしている…

胸の中が、罪悪感でいっぱいになった。

そのとき、

ちょうどチャイムが鳴った。

「あっ！チャイムなった！じゃ、オレ教室はいらな！」

「…うん。」

急いで1・Dの教室に走る斎藤を見送ってから美香と小倉さんの方を見る。

「このままでいられると思わないでね??？」

小倉さんは一言いうと自分の席についた。

美香も自分の席に戻る。

私も、とぼとぼと自分の席にいった。

そして、

その机を見て驚愕する。

机に書かれたたくさんの悪口。

『死ぬ!』『最低女!』『ブスのくせに!』……

ぼんやりとそれを眺めながら思った。

…嗚呼、

私、これからいじめられるんだな…

でも、当然か。

私は美香を裏切ってしまったんだもん。

いじめられて…

当然のことをしたんだ…

ゴメンね?美香。

私はあなたの大切な人を奪った。

その償いはちゃんとするから…

どんなにいじめられてもいいから…

でも、

ゴメン。

私、どんなにいじめられることになっても…

斎藤だけは、

絶対に離さないから。

11話 いじめの始まり 理沙side(後書き)

ありがちな展開です！

サブタイトル『いじめのはじまり』って…；

どんなだよ；

一応小倉さんが一番性格が悪い設定です。

あと達也さん…

空気読んでください；

11話 義務 達也 side

立川に思いを告げて、

両想いになって、

今、オレは幸せの絶頂や！

これからは毎日の学校生活がすごいおもしろいものになると思う！

そう思いながら軽い足取りで学校に向かう。

このとき…

オレは忘れてた。

自分ももてるということ。

立川の親友は…

オレのことを好きやったということ。

オレが立川と付き合うことでオレのことを好きやったやつらは立川にどんな仕打ちをするか、

考えてもいなかった。

それで、立川がどれだけ傷つくかなんて、

考えてもいなかった。

知ってるかもしれんが、オレは1年D組。

教室に行くには絶対に立川のクラス、1年A組の教室の前をとおる。

その教室の前にちょうど立川を発見した。

おっ！

朝1番から立川を発見や！

「立川っ！おはようさん！」

「あっ…斎藤…」

軽くあいさつすると立川はなぜか嫌そうに顔をゆがめた。

…えっ???

もしかしてやっぱりオレと付き合っくんは嫌やったんか…???

そんな顔されるなんて…

ちよっとシヨックやあ…

「…斎藤くん…」

一人でショックを受けていると誰かが小さくオレの名前を呼んだ。

そっちに目を向けるとなぜか立川の親友の三浦が涙をぼろぼろと流していた。

口をもごもごさせて、そこで口を閉ざしてしまう。

隣には同じくオレの取りまきだった小倉がいた。

「斎藤くんは…立川さんと付き合ってるの…??」

小倉はためらうように言った。

「はっ??」

思わずキョトンとする。

そして立川を見た。

なんで…

こいつがしつとるんや?

立川がいったんか??

それはないと思うねんけどなあ…

立川はなぜかオレの目をじっと見て瞬きをリズムよくしたりしてい

る。

…???

何がしたいんやる…???

もしかしてアイコンタクトで『いうな』っていつてるつもりか???

別に隠すことでもないやん!

ここはちゃんといつといた方がええねんで!

でもいざ口にだすととなるとちよつと緊張するな…

思わず顔に熱がのぼった。

はにかんだ笑みをつくる。

「…ああ!昨日からな!」

小倉が驚いたように目を見開いた。

三浦も目を見開いて口に手をあてる。

立川は蒼白していた。

…???

何?なに!??

この空気!?

「…へっ??オレ何か悪いこといったか??」

ただ立川と付き合うことになったって宣言しただけやねんけどー!?

なんかめっちゃ悪い空気になってもうたで!?

オレはどうすればええんや!?

心の中で1人慌てていると小倉が立川に人差し指を向けた。

きつと立川を睨む。

「…私達、あんたが斎藤くんと付き合うなんて絶対認めないからっ
!?!」

「…!?!」

立川の表情が悲しそうに歪む。

それを見て少しむっとした。

なんやあ?こいつ…

『絶対認めないからっ!?!』って言われてもやなあ…

認めへんも何も…

なんでそれをおまえに決められる必要があるんや?

「はあ??オレが誰と付き合おうがオレの勝手やる??おまえらみたいにもうでもいい奴らなんか決められたくないねんけど。」

「ちよつ!斎藤っ!」

冷たく言い放つと立川が慌てたようにオレの言葉を静止しようとした。

ああ、

そうや、

こいつの親友がおるんやっとな。

けど…ムカつくから…

しゃーないやろ??

オレが立川と付き合っくんはオレの意志やし、

正直とりまき達にもうんざりしてたところや。

別に突き放したって…

ええやんか…

そんなときちよつとチャイムが鳴った。

「あつ!チャイムなった!じゃ、オレ教室はいらな!」

急がなまた怒られてまっわ！

「…うん。」

立川が力なく答えたのを確認するとオレは教室にダッシュした。

なんとか間に合って、席に座りながら考える。

なんか…

やばい雰囲気やった…

もし…

立川がオレのせいでいじめられることになったらどうしよう…

そう考えて、ぐっと拳を握り締めた。

…もう立川をオレのせいで傷つけるんはゴメンや。

もし立川がいじめられてもったら…

どんなに周りから嫌われるようになっても、立川を守るっ。

それが立川のそばにいるオレの義務やから。

11話 義務 達也 side (後書き)

サブタイトル適当に決めました！（すいません；

この人は一応空気がおかしいことにちよっとだけ気づいていたという
ことで…

けどちゃんとわかってはいません。

達也は意外と適当な性格のつもりです。

12話 いじめ 理沙 side

昨日から、美香達の私へのいじめは始まったんだ。

朝、教室に入ったら普通に睨まれるし…

何度消しても机にはたくさんのおくがき。

悪口なんてわざと聞こえるように言われる。

それでも、良かった。

だって昼休みには斎藤と一緒にご飯が食べれるし、

帰りになれば一緒に帰れるし、

それだけで、私の学校生活は楽しかった。

でも、私がいじめられてるってことは斎藤には言ってなかったんだ。

だって…

それを言ってしまったら…

斎藤だって、いじめられているようなやつと付き合いたくなんかないと思うかもしれないから…

美香に拒絶されて…

斎藤にまで拒絶されちゃったら私…だめになっちゃっもん。

けど、

今日の昼休み、

いつものように屋上へ行こうとしたら女の子数人に止められた。

「ちょっと待ちなよっ!」

「…何??」

「あんたもしかして斎藤くんのところ行くつもり??」

「そうだけど…」

それが何よ?

どうしてあなた達に言わなきゃいけないの??

あなた達には関係のないことですよ?

私が女の子達を睨むと女の子達も私を思いつきり睨んで壁に追い込んだ。

「何調子なのってん??絶対行かせないから。」

1人の女の子が私に向かって手を振り上げた。

叩かれる…!!

思わず目を固くつぶった。

けど…

いつまでたつても痛みはこない。

おかしいと思ってそっと目を開けて見た。

するとそこには、手を振り上げたままの女の子の姿。

その手をつかんでいるのは…斎藤。

女の子達は目を大きく見開いて斎藤を見た。

「斎藤…くん??」

斎藤は女の子達をきつと睨みつける。

「オレの彼女に何しとるんや??」

…彼女。

その響きが変に新鮮に思えた。

「だって…この子が…」

女の子達は顔を見合わせて困ったようにつぶやいている。

「いいわけなんか聞かん。」

そう言って斎藤は私の肩を抱き寄せた。

そして目を細めて女の子達を見る。

「もし今度こんなを見たら…覚悟しといた方がええで？」

女の子達はすくみあがると走ってどこかに行ってしまった。

斎藤はその後ろ姿が消えるまで凝視すると、私に笑いかけた。

「大丈夫か？立川。」

「えっ…うん。助けてくれて…ありがとう。」

うつむきながら答える。

斎藤が助けてくれたのはすっごいうれしいけど…

どうしよう…

私が今、いじめられてるってばれちゃった…

拒絶されたら…どうしよう…！！

「……立川。」

斎藤は落ち込む私を不思議そうに見ながらポントと手を打った。

「ああ、そうか。」

そして私の腕を引っ張って屋上へと向かう。

…???

何が『そうか。』なんだろう…???

ぼんやりと考えているうちに屋上についていた。

斎藤はドカッとフェンスにもたれるように腰をおろす。

「さあ、昼飯食うか！」

そして手に持っていた袋からコンビニのおにぎりを取り出す。

え…

今、お昼ご飯とかそういう気分じゃないんだけど…

「あれ？立川食べんの？」

「…あんまり、食欲ない。」

うつむきながらつぶやく。

「…??？昼飯やないんやったら、何をそんなに落ち込んでるんや…
??？」

斎藤は1人で考えるようにつぶやくと今度こそわかったというよう
な顔をした。

そして私の頭をくしゃくしゃとなでる。

「さっき言われたこと気にしてるんやな？別にあんなん気にせんでええで??？」

…そのこともあるんだけど…

違うの。

私がこんなに落ち込んでるのはそんな理由じゃないの。

「…あんなの、そんなに気にしてない。」

「じゃ、何をそんなに落ち込んでるん??？」

それは…

「斎藤に…私がいじめられてるってばねちゃったから…」

くしゃ…

頭をなでる手が止まった。

嗚呼、

拒絶されちゃっつ。

私の幸せな時間って…

もう、終わりなんだな。

そう思った。

「斎藤に…拒絶されちゃうって…思ったの。」

最悪の表情を思い描きながら斎藤の顔を見上げる。

軽蔑の表情…してるのかな…??

そう思ったのに…

斎藤はただ、きよとんとしていただけだった。

「へっ??いじめられてるん?そんなん全然気づかんかった…」

…

……えっ???

気づいてなかったの…??

それじゃあ…

自分から言った私がバカみたいじゃん…

まあ、結局ばれるのは時間の問題だったし…

それが、ちょっとはやまったただけだよな。

もう、斎藤とは終わり…

「ちゅーか、なんでそれをはやくオレに言わんのやっ…!」
思いつきり怒鳴られた。

「…えっ??」

拒絶…するんじゃないの…??

そんな感じの顔をしていると斎藤がそっぽをむいて言った。

「そんなん…好きになった相手がいじめられてるからって嫌いになるわけないやろ…??」

斎藤の頬は少し染まっっていて、

それが少し可愛いと思った。

『好きになった相手』…

それは、私のこと。

…そうだよな。

私だって…

斎藤がいじめられてたって、そう簡単には嫌いにならない。

「斎藤…!」

思わず斎藤に抱きついてしまった。

「うわっ!?!」

斎藤はびっくりして、慌ててしまって、手に持っていたおにぎりを地面に落とす。

悪いなあと思いつつもぎゅっと斎藤を抱きしめる。

斎藤が拒絶しないでくれてすっごくうれしかったから。

斎藤は少しとまどっているみたいだったけどはあ…と息を吐いて私の頭をポンポンと叩いた。

「安心しーや。どんなに辛い思いすることになっても…オレがおまえを守つたるから…」

優しい言葉に泣きだしそうになるのを必至にこらえて、

斎藤の背中にしがみついていた。

12話 いじめ 理沙 side (後書き)

やっぱり達也さんはどんかんなんです。

いじめられてること気づいてなかったのかよ…

12話 オレが守る 達也side

最近の学校生活…

めっちゃ楽しいっ!!

昼休みにはいつも立川と屋上で飯食うし、

帰りも一緒に帰るし、

もう、学校生活が180°変わった、そんな感じや!

けど…

最近、立川の様子がおかしい気がした。

そして今日の昼休み…

その原因がやっとわかった。

立川とはいつもなんでか屋上で待ち合わせ。

そんな感じで屋上へ行こうとしてたら…

「あんたもしかして斎藤くんのとこ行くつもり?」

急にオレの名前がでてきてびっくりした。

思わず声のする方を見てみると誰かが数人の女子にかこまれてた。

…あゝあ。いじめか？

女の世界は怖いなあ…

のんびりと考えてふと気がつく。

…んっ？

ちよっと待てよ???

『齋藤くんはどこ行くつもり??』って…

オレのとこくるといえば1人しかおらん…

女子達の群がる間から栗色の髪が見えた。

…立川っ！

「何調子のもってんの??絶対行かせないから。」

1人の女子が立川に向かって手を振り上げる。

それを見た瞬間、

オレは無意識に走ってそいつの手首を握り締めていた。

ぎゅっと目をつぶっていた立川がゆっくりと目を開ける。

そしてオレを見て目を見開いた。

同じく他の女子達も目を見開く。

「齋藤…くん??」

オレは立川を叩こうとした女子の手をぎりぎり締め付けながらそいつを睨んだ。

「オレの彼女に何しとるんや?」

女子達は顔を見合わせてうろたえている。

「だって…この子が…」

なんや。

どうせ言い訳するんやったらはつきりと言わんかい。

まあ立川に手あげようとしていてどんな言い訳を思いついてもオレは許さんけどな。

「いいわけなんか聞かん。」

オレはそいつの手を離すと立川を守るように肩を抱き寄せた。

そして目を細めて立川に群がっていた女子達を見る。

「もし今度こんなを見たら…覚悟しといた方がええで?」

軽蔑するどころじゃすまへん。

立川のためやったら…

女に手だすことも…オレはためらえへんで？？

女子達はすくみあがるとオレ達に背をむけて走って行った。

しばらくその背中を見送ってから、立川の方に向きなおり笑顔をつくる。

「大丈夫か？立川。」

「えっ…うん。助けてくれて…ありがとう。」

立川はうつむきながら答える。

なんとなく落ち込んでいるように見えた。

「……立川。」

どないしたんやろっ…???

なんかあつたんか…???

「ああ、そうか。」

ふと気がついてポンッと手をつつた。

腹減ってるんやな。

さっきのやつらに邪魔されて食う時間が少なくなったことに落ち込んでるんか??

それやったら早く行かなあかん。

オレは立川の腕を引っ張ると急いで屋上に連れていった。

フェンスにもたれるように座り込んでコンビニの袋からおにぎりをとりだす。

「さあ、昼飯食うか！」

立川はえ……??って感じの顔をしてオレの方を見ている。

弁当には手もつけようとしな。

「あれ?立川食べるの?」

腹減ってるんとちゃうんか??

「…あんまり、食欲ない。」

うつむきながら答える立川。

ちなみにまだ普通に落ち込んだままや。

つて、ええ!??

食欲ないんっ!?

「……???昼飯やないんやったら、何をそんなに落ち込んでるんや……」

他に理由って…

っっ!

そっぢっ!

めっちゃ単純に理由あるやんか!

さっきのことで落ち込んでるんやな!

よーし、ここはオレがなぐさめたるか!

くしゃくしゃと立川の髪をつかむように撫でた。

「さっき言われたこと気にしてるんやな?別にあんなん気にせんでええで???」

あんなん気にしとったらきりないわ!

それにしても女の世界ちゅうんは怖いなあ…

「…あんなの、そんなに気にしてない。」

けど立川は小さく首をふった。

はあ???

そうなん???

「じゃ、何をそんなに落ち込んでるん??」

立川の眉が少し下がる。

そして言いにくそうに言った。

「斎藤に…私がいじめられてるってばれちゃったから…」

…???

えっ?

いじめられてる…???

「斎藤に…拒絶されちゃって…思ったの。」

拒絶されるって…

そのまえに…

「へっ???いじめられてるん?そんなん全然気づかんかった…」

ああ、そうか。

だからさっきあんなに困まれてたんか。

納得、納得や。

って！

納得しとる場合とちやうやる！！

「ちゅーか、なんでそれをやくオレに言わんのやっ！！」

思いつきり立川を怒鳴りつけた。

「…えっ??」

立川がびっくりしたようにオレを見る。

拒絶しないの??とでも言っているような顔。

そんなこと…するはずないやん…

だって…

「そんなん…好きになった相手がいじめられてるからって嫌いになるわけないやろ…??」

それくらいでおまえを嫌いになれる程、

軽い気持ちで好きになったんとちやうわ…

頬に熱がのぼる。

それを隠すようにそっぽを向いた。

「斎藤…!!」

立川は泣きそうな声でオレの名前を呼ぶとだきついてきた。

「うわっ!?!」

いきなりのことに心臓が大きく飛び跳ねる。

慌ててもっていたおにぎりを落としてしまった。

ああ!!

オレのエビマヨが…!! (涙)

立川はおかまいなしに強くオレに抱きついてくる。

オレはとまどいながらも、落ち着くために息を吐いた。

そして立川の頭を軽くポンポンと叩く。

「安心しーや。どんなに辛い思いすることになっても…オレがおまえを守つたるから…」

オレがいるかぎりおまえに辛い思いはさせへん。

絶対にオレがおまえを守る。

例え…

どんなことがあっても。

12話 オレが守る 達也side(後書き)

達也さんは鈍感すぎます。

落ち込んでる理由で最初に思いつくのがお腹すいてるって…

普通それは思いつかないんじゃないかなあ…??

13話 体育倉庫 理沙side(前書き)

矛盾多いです！

13話 体育倉庫 理沙 side

それからいつでもずっと斎藤は私のそばにいてくれるようになった。

チャイムが鳴った瞬間にダッシュで私の所に来てくれるし、

授業中はメールでいじめられていないかとかをたしかめてくれた。

私をいじめている子達はやっぱり元斎藤の取りまきの子達だったから…

斎藤に悪く思われるのはいやみたいで堂々と私をいじめるようなことはしなかった。

けど、やっぱりひそひそと聞こえる私の悪口。

それを聞いたたびに悲しくなってくるけど私は落ち込まないようにしていた。

せつかく斎藤が私のためにがんばってくれてるんだもん。

それなのに私が落ち込んでたら、斎藤は余計に気つかっちゃう。

それに、斎藤のことを別に好きでもなかった子達は私の味方をしてくれる。

だから、そんなにいじめは気にならないようになっていた。

けど…

今日の体育の時間。

気にならないなんていつてる場合じゃないようなことがおこってしまった。

「立川さん！」

小倉さんに呼ばれて不審に思いながらも彼女の方に向けよっていく。

小倉さんは体育倉庫の隣にある古い体育倉庫を指差して言った。

「あそこから、ちょっとハードルとってきてくれない??」

「えっ…でも、あそこ古い方だし…」

「いいからっ！」

言い訳しようとすると思いつきりどなられた。

これもいじめの一貫なんだな。

そう思いながら、しびしびと古い体育倉庫の方へ向かった。

重たい扉をあけると中からほこりっぱい空気がでてくる。

「しっわっ」

すっごいほこりたまってるよ…

さっさとハードルみつげちゃってはやくでよっど。

そう思ってた中に入ったとき…

ぎい…！

後ろで扉が閉まる音がした。

「えっ！？」

ガチャッと鍵の閉まる音が聞こえる。

「うそっ！…！」

慌てて扉をあけようとするが扉は堅く閉ざされていた。

外から、小倉さんの意地悪な高笑いが聞こえる。

「あけようとしてもムダよ！もう、ここあかないもの！いつとくけど人なんかこないからね？こっちの体育倉庫は使われていないんだから…！」

「えっ！？うそ！あけてよ…！」

ダンダンッと扉をたたく。

けどもう応答はなかった。

「うそ…！」

ぺたりとその場に座り込む。

…閉じ込められちゃった。

誰か!…って、くるわけないか。

こっちは古い方の体育倉庫なんだもん…

私…

このままずっと出られないままなの…??

そうあきらめかけて、ふと立ち上がる。

…いや、

あきらめちゃダメ。

どこからかでられないか探さなくちゃ!

キョロキョロとあたりを見回す。

体育倉庫の中は真っ暗。

けど、その中に一筋光が見えた。

光…窓が、ある!!

光の刺す方を見てみると、そこにはカーテンに隠された窓があった。

やった…！

なんだ、簡単にでられるじゃない…！

暗がりの中、その光だけをたよりに窓のまえに荷物を積み上げる。

少し時間がかかったけど、なんとか窓まで届く高さくらいまでの荷物の階段ができあがった。

よっし…！

このまま慎重にあがって…

荷物のバランスを崩さないようにのぼってなんとか窓にかかっているカーテンに触れると、ゆっくりとカーテンを開けた。

光を送っていた窓が露わになり、そこから明るい光が差し込む。

下を見て、絶句した。

うそだ…

こっから…おりれるわけない…

窓は、三階くらいの高さにあった。

よくここまで荷物を積み上げていくことができたな…と自分で関心する。

べ…べ…べ…

結局でられないんだ…

あきらめかけたとき、下に体操服姿の斎藤が見えた。

えっ…！？うそ！？

今、D組体育なのっ！？

「さ、斎藤！斎藤！！」

夢中で叫んだ。

斎藤は声を聞きとつたのかキョロキョロと周りを見回したが誰も見当たらなかったようで不思議そうに首をかしげる。

「ちがう！上！上！！！！」

やっと斎藤が私に気がついた。

私の顔に目をとめると大きく目を見開く。

「立川っ！？そんなとこで何してるんや！？」

「とじこめられちゃったの！！助けて！！」

「閉じ込められた！？…よし、ちょっと待ってるよ！」

ほっ…

よかった。

体育倉庫の鍵探しにいつてくれたんだ…

安心して気をぬいた瞬間…

「うわぁ!?!」

バランスを崩して荷物の山が崩れおちた。

ドストドスツ!と大きな音を立てて下に腰を打ちつける。

…ったぁ。

もう…

バランス崩しちゃったよ…

もう一回窓の方を見たいけど…

もう積み上げる元気がないや。

まあいつか!

斎藤がとりにいつてくれたもんね!

安心して近くの壁にもたれる。

…うーん、安心したら眠たくなってきちゃった…

いつのまにか、私はすやすやと眠りに着いていた。

…川……立川……

誰かが私の名前を呼ぶ。

「ん…誰…??」

目を覚ますとすぐ目の前に斎藤の顔があった。

「っわ!？」

思わず素っ頓狂な声を出してしまう。

斎藤は私の声に驚いたのか慌てて後ろに下がった。

なぜか、頬を少し赤く染めている。

「た…立川…起きたか。」

「さ、斎藤!？なんでここに…って!！」

斎藤は体育倉庫の鍵とりにいってくれたんじゃないの!？

斎藤は私の気持ちを察したのか頭をかくと、いいにくそうに言った。

「ごめん…体育倉庫の鍵…な?職員室になかってん…」

「えっ…」

なんで…???

小倉さんは持ってたのに…

って、

もしかして…

小倉さんがそのまま借りパクしてるのかも…

「…で、鍵見つからなかったのにどうして斎藤はここにいるの?？」

鍵なかったんなら入れないんじゃないのかな??

「いや、おまえが心配やったから…その、近くに棒高跳びの棒があったもんで…」

もしかして…

棒高跳びでここまではいってきたの!?

さすが…

運動神経抜群だね…

でもち、

棒高跳びで入ってきたってことは…

「ねえ、それじゃあ斎藤もここからでられないんじゃないの…??」

斎藤の顔が固まった。

「ほ…んまや…」

やっぱり何にも考えずに入ってきたんだ。

やっぱり無鉄砲なやつ。

けど…

私を心配してはいつてきてくれたんだよね??

それは…

素直にうれしいや。

「ありがとね。斎藤。」

「ん…??ああ。でもでられへんけどな。」

斎藤がうつむきながら答える。

…そつだよね。

でられないのか…

誰かがここにきてくれたらでられるんだけど…

こんなところにそう簡単に人がくるわけないよね…

うん…

私が真剣に悩んでいると斎藤が急に気がついたように言った。

「じゃあしばらく2人つきりやな。」

「うん…2人きり…って!？」

そうだ!!

全然思いもなかったけど…

ここから出られるまで、ずっと斎藤と2人きりってことになるんだ!

そう思うと変に意識してしまう。

どうしよう…

こんな狭いところで男の人(しかも彼氏)と2人きりだなんて…

なんだか…

不安になってきた…(汗

13話 体育倉庫 理沙side(後書き)

小倉さん性格悪すぎです!!

閉じ込めるってどんなだよ!?

ちよつと矛盾がいつぱいすぎる話です…

しかもちよつと達也が通りかかるってところからおかしいのです…

本当にすいませんの一言です…

13話 救出！？ 達也 side

それからオレはずっと立川のそばにおるようにした。

授業中は毎回メールするし、

授業が終わったたらダツシユで立川の元へ急ぐ。

少なくとも、オレが見ているところでは立川はいじめられへん。

まあ、立川をいじめている連中は元オレの取りまきやからな。

大方オレに嫌われるんがいややとかそんなんやろ。

アホやなあ…

嫌われるも何も、最初からおまえらに何も思っていないっちゅうねん。

そんなわけで今もオレは立川の教室にダツシユしてるわけやが…

1 - A の教室。

「立川！」

いつもならここで笑顔で迎えてくれる立川。

けど、なぜか教室に立川の姿はなかった。

「あれ???立川は…???」

「立川さんなら早退したよ?」

近くに座っていた女子が言う。

早退…???

立川が…???

さっきめっちゃ元気そうやったけどなあ…???

まあ、いきなりしんどくなかったんかもしれんし…

そつとしいた方がええかもしれん。

そんな感じで深くは考えていなかった。

けど、

次の時間。

6時間目から体育とかだるい…と思いつつも体操服に着替えて一番に外にでていた。

なんで一番に外にでたかという単純にオレが体育係だからや。

今日は砲丸投げらしいから体育倉庫に取りにいかんと…

そんなわけでのんびりと体育倉庫に向かう。

さて…

この学校は体育倉庫が二つあるんや。

たしか新しい方からとってこい言われたな。

うーん…

新しい方…

こっちなやな。

そう思って新しい方の体育倉庫の方に行こうとしたとき、

「さ、斎藤！斎藤！！」

どこからか立川の声がした。

立川っ！？

びっくりしてあたりを見回してみる。

けど、どこにも立川の姿はなかった。

…???

聞き間違いか???

いや…

たしかに立川の声やったと思ったけどな…

「ちがう！上！上！…！！」

んっ???

上???

見上げてみると古い方の体育倉庫の窓から立川の顔…って!?

なんで立川はあんなところにおるねん!?

「立川っ!?!そんなとこで何してるんや!?!」

「とじこめられちゃったの!!助けて!!」

「閉じ込められた!?!よし、ちょっと待ってるよ!」

今、急いで鍵とりにいったるからなっ!!

オレは急いで職員室に走った。

「すみません！古い方の体育倉庫の鍵ありますか!?!」

勢いよくドアをあけて大声で言う。

「古い方???:あぁ、それならさっき誰かが持っていったちゃってないよ???:」

はっ!?!?

ない!?

じゃ、立川はどないするねんっ!?

とりあえず…

いったん戻るか。

内心思いつきり焦りながらもなんとかおちついてもう一度古い体育倉庫の方に走った。

「立川!！」

叫びながら窓を見上げる。

けど、そこに立川の姿はなかった。

「立川!？」

どないしたんや!?

まさか!

なんかあつたんか!?

めっちゃ心配になってなんとか中に入れないかとあたりを見回す。

そして近くに新しい方の体育倉庫があるのに気がついた。

そっや！

棒高跳びで…！！

急いで倉庫から棒高跳びの棒を取り出すと助走をつけた。

あの窓…

結構高い…

いけるか…??オレ。

…うん。

いける。

オレの運動神経やったら問題ないはずや。

さあ、いけ！

立川のために飛ぶんや！

すうつと息を深く吸って思いっきり飛んだ。

思ったよりもめっちゃうまいこと行ってちょうど窓のふちに手が届く。

「ううっしやああー！！」

なんとかそこにつかまり窓のふちにのる。

立川がのぞいていたおかげで窓はあいており、すんなりと入れた。

着地にはちょっと困ったけど、そこはオレの運動神経の良さでおい
といてくれ（汗

「立川！」

暗がりの中、立川の姿を探すと、

ちょうど壁にもたれかかるように立川が座っていた。

ほっと息をつく。

「よかった…立川、無事か??」

返事はない。

つて…

寝てるし…

立川は壁にもたれてすやすやと眠っていた。

こんなところでよう寝れるわ…

「立川！立川！起きや！」

頬をペシペシ叩いても立川は目を覚まさない。

どんだけ熟睡しとるんや…

まあええけどやな…

立川の顔をじっと見つめる。

…めっちゃ、可愛いなあ…

栗色のふわふわの髪から下に下にと立川をじっくりと見る。

そして唇の所で目線が止まった。

…やわらかそうやなあ…

キスしたら…気持ちよさそうやあ…

思わず変なことを考えてしまう。

けど直後、ぶんぶんと首を横にふった。

あかんあかんあかん!!

何を意味不明なことを考えてるんや、オレは。

けど…

やっぱり立川の唇を凝視する。

ぷるぷるの唇。

すーすーと規則正しく寝息を立てている。

…これは、

誘ってるんとちゃうんか…??

そう思うともうおさえが聞かなくなった。

ずっと立川の顔に顔をよせる。

ええか？立川。

オレがごんだけ呼んでも起きへんおまえが悪いんやで??

「なあ、立川…」

「ん…誰…??」

急に返事が返ってきた。

ゆっくりと立川が瞼をあける。

「っわ!?!」

そしていきなり素っ頓狂な声をあげだした。

うわっ!?!

おきよった!?!

オレは慌てて後ろに下がった。

心臓がばくばくと鳴り響いている。

「た…立川…起きたか。」

変なタイミングにおきよって…

そんなにもオレにキスされるんがいややったんか…??

一人で少しへこむ。

「さ、斎藤!?!なんでここに…って!?!」

鍵はっ!?!?

とでも言いたげな顔をされた。

……どうしよ。

かなり言いにくいんやけどなあ…

「ごめん…体育倉庫の鍵…な?職員室になかってん…」

「えっ…」

立川は一瞬固まって、なんでもかはわからんけど納得したように首を縦に振る。

「…で、鍵見つからなかったのにどうして斎藤はここにいるの??」

「いや、おまえが心配やったから…その、近くに棒高跳びの棒があったもんで…」

近くにいうても体育倉庫の中にやけど…

「ねえ、それじゃあ斎藤もここからでられないんじゃないの…??」

……

「ほ…んまや…」

アホや。オレ。

オレまでこっからでられへんやんけ…

どうしよ…

「ありがとね。斎藤。」

心の中で頭をかかえていると急にお礼を言われた。

「ん…??ああ。でもでられへんけどな。」

オレがアホやったからな。

ほんまにごめん。

オレはこの世に生きてたらあかん大バカ者や〜!!

こんなやつと2人きりでこんなところおることになってほんまにごめん
なさい…って、

こっからでられへんちゆうことは…

「じゃあしばらく2人つきりやな。」

「うん…2人きり…って!？」

立川の顔が急に朱に染まった。

そして自分の体を抱いてオレを睨みつけてくる。

ん???

なんや???

2人きりやと思ったとたん急に不安なってきたんか?

心配せんでもええって!

何もせーへんわ! (まあさっきなんかしようとしたことはたしかや
けど…)

それにしても…

2人きりか。

なんか…

オレまで緊張してきたもつた…

13話 救出！？ 達也side（後書き）

サブタイトルと内容があってません…

すみません…

あとまたまた矛盾だらけです。

棒高跳びで入るって…

無理ないですか…??

しかも達也さんが微妙にエロっぽくなってしまいました。

まあこれからもちよっとそんな感じで…（笑

14話 2人きり 理沙side

「……………」

「……………」

なぜか2人の間を沈黙が包む。

なんだか斎藤も自分で言っというて緊張してきたみたい。

私も…

緊張しすぎてやばいよ…

心臓がすごい勢いで鳴り響いてる。

顔もすっごく熱いし…

どっしょよ…

何か話さなくちゃ…

気まずすぎる…

「斎藤！」

「立川！」

2人の声が重なった。

びっくりしてそこで会話を止める。

「…立川からさっき言っていたいで？」

「…いや、斎藤から言っつてよ。」

もう…

やっぱり変に緊張しちゃっつ。

斎藤が変なこというからだよっ！もう…

「いや、オレは何かここからでる方法さがそつて言おうとしただけ
や。」

「私も同じ…」

またそこで会話が止まる。

なんで止まるのよっ！

普通ここで何か続くでしょ！？

調子狂うなあ！

「…なあ、立川。こんなときに何やねんけっ…」

斎藤がボソツとつぶやいた。

「ん??何??」

「立川ってさあ、オレのこと『斎藤』って呼ぶよな?」

「うん。そうだけど…」

それがどうしたの??

普通そつじゃない??

「まえから思ってたんだけど…」

斎藤はぼそぼそと何かをつぶいている。

「えっ??何言ってるの??」

そんなにぼそぼそ言われても…

全然聞こえないよ!

「だからっ!その…一応オレら付き合ってるんやし…その、な?」

「その、何??」

だんだんイライラしてきた。

何が言いたいの!?

この人は!?

私がイライラしてきたのを見越してか、斎藤は真っ赤な顔で言った。

「オレのこと、達也って呼んでやー!」

思わずポカンとしてしまう。

いや、別にいいんだけどね...

「今、言う??」

何もこんなときに言わなくても...

「だからさっきこんなときに何やけど、って言ったやん!!」

斎藤の顔はすごい赤くて、それが可愛いなあ。って思った。

「そうだったけ? まあ、いいけどさ。じゃあ私のコトも理沙って呼んでね??」

斎藤: いや、達也はこくりとうなずく。

「じゃあ、理沙。どうやってこっからでる??」

達也は緊張がほぐれたのか急に真剣な顔で問いかけてきた。

といつか、ね。

よくいきなり名前呼びできるよね。

そういえば私、男の子を名前で呼ぶなんてあんまりないし、呼ばれ

ることもないからなあ…

なんか抵抗感じるや。

「うーん…やっぱりあの窓からでるのが一番の方法だね…」

「じゃあとりあえず、窓まで階段つばいのつくるか！」

私さっきつくりましたよ。

また重労働ですか…

トホホ…

心の中で泣きながら達也の言つとおり荷物を積み上げていく。

「ねえ、これこの上でいいの??」

「ああ、かして…」

達也が私のもっていた荷物をとろうとしたとき…

ガタッ！

達也がバランスを崩して倒れこんできた。

「うおっ！？」

「きゃあー！！」

達也に押される形で私も自然に倒れる形になる。

ゴソツ！と地面に腰を打ちつけた。

「つたあ……」

「す、すまん！ケガないか！？」

達也が心配そうに私の顔を覗き込んでくれた。

「うん……大丈夫だけど……って！」

達也の顔がほんのすぐ目の前にある。

よく見てみると、今の私の体制は達也に押し倒されたようになっていた。

な、何！？

この体制！？

「ちよ、ちよっと！達也！！」

「へ……？？う、うわっ！す、すまん！すぐどこから……」

達也もそれに気づいたようで私から離れようとしたが、何を思いとどまったのかそのままの体制に戻った。

そして私の瞳をじっと見つめる。

えっ…???

何何???

この雰囲気!?

何か危ない感じ!?

ちょ、はやく体を起こさなきゃ!

そう思つて体を動かそうとしてみるけど、達也の瞳に射すくめられ
て動けない。

「理沙…」

小さく名前を呼ばれた。

いつもと違う呼び方だからか、ドキッと心臓が強く鳴る。

「達也…??」

達也の顔がだんだんと近づいてくる。

もしかして…

キスするつもり!?

ちょ、やめてよっ!

心の準備が…!

おかまいなしに近づいてくる達也。

唇に触れるまでほんの数センチ。

触れるか触れないか、ギリギリのところまで急に明るい光に照らされた。

「理沙っ！！」

そして聞き覚えのある声が聞こえてくる。

この声は…

「…美香??」

開け放たれた体育倉庫の扉。

その向こうに目を潤ませて、息を切らした美香が立っていた。

14話 2人きり 理沙side(後書き)

こけて体制を崩して…

おきまりの展開です；

そしてまさかの美香さん登場です!!

14話 名前 達也 side

「……」

「……」

オレも立川も、緊張しているせいかな何もしゃべらん。

2人の間に流れる沈黙。

どうしよ…

めっちゃ緊張するやん…

いや、

2人つきりつてことに緊張してるんやないで??

そんなんやつたら何回も2人つきりになったことあるやん。

そんなことでいちいち緊張してたらきりないわ。

なんで今オレが緊張してるかというと…

こんな薄暗くて暗いところで好きなやつと2人つきりつてとこに緊張してるんや。

さっきみたいに…

変なこと考えてもつたらどうしよ…

おさえがきくかなんてわからん…

まあずっとこのまましゃべらんかったら余計に緊張するだけやし…

何か…言わな…

「斎藤！」

「立川！」

立川と声が重なった。

必然的に会話が止まる。

「…立川からさっき言っていていいで？」

「…いや、斎藤から言っつてよ。」

ここで立川に譲ろうとしても無限ループに突入してまうだけやし…

オレから言わしてもらおか。

「いや、オレは何かここからでる方法さがそって言おうとしただけや。」

「私も同じ…」

なぜかそこで会話が止まる。

…いやいや、ここは止まらんやろ!?

普通こっからどうやってでるかとかの方法の相談になるんちゃうんか!?

なんか…

この空気ほんまにきつい…

それにしても…

「…なあ、立川。こんなときに何やねんけど…」

「ん??何??」

立川が首をかしげる。

ホンマにこんなときに意味わからん話やねんけど…

「立川ってさあ、オレのこと『齋藤』って呼ぶよな?」

「うん。そうだけど…」

普通女子はみんなオレのことを『齋藤くん』とか『達也くん』とか呼ぶんやけど…

おまえだけ呼び捨てやねん…

いや、そんなことはどうでもいい。

「まえから思ってたんだけど…」

…なんでオレのことを『達也』って呼ばんの??

最後の言葉は立川に聞こえないくらい小さな声になった。

「えっ??何言ってるの??」

「だからっ！その…一応オレら付き合ってるんやし…その、な？」
だって雪乃だってオレのことを名前で呼んでくれてたし…

雪乃が名前で呼んでるんやからここは立川も名前で呼んで欲しいっ
ちゅーか…

その方が親しみやすい気がするし…

もっと立川との距離が近くなるような気が…まあこれは立川の前で
は言えんことやけど。

「その、何??」

立川の声にだんだん怒りが混じってきたような気がした。

あゝ！どうしょ！もう！！

立川なんか怒ってるし！！

オレ！

もう直球で言っ
てまえばいいやろ!?

「オレのこと、
達也って呼んでや!」

立川はポカンと口を開けて怪訝な顔をする。

「今、言う??」

ま、まあな。

それは普通に思うはずや。

それはオレも思ってるから。

「だからさっきこんなときに何やけど、
って言ったやん!」

立川はオレの慌てっぷりを見てクスッと笑うとオレを指差した。

「そうだっけ?まあ、いいけどさ。
じゃあ私のコトも理沙って呼んでね??」

まあ、そりゃオレのことを名前で呼んでもらうんやったらオレも呼ばなな。

そう思っ
てこくりと首を縦にふる。

よし、言
いたいことも言えたことやし…

本題に入らなな。

「じゃあ、理沙。どうやってこっからでる??」

初めて呼んだ名前は新しくて珍しいように思った。

理沙はどんな反応するやら…?? (ちゃっかり頭ん中でも名前呼びしてみる。)

「うん…やっぱりあの窓からでるのが一番の方法だね…」

何も反応せずに普通に答えられたのでほんの少し落ち込む。

まあ、ええけどぞ。

別に。

それにしてもたしかに窓からでるしか方法はないやらなあ…

「じゃあとりあえず、窓まで階段つばいのつくるか!」

さっき立川もしてたみたいやし!

オレもてつだつたらすぐにできるやら!!

そんな感じで階段をつくっていくことになった。

「ねえ、これこの上でいいの??」

理沙が結構大きな荷物(薄暗くて何かはわからん)を持ってきた。

ああ、これは理沙やったら届かんやろな。

「ああ、かして…」

そう思って理沙が持っていたものをとろうとしたとき…

ガタツ！

思いつきりバランスを崩してしまった。

「うおっ!?!」

そのいきおいで理沙まで巻き込んで地面に倒れこんでしまう。

「きゃあー!」

ゴソツ！と音を立てて理沙が腰を打ちつけた。

「ったあ…」

「す、すまん！ケガないか!?!」

理沙が痛み顔に顔をひきつらせているのを見て思わず慌ててしまう。

ちなみにオレは全然どこもうつてない。

そのかわりに理沙が痛い思いしてもうたってゆーか…

まあオレのせいなんやー!!

ケガしてたらどうしょー!?

「うん…大丈夫だけど…って!」

理沙は急にオレの顔を見てびっくりした。

…???

なんか顔についてる???

ホコリついてるとか…

「ちょ、ちょっと!達也!」

ぼんやりと考えると理沙が慌ててオレを押し返そうとしてきた。

それでやっと今の体制に気づく。

オレは理沙を押し倒したような体制になっていた。

「へ…??う、うわっ!す、すまん!すぐどこから…」

どこうとしてふと理沙の顔を見る。

赤く染まった頬。

オレを見る、なぜか少し潤んだ茶色の瞳。

…可愛い。

その言葉しか思い浮かばなかった。

「理沙…」

小さく名前を呼んでみる。

理沙の顔が耳まで赤くなって、不安そうな目でオレを見てくる。

「達也…??」

あかん…

やっぱり抑えられへんわ…

ゴメンな。

理沙…

体が勝手に動いて理沙の両手首を握り締めた。

そしてゆっくりと顔を近づける。

理沙の唇に触れてしまうまであとほんの数センチ。

その時、明るい光が差し込んだ。

「理沙っ！！」

誰かが理沙の名を呼ぶ。

「…美香??」

目の前の理沙が小さくつぶやいた。

三浦…??

差し込んだ光の方を見ると息を切らした三浦が立っていた。

14話 名前 達也 side (後書き)

14話の理沙 side でも思ってたんですけど…

いきなり名前の呼び方の話とかになりますかね??

やっぱり達也さんはよくわからない人です。

しかもやっぱりちよつとエロい人です；

ほんのちよつとですけどね!?

15話 仲直り 理沙side

どうして…

美香がいるの…???

って、こんなところ美香に見られたら余計ダメじゃん!?

そう思って思いつきり達也を突き飛ばす。

「うおっ!?!」

達也は思いつきりしりもちをついた。

そのすきに美香と向かいあう。

息を切らした美香の手には体育倉庫の鍵が握られていた。

もしかして…

助けにきてくれたの…???

どうして…???

美香も…

私をいじめてたんじゃなかったの…???

「美香…どうして…???」

問いかけると美香は大粒の涙をこぼした。

「理沙あ…ごめん…ごめんねえ…!!」

きれぎれでしぼりだしたような声。

「私…私…やっぱり理沙を嫌いになんてなれないのお!!」

「美香…」

『嫌いになんてなれない』。

その言葉が胸に響いた。

目に涙がたまる。

「なんで…美香が謝るの…??」

悪いのは私。

全部全部私。

私は美香から達也を奪った。

美香が達也を好きだって知ってたのにそれでも達也を好きになっ
てしまった。

「謝らなきゃいけないのは…私の方だよ…!!」

小さく小刻みに震える美香の体を抱きしめた。

「ごめんね…ごめんね…理沙…」

「ううん。私の方こそ…ごめん。ほんとにごめん…」

私達はとりあえず体育倉庫をでて教室に戻った。

もうみんな下校しちゃったみたいで教室には私と美香の2人きり。

達也は邪魔だから先に帰ってもらった。

私が体育倉庫に閉じ込められたのは5時間目。

あれから2時間近くもたってたんだ…

私すごい長い間体育倉庫にいたんだな…と少し関心したりする。

「私ね…理沙が斎藤くんと付き合ってたって知ったとき…すごいショックだったの。」

泣きやんだ美香が話し始めた。

まだ声はふるえてるけど十分に聞きとれるはっきりとした言葉。

「最初はね？理沙なんて最低な人だ、もう友達なんかやめてやるって思った。」

あの日の美香の表情を思い出した。

私を睨む、私に対しての怒りの憎しみでいっぱい表情。

「けど…理沙をいじめるのは辛かった。傷つく理沙を見るのが苦しかった。理沙と一緒にいられないのは悲しかった。それで私、気づいたの。私にとって理沙はとっても大事で必要な人だったんだなって。」

「美香…」

「私、斎藤くんよりもやっぱり理沙が大事なの。今は…斎藤くんが理沙にとられることよりも…理沙を斎藤くんを取られることの方がよっぽど苦しい。」

美香は私にほほ笑みかけた。

「理沙。いじめちゃったり、だいつきらいって言ったりしちゃって…本当にごめんね？本当に…本当にごめん…」

止まった涙がまたあふれだした。

けど美香はそれをぐっとこらえて笑みの形を崩さない。

「私と…友達のままできてくれる…??？」

小さな小さな一言はしっかりと私の耳に届いた。

にこつと笑顔をつくる。

「バカ…友達なんかじゃないよ…！私達は…『親友』でしょっ!？」

美香は本当にうれしそうに笑った。

私達はそのまま2人で家路に着いた。

ひさしぶりに美香といろんな話ができて…

たまっていたことをいっぱいいっぱい話して…

すっごく楽しかった。

やっぱり美香は私の一番の親友。

美香以外にこんなに楽しく話せる人なんていない。

そして私の家の前に着いた時、

ばいばいしようとする美香がふいに私の腕を引っ張った。

「待って、理沙。」

「…??何??」

「言い忘れてたことがあって…」

言い忘れてたこと??

「私…斎藤くんのこと、きっぱりあきらめたから。これからは理沙の恋を応援するよ!」

にこつと笑顔を見せる美香。

多分ムリに笑ってる。

そう思った。

けど美香が必至で笑顔をつくってくれてるのに、それを指摘しちゃったらかわいそう。

だから私も、笑顔で返す。

「うん。ありがとう！絶対に誰にも渡さないからっ！」

美香の前でこんなことを言うのはどうなんだろう???

それでも、私は宣言する。

絶対に達也は誰にも渡さない。

美香が本当にきっぱりあきらめられるように。

そして…

他の女の子達にもきっぱりと達也をあきらめてもらえよう。」

「…うん。うん。絶対離しちゃだめだよ…??？」

美香は小さくつぶやくと私の腕を離れた。

そして自分の家に向かって走って行く。

「私、絶対斎藤くんよりもいい人探し出すんだから！あとでうらやましくなったらって知らないよ!？」

明るい美香の声。

バカ。

達也よりいい人なんているわけないじゃない。

絶対にうらやましいと思ったりしないんだから。

でも、そんな人がいるといいね。

美香がまた本気で恋できるような…

そんな人。

「うん！応援してる!！」

大きく手を振りながら叫ぶ。

私は美香の姿が見えなくなるまで美香を見送っていた。

『私：斎藤くんのこと、きっぱりあきらめたから。これからは理沙の恋を応援するよ!』

そう言えるまで…

美香はどれだけ考えて、悩んだんだろう？？

美香はきつと本当に、本当に達也のことが好きだった。

そんな簡単に…

あきらめられるわけない。

それでも…

それでも美香は私のためにあきらめてくれた。

私の恋を応援するとまでいつてくれた。

そうまでして私との友情を守ってくれた美香のために、

私が唯一できること。

それは…

何があってもずっと達也のことを好きでいること。

美香にあきらめさせてまで手に入れたんだから。

絶対に、絶対に誰にも渡さない。

だから美香。

こんな私だけ…

ずっとずっと、

大事で必要な人でいてください。

美香はずっと、

私の大好きな親友なんだから。

15話 仲直り 理沙side (後書き)

美香編終了です

ちなみに15話は達也sideはありません。

けどすつごいあっけなく終わっちゃいましたね；

展開早すぎですがごめんなさい(涙

あと番外編集で美香sideの話も更新するつもりなので暇があれば読んであげてください！

16話 もうすぐ夏休み！ 理沙side

今まで頑張ってきた期末テストも終わって…

っ、ついに〜！！！

夏休みだあ〜！！

夏休みといえば…

やっぱり美香といっぱい遊びにいたり…

なによりも！

達也と一緒に祭り行ったり…

海行ったり…

花火見たり…

とりあえず！

今年は勉強のかいありで補習もないことだし！

いっぱいっぱい遊びまくるぞ〜！！

「理沙っ！楽しそうだね！」

後ろから美香に声をかけられた。

「うん！だって夏休みだよっ！？美香、いっぱい遊びに行こうねっ
！」

弾んだ声で言うと美香がからかうように笑った。

「私とじゃなくて斎藤くんとでしょ？？夏休みにはちょっとは進展
させなよ？？キスぐらいしなくっちゃ！」

「も、もう…美香ったら…」

美香はすごい。

すぐまえまで達也のことが好きだったのにもう私のこと応援できる
くらい立ち直っちゃってる。

美香はすごい強い子だ。

それにしても…

…キス…かぁ。

一応このまえされそうになっただけど…

もっとロマンチックにしたいよなあ…

私にとってはファーストキスになるんだし…

花火見ながらロマンチックに…

なんてねっ!!!

「私も夏休みには新しい人見つけなきゃ!もし私に彼氏できたらWデートしよーね」

「うん!早く見つけなよ!私、応援してるんだからっ!」

早く見つけなよ!、なんて、

私が言っていることじゃないけど…

けど、早く見つけて欲しいな。

ホントにこの夏休みに美香とWデートできたらいいなと思う。

「おっ!理沙!」

私達が廊下で話しているとちょうど達也が通りかかった。

にこっと笑って私達に近づいてくる。

「やっとテスト終わったなあ!」

「うんっ!もうすぐ夏休みだよ!いっぱいいっぱい遊びに行こうね
!」

ピタッ…

急に達也の顔が固まった。

「え…??どうしたの??」

達也は言いにくそうにじぶやく。

「ごめん…オレ、補習受けなあかんねん。だからあんまり遊びに行かれへんかも…」

…えっ？

「ええ〜！？達也、赤点とっちゃったのっ!？」

「ああ、残念ながらあと一点およばんかった。」

「も〜、斎藤くん！せっかく理沙が夏休み斎藤くんと遊ぼうと楽しみにしてたのに!」

美香が腰に手を当てて達也を睨む。

ほんとに達也にはもう何も思っていないみたい。

少し、安心した。

「ほんつまにごめん！補習終わったらいっぱい遊びにいこっなっ!」

「うん…別にいいけど…」

たしかに補習が終わってからもいっぱい遊びにいけることばできるけど…

私は夏休み中でも毎日達也に会いたかったのに…

「じゃ、理沙！斎藤くんの補習が終わるまで私といっぱい遊びにいこうー！」

「うん…そうだね！達也もしっかり勉強するんだよ！」

「わかってるわ！おまえのためにがんばるから！」

ん…???

今さらってうれいこといつてくれたような…

まっいいや。

軽く流しといて…

もうすぐ夏休み。

高校生活初めての夏休み。

きっとすっごく楽しい日々になるんだろうな。

ほんとに…

すっごくいい、すっごくいい楽しみ。

16話 もうすぐ夏休み！ 理沙side（後書き）

この話はこれから始まる夏休み編につながる結びの話のつもりです。
短くて意味不明ですいません；

ちなみに夏休み編は甘甘でいくつもりです！

16話 補習 達也 side

もうすぐ夏休みか…

楽しい楽しい夏休みのはずなのに…

じーっと張り出されている夏休み補習生の名前を見る。

真ん中らへんに『斎藤達也』と一行。

なんでオレが補習うけなあかんのやあゝ!?!?

…いや、なんでかは分かつてる。

それはオレが赤点とつたからや。

なんでオレは赤点なんてとつてもうたんやろつ…(涙

せつかく夏休みは理沙と楽しく過ごすつもりやったのに!

ラブラブな夏休みをまんきつするつもりやったのに!!

なんで…

夏休みの半分以上、学校にいかなあかんのやろつ…???

この学校…おかしいとちゃうか…???

と、落ち込みながらとぼとぼと教室に戻ろうとしているとA組の前

でちょうど理沙を発見した。

「おっ！理沙！」

よく見ると隣に三浦もいる。

なんかケンカしてたばかりやと思うけど…

もう仲直りしたんか…（一部始終見てた人

やっぱ女はようわからんわ。

「やっとテスト終わったなあ！」

「うんっ！もうすぐ夏休みだよ！いっぱいいっぱい遊びに行こうね
！」

ピタッ…

思わず動きが止まる。

「え…??どうしたの??」

理沙が不審そうな顔でオレの顔をのぞきこんできた。

「ごめん…オレ、補習受けなあかんねん。だからあんまり遊びに行
かれへんかも…」

理沙が一瞬固まった。

「ええ〜！？達也、赤点とっちゃったのっ！？」

「ああ、残念ながらあと一点およばなかった。」

そうや。

一応あと一点やったんや！！

それやのに…

それやのに…！！

まさかあそこで漢字を間違えてしまうとは…

あれがなかったらギリギリ補習なしやったのになあ…

「も〜、斎藤くん！せっかく理沙が夏休み斎藤くんと遊ぼうと楽しみにしてたのに！」

追い打ちをかけるように三浦に言われて余計に落ち込む。

理沙もなんとなく悲しそうな顔をしているように見える。

ああ〜！

もうめっちゃオレ悪者やんけ！！

「ほんつまにごめん！補習終わったらいっぱい遊びにいこ？なっ！？」

「うん…別にいいけど…」

それでも落ち込んでいる理沙の肩を三浦が慰めるように叩いた。

「じゃ、理沙！斎藤さんの補習が終わるまで私といっぱい遊びにいこう！」

「うん…そうだね！達也もしっかり勉強するんだよ！」

「わかってるわ！おまえのためにがんばるから！」

はやく終わらせて、はやく理沙と遊びに行くんや！

ちなみにさりげなく『おまえのために』とかいってみただけど軽く流されてしまったな…

とりあえず…

夏休みは補習のせいで短くなりそうやが…

理沙と絶対、思いっきり遊んだる！！

16話 補習 達也side(後書き)

達也sideも結びの話です。

高校の補習って何日くらいとか何するとかよくわかりません…(汗

まだまだ中学生なので；

知ってる方は教えてくださいさるとづれしいです> m () (m <

17話 予定 理沙 side

今日からついに夏休みが開始しました！

とりあえず今日は夏休みの予定を立てなくちゃね！

そんな感じで今日、うちには美香がきています。

「で、最初のうちは私と一緒に遊びにいくとして…」

美香が手帳にサラサラと予定を書き込みながらふいに視線をあげてじーっと私を見た。

「斎藤くんの補習が終わったら！とりあえず最初、海に行くんだよっ！」

「へっ…??なんで海??」

補習終わったあととかしばらくゆっくりしたいんじゃないかなあ??

それなのにいきなり海はきつくない??

「理沙！分かる??疲れた頭を理沙の水着姿で癒してあげるのよっ！」

「はあ!?意味わかんないよ!それ!」

思わず顔に熱がのぼる。

そ、そんなのはずかしいに決まってるじゃない！

「ぜったい嫌！！」

ぶんぶんと首をふる美香がはあっとため息をついた。

「理沙は全然分かってないよね…斎藤くんのためだよ？あと、私+
もついていくから！」

「へっ??美香もくるの…??+ って???」

へへっと美香がうれしそうに笑う。

「なんと、理沙に重大発表があるのです！」

美香は急に立ちあがった。

「私、彼氏できたの！！」

へっ…???

彼氏…???

「え、ええっ~~~~?!?!?」

み、美香！

ちょっとはやくないかなっ!?

だっついまえまで達世のことが好きって言ってたのに!!!

「誰！？誰と付き合ってるの！？」

美香がふふんと鼻を鳴らす。

「吉沢くんだよ！」

「吉沢…??」

つて…

たしか達也と同じクラスの…

まあまあかっこいい人だよね??

「なんで？いつのまに!？」

「ないしょだよっ！ちなみに吉沢くんも補習なんだ…だから補習終わったら私のためにも一緒に海いこっ！」

お願い！と美香が手を合わせてくる。

まあ…

美香がそこまでいうなら…

「仕方ない！！じゃ、一緒に行つてあげる！」

美香の顔がパアアッと輝いた。

「ホント！？すごいうれしい！そうだ！ついでに泊っちゃおう！キャンプにしようよ！」

「えっ！？キャンプ！？それはさすがに…」

「いいからいいからっ！斎藤くんにも言ってるね！」

美香は勝手に話を進めていく。

「よし！そうと決まれば、理沙！今度一緒に水着買いに行くよ！」

「えっ！？水着！？」

「可愛い水着を買って斎藤くんを悩殺しちゃおうの！」

の、悩殺って…

美香がそんな言葉を使うなんて…

でも、水着かあ…

そうだな。

どうせなら可愛いのがいいな。

達也に見てもらおうだったら…

「…そうだね。一緒に買いにいこうか！」

「うん！じゃ、斎藤くんにあいてる日あるか聞いててね！私も吉沢

くんに聞いておくから！」

「分かった！」

海でキャンプかあ…

まだ美香と2人で盛り上がってるだけで行くと決まったわけじゃないけど…

楽しそうだなあ。

なんだかすっごい楽しみになってきた！

明日にでも達也に言いに行かなくちゃ！！

17話 予定 理沙side（後書き）

キャンプの予定立てました！

もう次の話くらいで補習終わらせてキャンプ編行きます！

ちなみに美香の彼氏の吉沢くんは達也の友達（親友？）です！

いきなり付き合ってることになっちゃってますが…

それは番外編の方でやるつもりです。

また更新したら次の後書きにでも書きますので見てくださいね！

（最近話が短くて、内容適当ですいません…）

17話 吉沢の彼女 達也 side

「もう…無理…」

ガクッ！

そうつぶやくとオレは机につっぱした。

暑い…

死にそうや…

まさか真夏の教室がこんなに暑いとは…

これはまさに地獄やで…

「クーラーぐらいつけてくれてもいいのにな…」

隣の吉沢が下敷きで自分を扇ぎながらつぶやく。

「ほんまや！熱中症になったらどうするねん！絶対訴えて賠償金をふんだくってやるんや…」

大声をだしたら余計にしんどくなってきた…

ちなみに今教室にはオレ達2人きり。

なんでかというと…

他の奴らは朝のうちに終わらせてたからや。

オレらの学校は一日に決まったプリントの量を終わらせたら帰れるという変わった方式らしいねんけど…

オレらは朝さぼってたからまだまだ終わらせなあかんプリントが山のように残っているわけで…

「まあこのプリントを終わらせたら帰れるんだから、な？頑張ろっぜ。」

いやいや…

『プリント』なんて単数形であらわせられる量とちやうやる…

『プリント達』、英語で言ったら『Prints』。とりあえずこれは複数形でしか表すことができない…

「朝のうちやったらまだ涼しかったかもしれんのに…まったく何が悲しくてこんな奴と2人きりで勉強せなあかんのや…」

理沙と2人つきりって言うんやったらまだ楽しかったかもしれんに…

「はあ！？ったく、誰かさんが『ちょっとコンビニで時間つぶせへん？』とかなんとか言ってるオレをさばりにそそのかしたからだろ？」

だってあのとき暑すぎて少しでもクーラーきいたところ行きたかってんもん…

「あゝ！もう知らん！オレは帰る！」

「何言つてんだよ！ちよつと待てよ！！」

本気で帰ろうと立ち上がった時、携帯が鳴った。

こ…この着信音は…

急いで携帯を開く。

『補習頑張ってる??話たいことあるから終わったら電話してね』

＊ハ―ハ＊』

「誰からだ??」

携帯をのぞきこもつとする吉沢。

それを阻止するように携帯を閉じて席についた。

「さあ！もう一頑張りや！！」

「いや、もう一頑張りって…一頑張りしてないだろ…」

吉沢もつっこみながら席につく。

「で、さっきのメールって立川から??」

「まあな！おまえと違ってオレには待っててくれる彼女がおるんや
！やる気十分やで！」

「さっきまではやる気なかったじゃねえか…それに…」

吉沢はコホンとわざとらしく咳ばらいして言った。

「オレ、彼女できたし。」

いかにもおおげさな反応を期待している様子。

たしかに少しびっくりしたけど…

ここで思いっきり反応してもこいつの思い通りやしな…

「ふーん。」

思い通りになるのはやっぱり糞に障るから思いっきり薄い反応をしてやった。

吉沢は少し顔をしかめながらも誇らしげに自慢してくる。

「まあ、けっこう可愛いけどな。立川よりも可愛いんじゃないか？
？」

「理沙より可愛いやつはおらん。」

即答してやる。

どーせこいつの彼女なんてしょうもないやつに決まってるわ。

そんな聞くとよりもこのプリントの山を終わらせる方が最優先に決まってるやろ。

「ちなみにそいつは三浦っていうんだけど…ちなみに立川の親友だけどなー？」

理沙の名前がでてきて思わず耳を傾けてしまう。

「理沙の親友??」

三浦って…

ああ、あの子か。

まあ理沙の方が数百倍可愛いかな。

「ああ、彼女同士も仲いいし、オレ達も仲好くやろうぜ！」

そう言いながら吉沢はさりげなく自分のプリントをオレのプリントの上においてきた。

「仲好くするんはいいけど…おまえのプリントまでやってやるっていう気はない。」

オレは吉沢のプリントを吉沢の机の上に戻すふりをしてさりげなくオレのプリントもその中に混ぜておいた。

なんとか外が暗くなるまえにプリントの山を終わらせたオレは校門をでてすぐ理沙に電話した。

プルル…プルル…

二回コールで電話がつながる。

『もしもし？達也？』

可愛い理沙の声。

このこえを聞くためにがんばったんやなーとこっそり感動した。

「補習終わったで！話したいことって何？？」

『ああ、そうそう。今日ね？美香と話してたんだけど…あっ！ちなみに美香に彼氏できたんだって！相手は吉沢くん！たしか達也と仲好かったよね？』

「知ってる知ってる。さっき聞いたところや。で、それが言いたかったん？？」

『いや、違うの。達也達が補習終わってからだけど、4人で海にキャンプ行かない！？』

「キャンプ？？いいけど…」

三浦と吉沢も…？？

三浦は別にいいけど吉沢もくるんか…

『じゃ、決まりね！それじゃあまたあいてる日とか教えて！じゃあ

ね！」

えらく弾んだ理沙の声。

ちゅーかもう切るんかい！？

「ちょ、ちょっと待て！もうちょっとしゃべろ…」

ぶちっ！

…切られた。

もうちょっとらぶらぶトークを楽しみたかったんやけどな…

まあええや。

とりあえず…

理沙とキャンプか…（余計な奴らもついてくるけど…

楽しみやなあ…

よしっ！

そのためにもさっさと補習終わらせるか！

17話 吉沢の彼女 達也 side (後書き)

吉沢さんのキャラが固まってきたような固まってないような
とりあえずつつこみ役のつもりです。

で、達也がボケ役です。

2人にいるときはそんな感じにしようかなあ…

18話 サマーキャンプ 海 理沙 side

「さあ、ついたよ〜！」

美香のお父さんの車に乗って私達がきたのは、青い空と同じ色の真つ青できれいな海。

あれからいろいろ決めた結果、私達は美香の別荘に泊まることになったんだ。

美香って以外にお嬢様なんだよなあ（汗

そんなわけで！

やっと補習も終わった達也と吉沢くんをつれて、

私達は海にやってきたのです。

美香のお父さんを見送ってから私達は浜辺にでた。

「それにしても…すごくきれいだね！私びっくりだよ…！」

「それよりもオレは三浦が別荘を持ってるってとこにびっくりや。」

「同感。」

私が青くてきれいな海に感動していると後ろでぐったりとした声が聞こえてきた。

「どうしたの？2人とも…元気ないよ??」

「元気ないよ??…じゃないやろ!」

そう怒鳴ったのは達也。

「オレらはクーラーなしのあの地獄の教室で補習という試練を終えたばかりなんだぞ!?いきなりこんなところに連れてこられても困るっつーの!」

半泣きでそう言ったのは吉沢くん。

実は達也達はちょっと日をおいてからいきたいって言ってたんだけど…

それを聞いてたら夏休み終わっちゃいそうだから無理やりつれてきたんだ!

「でも嫌がってるわりには、ばっちり泊る用意してるじゃない!」

「それは…」

達也が言葉につまる。

「オレらだって気づかったんだよ!なあ?」

「お、おう!!!そうや!大体気づかって荷物詰めすぎて重いねん!」

そんな感じで私達が言い合っていると美香が困ったように笑った。

「みんな！そんなことどうでもいいから先、荷物置きにいこ？」

「そうだね！はやくいこ！ほら、達也！荷物持ってあげるから！」

そういつてぐでーっとしてる達也の荷物をつかむ。

…これ普通は逆なんだけどね。

ここで達也が『いや。いい。オレがおまえの持つ。』とか言ってくれたらうれしいんだけど…

チラツと達也の様子を見てみると達也は目を輝かせていた。

「持ってくれるん！？ありがとう！オレ、めっちゃうれしい！」

…こーいつやつなんだよね…

まあ別に期待はしてなかったけど…

たまに優しいところもあるからもしかしたらと思ってたんだけどね…

って！

達也の荷物…重っ！！

「達也！これ何いれてきたのよ！？」

「はっ？何って…うきわとかスイカとか…あっ！花火もあるで！トランプもあるし！いろいろ暇つぶしのやつもってきたんや！ちなみにポケットには…」

そう言ってごそごそとポケットをあさはじめめる。

「ほら、ルービックキューブや！」

取り出したのは全部の面が同じ色にしっかりと合わせられた立方体。

どうでもいいよ…

大体暇つぶしの道具だけでどうやってたらこんなに重くなるんだろう…???

まずスイカを持ってくる意味わかんないし！！

「あっ！今スイカいらんやろ、とか思ったな？それは間違いやで？海といえばスイカわりやからな！」

荷物がなくなっただけだからなのか急にご機嫌になった達也。

む…むかつく…

すっごい準備してるじゃない…

これ、絶対楽しみにしてたな…

「おい、おまえら！さっさと荷物おきにいくぞ！」

吉沢くんがあきれ顔で私達を見て言った。

「おお！いくで！理沙！」

「はい…」

自分から持つって言ったのに勝手かもしれないけど…

だんだんむかついてきた…

なんとか別荘にたどりつくところはずつこいきれいなところだった。

「すごい！木の香りがいっぱい！自然って感じだね！」

木でできたログハウスみたいな家。

こんな別荘持つてる美香ってやつば以外なお金持ちなんだね！

「それじゃ、荷物もおいたことだし…」

美香がもったいぶったように間をあける。

「ゆつくり昼寝でもするか！！」

空気を読まずに吉沢くんが一言。

びつくり発言に私と美香が顔をゆがめる。

「ちがうでしょ！海だよ！海！！」

「いや、オレは吉沢の意見に賛成やで！ちょっと休ませてくれ！」

座りこもつとする達也の腕を引つ張つてムリやり立たせる。

「ダメでしょ？誰のために荷物もってあげたかしっかり考えてみてね？」

「…オレのためです。」

「なら少しぐらい私達のわがままも聞きなさい！」

「…はい。」

なぜか敬語の達也をほっという私達は別の部屋に移動して水着に着替えることにした。

「じゃ、先に海で待っててね！」

部屋を移動しようとしたときに達也がカバンからごそごそと何かを取り出そうとしていたのは見なかったことにする。

よーし！

ばっちり新しい水着にも着替えたことだし！

海だよー!!

「いこー!美香!」

「うん!」

美香と一緒に海に走って行くと達也と吉沢くんがいつのまにか立
たパラソルの下でくつろいでいた。

「ごめん!待った?」

「いや、もうちょっとゆっくりきてくれてもよかった!」

吉沢くんが大きなあくびをしながら答える。

達也は…

って、寝てるし…

それにしても達也ってよく寝るよね…

「ほら、起きろよ!斎藤!立川とかきたぜ?」

「うーん…今日学校休む…」

吉沢くんが達也をゆすってみるが達也はむにゃむにゃとよくわから
ない寝言をつぶやいている。

「ほら!達也!起きる!」

私が思いつきり怒鳴るとやっと達也が目覚めました。

「ん???もう朝か??」

いや…

もう昏です…

と、心の中で小さくつつこみながらため息をつく。

達也はやっと目が覚めてきたのか体を起こすと私をじっと見た。

「ん…???何??」

じーっと舐めるようにみて急ににこっと笑う。

「理沙！水着姿もめっちゃ可愛いなあ！」

カアアアア！

思わず顔に熱がのぼる。

そ、そんな直球に言われても…!!

「そ！そんなのいいからはやく泳ぎに行くよ！」

「いや、オレはいいわ。ちょっとしてから行くから先泳ぎにいつて?」

「はあ…別にいいけど…あとで絶対にきなよ？じゃ、美香、吉沢くん！いいか！」

「いや、オレも遠慮しとく。先に2人で遊びに行つててくれ。」

「え〜！吉沢くんも〜!？」

美香があきらかに不満そうな声をあげた。

「もう…2人とも全然遊ぶ気ないんだから…もういいや！美香！いいよ！」

「うん…」

ちよつと落ち込みモードの美香。

…やっぱ補習終わつてからもうちよつと待つてみるんだつた…

「それにしてもあの2人、ノリ悪いよね…」

「うん…まっ！いいけどさ！理沙と遊べるし！」

そう言つて美香が水をかけてきた。

「わっ!?!もう、やめてよ！ほら、おかえし!！」

びびつと思いつきり水をすくつて美香にかける。

「やっ!もう!！」

2人で水の掛け合いになってしまった。

まあ楽しいからいいけど

そんなとき…

「ねえねえ、君達暇じゃない??一緒に遊ぼうぜ!」

急に3人くらいの男の人達に声をかけられた。

…何?この人達…

うつつとうしいなあ…

美香は怖がって私の腕をつかんできた。

まったく、

美香も怖がつてるじゃない…

「すみません。私達2人で遊びたいんですけど…」

「いいじゃん!たくさんで遊んだ方が絶対楽しいって!」

そう言って1人の男が慣れなれしく私の肩に手をおいてきた。

もう!

触らないでよ!気持ち悪い!

そう思つて手を振り払おうとしたとき…

ガシッ！

男の手が力強くつかまれた。

「人の彼女に手だすんはあかんのとちゃうか？？」

えっ？

…達也??

びっくりして声のした方を見てみるとそこには怖い顔をした達也。

美香のそばには吉沢くんがきていて美香を後ろに隠すように立っていた。

達也はぎりぎり男の手を握り締める。

「今度こいつに手だそうとしたら…分かってるな？」

男は達也の言葉にすくみあがりながらも達也の手を振り払った。

「…っち！彼氏持ちかよ…いくぞ。」

そう言つて男達はどこかにいつてしまった。

「理沙！大丈夫か！？変なことされてない！？」

「いや…大丈夫だよ。でもちょっと怖かった。ありがとね。」

「ああ、当然やる！まったく、人の彼女に手だすとはとんでもない連中や。」

達也は男達の消えた方を睨むと罰が悪そうにつぶやく。

その達也の横顔を見ながらぼんやりと考える。

さっき私を助けてくれたとき…

達也は本気で怒ってくれた。

私のために。

すごい…

すごいうれしかった。

さっき助けてくれたときだってすごいかったよ…

私、達也の彼女でよかったよ。

「…よし！じゃ、達也と吉沢くんもきたことだし！今から思いっきり遊ぼうか！」

「しゃーないなあ。遊んだるか！」

「え…オレはもうちょっと休みたいというか…」

「おまえはもうちょっと空気読め！」

またまた吉沢くんの空気読めない発言に達也がつっこんだ。

それを見て美香と2人で笑う。

…よし！今からいっぱい遊ぶぞー！！

18話 サマーキャンプ 海 理沙side (後書き)

進行上勝手に美香はお金持ちって設定にしました。

かなり適当です。

ちなみにこの話では達也と吉沢くんはお笑い傾向に (?)

吉沢くんはかなり空気読めないキャラということで (笑)

あと番外編の美香sideもupしましたので暇があれば見てください！

18話 キャンプ 海 達也 side

「さあ、ついたよ〜！」

三浦のおっちゃんの車に乗って（無理矢理乗せられて）ついたのは青い海。

あの地獄の補習：蒸し暑い中、クーラーなしでひたすらプリントをやらされるといふ…が終わってゆっくり休もうと思ったのに…

オレはなんでこんなところにいるんやろう…??

三浦のおっちゃんの車を見送ってからオレ達は浜辺にでた。

「それにしても…すっごくきれいだね！私びっくりだよ…！」

理沙が海を眺めて感嘆の声をもらす。

たしかに海がこんな青いのは驚きかもしれんけど…

「それよりもオレは三浦が別荘を持ってるってどこにびっくりや。」

今日泊まる場所は三浦の別荘らしい。

…普通に考えて一般家庭の人間が別荘なんて持ってるか…??

めっちゃびっくりやねんけど…

「同感。」

吉沢も疲れ切った無表情で答える。

「どうしたの？2人とも…元気ないよ??」

そんなオレ達を見て理沙がきよとんとした顔で聞いてきた。

それを見てふつつつと怒りが湧き上がってくる。

「元気ないよ??…じゃないやろ!!」

「オレらはクーラーなしのあの地獄の教室で補習という試練を終えたばかりなんだぞ!?!いきなりこんなとこに連れてこられても困るっつーの!!」

オレが怒鳴ると吉沢がオレの気持ちを引き継ぐように言った。

そうや!

オレらは補習終わったばっかしやねんぞ!

やっと夏休みに学校に行くというなんとも不快な思いをしたり、こんな猛暑の中クーラーもつけない教室で勉強するという地獄から解放されてクーラーのきいた部屋でのんびりできると思ったのに…!!

何が悲しくてまたこんな暑いところに来る必要があるんや!

オレらが抗議していると理沙がオレらの荷物を指さして言った。

「でも嫌がってるわりには、ばっちり泊る用意してるじゃない!」

オレのそばにはパンパンに詰まった黒い大きめのスポーツバッグ。

「それは…」

思わず言葉につまる。

…それは、おまえとキャンプってのをまあまあ楽しみにしてたから…

そんなこと、言えるはずがない。

「オレらだって気づかったんだよ！なあ？」

どうしよって思ってたとき、吉沢が助け舟をだしてくれた。

「お、おう！！そうや！大体気づかって荷物詰めすぎて重いねん！」

オレが今機嫌悪いわけもちよっとはこの荷物にあるんや！！

もう重すぎてもたれへんわ…（涙）

そんな感じで言いあっていると三浦が困ったように笑った。

「みんな！そんなことどうでもいいから先、荷物置きにいい？」

どうでもよくない！！

心の中でつつこむ。

「そうだね！はやくいいこ！ほら、達也！荷物持ってあげるから！」

そう言って理沙がオレの荷物をつかんだ。

「持ってくれるん！？ありがとう！オレ、めっちゃうれしい！」

やっぱり理沙っていいやつや！

さすがオレが好きになっただけある！！

まあ女に持たせるんもどうかと思うけど…

オレはそんな常識に縛られへん！

人の親切は素直に受けるんが一番やからな！

理沙はオレのカバンを持ちあげて驚いたような顔をした。

「達也！これ何いれてきたのよ！？」

「はっ？何って…うきわとかスイカとか…あっ！花火もあるで！トランプもあるし！いろいろ暇つぶしのやつもってきたんや！ちなみにポケットには…」

ふふふ…

これを見て驚けよ？理沙。

車の中でひそかにそろえてたんやで？

「ほら、ルービックキューブや！」

ポケットからとりだしたのはさっき全部の面をそろえた暇つぶしの定番、ルービックキューブ。

理沙はあからさまにどうでもいいだろって顔をした。

ちよつとショックや…（涙）

そしてなんでスイカ？とかいう顔をした。

慌てて持ってきた説明をする。

「あつ！今スイカいらんやろ、とか思ったな？それは間違いやで？海といえばスイカわりやからな！」

オレのおかげで今日のキャンプで暇になることはない！！

昨日あらゆる暇潰しの道具をバッグにつめこんだからな！！

「おい、おまえら！さつさと荷物おきにいくぞ！」

吉沢があきれ顔で言った。

その手にはちゃんと自分の荷物がつかまれている。

よお持てるなあ…

オレはそんな元気ないわ…

まっ！オレの荷物は理沙が持ってくれたから大丈夫やけど！！

「おお！いくで！理沙！」

「はい…」

後ろから理沙のちょっとしたきれたような声が聞こえてきた。

そんな感じでオレは荷物がなくなって楽々で三浦の別荘にたどりついた。

さっさと中に入って荷物をおく。

「すごい！木の香りがいっぱい！自然って感じだね！」

理沙がすうっと空気を吸いこんで言う。

まあめっちゃ自然って感じだな。

でも夜、虫とか入ってきそうやし…

自然すぎてもどうかと思うが…

「それじゃ、荷物もおいたことだし…」

三浦がにこっと笑って手を合わせる。

多分次、理沙が『海だよな！』とかいうんやろなあ…と思ってたら…

「ゆっくり昼寝でもするか!」

吉沢がKY発言を。

あちゃー…

でもうたなあ。吉沢の空気よめない性格。

理沙と三浦があらかさまにいやな顔をした。

「ちがうでしょ!海だよ!海!」

理沙が訂正するが…

「いや、オレは吉沢の意見に賛成やで!ちょっと休ませてくれ!」

ちょっと今から海はきついわ…

ここ結構涼しいし昼寝にはぴったりやる!

座りこもつとすると理沙に腕を引かれて無理やり立たされた。

「ダメでしょ?誰のために荷物もってあげたかしっかり考えてみてね?」

顔は笑顔やけど…

額に青筋立ってますよ…???

すいません…

心なしか黒いオーラもでてる気が…

「…オレのためです。」

理沙のただならぬオーラを感じて思わず敬語になってしまった。

「なら少しぐらい私達のわがままも聞きなさい！」

「…はい。」

オレ、撃沈。

やっぱり女は怖いです。

「じゃ、先に海で待っててね！」

いつのまにか機嫌を直した理沙が着替えるとかいって別の部屋に移動した。

…海か。

しゃーない。

ここまできたらもう行くしかないな。

それに…

どうやら、これの出番がきたようやな…!!

「さ、斎藤…何1人で笑ってんだよ…」

後ろで吉沢のおびえたような声がしたような、してないような…

あつという間に着替えたオレ達は猛暑の中の砂浜へ。

「…暑いな。」

「ああ、あの教室よりも暑い。」

そんなオレ達の手にはパラソルとシート。

もちろんオレが持ってきたものや。

「さあ、さつさとこれたてて昼寝タイムや!」

「おお!もしかしてそのためにパラソルとシートを…!?!?」

「そつや!理沙達がくるまえにさつさと立てて昼寝してしまおうという作戦や!」

名づけて!

『寝てしまえばこつちのもの作戦! (?) (?)』

そつと決まれば…!!

さっさとパラソル立ててまっすぐ……!!!!

やる気満々のオレ達はあっという間にシートとパラソルを立て終わるとシートの上に横になった。

「さあ、吉沢。あいつらが来る前にさっさと寝てしまっんや。寝てしまえばもうこっちのもんやからなあ……!!!!」

「そこまでして遊びたくないのか……??彼女と遊べるんだぜ??」

「オレは疲れてるんや!!」

今頃気づいたのかそんなことを言いだした吉沢をよそにオレは必至に寝ることに専念した。

今日が理沙といっぱい遊べるチャンスってことくらい知ってるわ!

でも、ほんま眠たいんや……

オレはあっという間に眠りについた。

「ほら!達也!起きる!!」

気持ち良く眠っていると急に頭上から理沙の大声がふってきた。

「……ん???もう朝か???」

まだ朝には早いんとちゃうか…??

全然寝てへんで…??

いや、めっちゃ周り明るいし…

海…??

なんで海??

ベッドの上で寝てたんとちゃうかったっけ…って!

そうやった!

オレ海きてたんやった!! (今頃

やっと頭がさえてきたオレは体をおこして怒ったような顔をしてる
理沙に視線をうつした。

水着…??

あ、そうか。

海やもんな。

それにしても…

思わず理沙を凝視してしまう。

水着姿の理沙は細い体のラインがはつきりとつきでいて…
びっくりするくらい可愛かった。

…やばい。

めっちゃ可愛いやん…

オレ、顔赤くなってへんかなあ…??

理沙に悟られないようにできるだけ自然に笑顔をつくる。

「理沙！水着姿もめっちゃ可愛いなあ！」

理沙が一気に真っ赤になった。

…オレもあんなになつてたらどうしよ…

と、心の中で心配しながらもその反応も可愛いなあと思つ。

「そ！そんなのいいからはやく泳ぎに行くよ！」

めっちゃ照れ隠しやん…

まあ一緒に泳ぎにいきたいのは山々（？）やけど…

「いや、オレはいいわ。ちょっとしてから行くから先泳ぎにいつて？。」

ちょっとそんな元気はないわ…

「はあ…別にいいけど…あとで絶対にきなよ？じゃ、美香、吉沢くん！いこか！」

「いや、オレも遠慮しとく。先に2人で遊びに行つててくれ。」

「え〜！吉沢くんも〜！？」

「もう…2人とも全然遊ぶ気ないんだから…もういいや！美香！いくよー！」

「うん…」

理沙と三浦の後ろ姿を見送りながらもう一度シートに横になった。

「さてと、もうひと眠りするか…」

「おまえ、ホントによく寝るよな…」

「ほっとけや。」

寝る子は育つっていつやる？

まあ別に関係ないけど。

「それにしてもやっぱり三浦って可愛いよなあ…」

吉沢がうつとりと三浦の方を見ながら言った。

おいおい…

ちよつと変態くさいで…

まあそれは友達として口にださないことにする。

「そんなやつが彼女になってくれて良かったねっ」と…

さてと、オレはお昼寝モードに突入するのでしょうか。

そう思ったとき、

「あれ？なんか、三浦達のところに三人くらいの男が近づいていって
るんだけど…」

吉沢の言葉で体を起こした。

「はあ!?!」

慌てて理沙達の方を見る。

確かに三人くらいの男が理沙達に近づいていった。

ま、まさか…

ナンパっていうやつかーっ!?

「くっそ！いくで！吉沢！」

「あ、ああ!?!」

オレの彼女にナンパするとはいい度胸やなっ！！

オレが止めようとした瞬間、男の一人が理沙の肩に手をふれた。
ついにオレの怒りは頂点に。

理沙の肩に触れている男の手を思いつき握り締めた。

「人の彼女に手だすんはあかんのとちゃうか??」

ましてやオレの理沙にこのきたない手を触れるとは…

このオレを、なめとるんか??

怒りにまかせてギリギリと男の手を握る。

殴ってやろうと思ったが、理沙のまえでそんなんするんはあれやか
ら必至に気持ちいを静めた。

「今度こいつに手だそうとしたら…分かってるな?」

男はオレの手を振り払うと舌うちをしながらオレを睨む。

「…っち！彼氏持ちかよ…いくぞ。」

そう言っつて男達はどこかに去っていった。

はんっ！負け惜しみで睨まれても全然怖くないわ！

それよりも…

「理沙！大丈夫か！？変なことされてない！？」

「いや…大丈夫だよ。でもちよつと怖かった。ありがとね。」

「ああ、当然やる！まったく、人の彼女に手だすとはとんでもない連中や。」

理沙に怖い思いさせたんか…

あいつら最悪やな。

だから彼女できんのや。

そんなんで人の彼女とろうとするなんて頭おかしいんちゃう？？

海で溺れて死んでまえ！！

まったく…

「…よし！じゃ、達也と吉沢くんもきたことだし！今から思いっきり遊ぼつか！」

理沙が笑顔でいった。

その笑顔を見てほつとする。

よかった…

そんなに気にしてないんやな。

「しゃーないなあ。遊んだるか！」

またあんなやつらにからまれてもあかんしな。

なんたつて理沙はオレが惚れるほど可愛いんやから！

「え…オレはもうちょっと休みたいというか…」

「おまえはもうちょっと空気読め！」

吉沢の空気読めない発言につっこみながら、気付かれないように笑ってる理沙の方を見る。

やっぱり…

おまえのそばにはオレがついてないとあかん。

いつ誰に取られてしまつかわからん。

いつ誰がおまえを傷つけるかもわからん。

こんなこと…

今思つのもへんやけど…

これからはどんなにしんどくても、

ずっとおまえのそばにいる。

そばでおまえを守つたるからな！

18話 キャンプ 海 達也 side (後書き)

この話…

またよくわからないです；

達也が最初は理沙に対してあんまり何も思っていない感じですが最後は大好きです。

変になってすいません>m) (m <

19話 サマーキャンプ 花火 理沙 side

「そろそろ暗くなってきたね…」

すっかり遊びつくした私達は夕食を食べ終えて夜の砂浜にきていた。

今からここで何をするかっていうと…

「よし！じゃあ花火大会だあ！！」

達也が持ってきていた花火をすることになったんです。

「やっぱりオレがいっぱい準備してきたてよかったやろ？感謝しーや！」

得意気に言ってくる達也はとりあえず無視。

「じゃあオレから火つけるぞ！」

吉沢くんがさつさと袋をあけて花火を一本とりだした。

「あつ！おい！普通オレからやる！？」

カチッ。

ライターの火を花火にうつす。

シュー！！

音を立てて花火が勢いよく燃えだした。

「わー！きれい！！！」

火花がふきでてそれがいろんな色に変わっていく。

こんな小さな花火でもこんなにきれいなんだ。

「三浦達も火つけろよ。」

「うん！」

美香も花火を取り出して火をつけ始めた。

「よし！私も！」

「あつ！待てや、オレも！」

私と達也も火をつけて暗くて静かな浜辺に花火の明るい光と私達の笑い声が響く。

「おい、吉沢！花火持ったまま追いかけてくるんはやめてくれ！」

「さんざんおまえの分のプリントまでやらされた恨みじゃー！！！」

何かよくわからないことをつぶやきながら達也を追いかける吉沢くん。

それから必至で逃げる達也。

それを笑いながら見守る私と美香。

すっごい楽しかった。

けど…

そんな時間がずっと続くわけでもなく…

「あとは線香花火だけか…」

あっという間に全部使いつくしちゃって、残ったのは線香花火だけ。

大体こうやってみんなで花火すると線香花火だけが最後に残っちゃうんだよね…

「よし！じゃあ誰が一番火を長く持たせられるか競争しようぜ！」

「うん！賛成！」

吉沢くんの提案で私達は一本づつ線香花火を握った。

「いくで？よーい…ドン！」

達也の音頭とともに同時に火をつける。

小さくチロチロと燃え続ける明かり。

さっきまでのわーわーうるさかった時間がウソみたい。

みんな自分の花火が落ちないように必死で息をこらしてる。

よし！

私も負けないぞ！！

ポトツ。

最初に達也の火が落ちた。

「うわ！最悪や…負けたし…」

「ふん！集中力がたりねえなあ！見る！オレのはまだまだ大丈夫…」

ポトツ。

吉沢くんが得意気に自慢しているうちに吉沢くんの火がおちた。

「はい、おまえも負けー。」

達也がそれを嘲笑う。

残るは私と美香の2人だけ。

よし…

絶対に負けないんだから…

ポトツ。

そのとき美香の火が下におちた。

「わっ…落ちちゃった…」

「やったあ！私の勝ちだね！」

ポトツ。

そう言った瞬間に火がおちた。

けど、今おちても私の勝ちは勝ちだもん！

「はあく。負けちゃったよ…。でも、これで花火も終わりだね。」

「じゃあ片付けは一番最初に負けた達也にお願いします！」

「げっ…オレ??」

そう言いながらもしぶしぶ花火の後を広いながら片づけていく達也。

それを見ながら吉沢くんがふと何かを思いついたような顔をして美香の腕を引っ張った。

「なあ、三浦。多分夜もだべったりするだろうし…夜食とか買いにいこうぜ?」

「えっ…?別にいいけど…理沙達も行く??」

「あっ、うん。」

私が同意すると吉沢くんが首をふった。

「いや、そんなに人数いらねえし…オレ達だけで行くよ。立川とかは留守番しててくれ。」

「えっ…うん…」

そう言っつて美香と吉沢くんは近くのコンビニに行ってしまった。

「あれ？吉沢達どこ行ったん？？」

花火のゴミ捨てから戻ってきた達也が吉沢くん達が行った方向を見ながら言った。

「ああ、何か夜食買いに行くとか言っつた。私もついてくっつて言っつたらいいっつて言われて…なんでだろう？？」

達也はなぜか少し罰の悪そうな顔をするため息をついた。

「ほんまにあいつは…」

1人で何かをつぶやきながら頭をかく達也。

「どっつたの？」

聞いてみると達也はなぜか顔をあかくした。

「いや…！なんでもない！」

そしてその場に座り込む。

なんとなく、私もその隣に座った。

「なんか、2人がいないと寂しいね…」

ぼそつとつぶやくと達也がにこつと私に笑いかけた。

「オレな？最初ここに無理やり連れてこられたみたいなこと言っただけど、ほんまは楽しみにしてたんやで？」

えっ？

でもすっごいしぶってたと思うけど…

「なんで？補習終わってからだから疲れてたんでしょ？」

まあ、それでも無理やり連れてきたのは私だけだね。

「まあな。でも、それでも楽しみやった。なんでやと思うっ？」

ふいの問いかけに一瞬固まってしまう。

なんだかさっきまでの達也とはなんか違う感じ。

なんか…

真剣な感じ???

私が首をふると達也は小さく笑って海を見た。

「おまえと長い時間一緒におれるから。」

ドキッ！

心臓が高く鳴る。

達也は私をドキドキさせる天才だ。

ふいうちでこんなことを言われたらドキドキしてしまうに決まっている。

「補習とかいろいろあっておまえとおる時間が少なかったからなあ……ちよっとでも長く一緒にいたかったんや。」

「私だって……達也と一緒にいられなかったから寂しかったよ??」

私の方が……

寂しかった。

もっともっと達也と遊びたかったのに。

ずっと達也と一緒にいないととられちゃいそうで不安だったのに。

でも補習だから仕方ないって我慢してたんだよ？

終わってからでも十分会えたのに、達也が疲れてるかもってずっと我慢してたんだよ？

ふわりと体が何かに包まれた。

気がつくとは私は達也の腕の中。

「達也…??？」

「オレ、おまえが誰かに取られてしまいそうで不安や。」

ぎゅっと私を抱きしめる腕に力が入る。

「ホンマは…吉沢とも…他の男とも一切話して欲しくない…おまえをオレだけのものにしてしまいたい…」

…私だって、同じ。

私だって達也が他の女の子なんて話して欲しくない。

例えそれが美香だって…

「なあ、理沙。」

じっと私の瞳を覗き込む達也。

少し茶の入った瞳に私が映る。

「キスしても…いい??？」

ドキドキと心臓が早鐘のように鳴る。

達也の瞳に囚われて目がそらせない。

達也がすっごい魅力的に思えてきてくらくらしてしまふ。

勝手に体が動いて、私はこくりとうなずいていた。

達也の顔が近づいてきて、ぎゅっと目をつぶる。

ビシッ！

音がしたかと思うと額がじんじんとした痛みを襲われた。

「ったあ〜!!」

目をあけると達也が手でこびんの形をつくって笑ってた。

「ドッキリ〜!!びっくりした!?!ほんまにキスされると思ったやろ!?!」

「思っていないよ!もう!」

「めっちゃ顔赤くなってたくせによう言っわ…ぶっ!」

思いつきり達也の顔を殴って達也に背を向ける。

…本気で思ってたに決まってるでしょ…??

だっであのとき…

私は、達也とキスしたいって思ってたんだから…

さっきの話…

どこからが本気で、どこからがウソなんだろう…???

『ホンマは…吉沢とも…他の男とも一切話して欲しくない…おまえをオレだけのものにしてしまいたい…』

あの言葉…

本気に聞こえたんだけどなあ…??

達也は…

本当に私なんかのことを好きなのかな？

思えば思うほど不安になってくる。

私は達也とキスしてみたいって思うほど好きなのに…

達也。

あなたの気持ちはどうなんですか??

19話 サマーキャンプ 花火 理沙 side (後書き)

途中から変な展開に…

ってか花火のところがちょっとしかないじゃん！

サブタイトルは気にしないでください！

19話 キャンプ 花火 達也 side

理沙は可愛いから、

オレが見ていないとすぐに他の男がよってくる。

昼間、海での出来事で余計にそれを自覚した。

自覚してしまうと理沙に近づくすべての男が憎らしくなってくる。

急に、いつか誰かにとられてしまう気がしたんや…

「なあ、吉沢。」

「ん？なんだよ？」

理沙と三浦が夕飯の片付けをしている間、オレはなんとなく今思っていることを吉沢に相談してみようと思った。

けど、素直に言うんやなくて結論的なことを聞いてみる。

「どつやったら理沙をオレだけのものにできると思っつ？」

テレビを見ていた吉沢がびっくりして振り返った。

「いや…オレだけのものって…こんな言い方変だが、もう立川っておまえのものなんじゃねえの??」

いやいや…

それはわかっとなるがな…

でも、それはオレが思ってるだけ。

理沙はそう思っていないかもしれんやろ?

どうにかして、理沙にも自覚してもらうにはどうすればいいんやろなあって思ってたんだけど…

「理沙にも自覚してもらいたいんや。それと他の男もよらせへんようにする方法とか…ほら…たとえば印つけるとか…」

印ってどんなやねんって感じやけど。

吉沢は腕組みをして真剣に考え出した。

いや、そこまで真剣に考えてもらわんでもいいんやけどな…??

「まあ…よくわかんねえけどさ…。とりあえずキスでもしとけばいいんじゃないねえの??」

「…はっ?」

キス…???

キス…か…

実は何回かしてみようと思ったことはあるんやが…

結局邪魔が入ったりしてしたことはないよな…???

キスしたら…

理沙もちよつとはオレのものやっつてことを自覚するかな？

えっ？

理沙はもう普通に自覚してるだろって？

いやいや、

絶対に自覚してない。

自覚してたらオレがおらんときに海であんな可愛い格好して遊んだりせんやろ。

まあオレがついていかんかっただけやけど…

とりあえず！

他の男を近づけんようにすることはできんけど理沙に自覚させることはできる…！

「なんならあとで花火するとか言ってたから、そんなときに2人きりになるチャンスつくってやるよ！」

「おお、ありがとう…って、今日!?!」

それはちよつと無理やるー!?!?

いくらなんでも心の準備が…

「達也ー、吉沢くん。そろそろ外でよっか！」

夕食の片付けを終えた理沙が呼びにきた。

「おう。斎藤、ちゃんと花火持つてけよ！」

吉沢が立ち上がりオレにウインクしてきた。

『心の準備しとけよ』

こ…こいつ…

本気でオレと理沙を2人きりにするつもりや…

「そろそろ暗くなってきたね…」

三浦があたりを見て言う。

「よーし!じゃあ花火大会だあ!?!」

理沙がオレが持ってきた花火を持って元気よく言った。

「やっぱりオレがいっぱい準備してきててよかったやろ？感謝しーや！」

やっぱりオレはさすがやな！

大体キャンプとかの夜は暇に決まってるやろ??

そこは花火と相場が決まってるんや！

さあ、みんなオレに感謝してもいいんやで？

「じゃあオレから火つけるぞ！」

無視。

吉沢、感謝もせずにオレの花火を一本とりだす。

「あつ！おい！普通オレからやる!?!」

普通オレが持ってきたんやからオレからとちやうんか!?!

カチッ。

吉沢はオレなんかかんっぺきに無視して、花火に火をつけはじめた。

シューー!!!

色とりどりの火花が花火からとびでてくる。

「わー！きれい！！！」

三浦がさりげなく吉沢の近くに言って手を合わせた。

「三浦達も火つけるよ。」

「うん！」

吉沢に続いて三浦も火をつけはじめる。

「よし！私も！」

「あつ！待てや、オレも！」

オレ達もそろって花火に火をつけた。

「おい、吉沢！花火持ったまま追いかけてくるんはやめてくれ！」

テンションもあがってきたころ、吉沢が花火を持っておいかけたきた。

「さんざんおまえの分のプリントまでやらされた恨みじゃー！！！」

た、たしかに補習るとき、こっそりおまえのところにオレのプリント忍ばせたのは事実やけど！

花火は危ないやろー！？

オレ達の姿を見て理沙達が笑う。

おいおい…

こっちは必至やねんで…

まあ、いつか。

理沙が笑ってるし。

今、めっちゃ楽しい。

友達と、彼女とこうやって笑いあって、楽しい時間を過ごしてく。

この時間がずっと続けばいいのに。

けど、あっという間に花火は線香花火だけになってしまった。

まあ、線香花火といえはやな…

「よし！じゃあ誰が一番火を長く持たせられるか競争しようぜ！」

言おうとしたことを先に吉沢に言われてしまった。

くっそ！

それオレが言おうとしたのに…！

「うん！賛成！」

全員が賛成し、オレ達は一本つつ花火を手にとり、ライターに近づけた。

「いくで？よーい…ドン！」

オレが音頭をとり、一斉に火をつける。

シーン…

みんなが花火の火に集中して話さない。

沈黙。

しゃべりたくてうずうずしてきたけどふと理沙を見たとき、なんかめっちゃ集中してたから邪魔するんも悪いしオレも静かにしてることにした。

ぽーっと火の光を見ていると…

ポトツ。

手に持っていた花火の先端から、火種がおちた。

「うわ！最悪や…負けたし…」

しかもオレがはじめかよ…

めっちゃ運悪いなあ…

「ふん！集中力がたりねえなあ！見ろ！オレのはまだまだ大丈夫…」

吉沢が得意気に言った時、

ポトツ。

吉沢の火がおちた。

「はい、おまえも負けー。」

ざまーみる！

人のこと言える立場やないやんけ。

まあそんな感じで…

線香花火勝負。

「やったあ！私の勝ちだね！」

三浦との死闘の末（？）結局理沙が勝った。

「はあく。負けちゃったよ…。でも、これで花火も終わりだね。」

「じゃあ片付けは一番最初に負けた達也にお願いします！」

「げっ…オレ??？」

そ、それはないやろ…

そう言いながらもすっかりと片付けるオレはやっぱりお人よし。

オレはなんでこんなにもいいやつなんやろなあ???

と、オレが自画自賛しながら花火のゴミを捨てて帰ってきたとき、浜辺にとりのこされた理沙と、どこかに行こうとする吉沢と三浦の姿が見えた。

「あれ？吉沢達どこ行ったん??」

理沙に聞いてみると…

「ああ、何か夜食買いに行くとか言ってた。私もついてくっけて言ったらいいって言われて…なんでだろう??」

……夜食買いに行く??

三浦と…???

ということは…

『2人きりになるチャンスつくってやるよ!!』

はあ…とため息をつく。

吉沢の奴…!!

まさか本間にするとは…

あとで覚えとけよ!?

「ほんまにあいつは…」

心の準備とか…

してないし…

「どうしたの？」

つぶやきながら頭をかいていると、理沙に顔をのぞきこまれた。

「いや…！なんでもない！」

思わず顔に熱がのぼる。

それを隠すようにその場に座り込んだ。

理沙も同じように隣に座り、つぶやいた。

「なんか、2人がいないと寂しいね…」

…何言えばいいやろ…??

まあ、せつかく2人きりになったんやから、自分が思ってたことを全部言ってしまうおっかな…

なんとなく、気持ち落ち着いてきた。

顔の熱も、なんでか引いてきた気がする。

「オレな？最初ここに無理やり連れてこられたみたいなこと言っただけど、ほんまは楽しみにしてたんやで？」

にこつと理沙に笑いかけて言った。

「なんで？補習終わってからだから疲れてたんでしょ？」

理沙が不思議そうに聞き返す。

そりゃ、オレあのおときすつごい嫌な顔してたもんな。

今思えば、それは照れ隠しやってんけど…

「まあな。でも、それでも楽しみやった。なんでやと思っつ…」

理沙が首をふった。

理沙にわかるかわからないか程度に笑って海を見る。

「おまえと長い時間一緒におれるから。」

何言ってるんやろ？オレ。

なんかくさい言葉が口からペラペラでてくる。

めっちゃかつこつけみたいやな。

でも、これがオレの本気の気持ちやから…

「補習とかいろいろあっておまえとおる時間が少なかったからなあ

…ちょっとでも長く一緒にいたかったんや。」

ホンマは帰りにおまえの家に寄ろうと思ったこともあった。

けど、いきなり行っても悪い気がしたし、オレの中で理沙に会ったら毎日会わな気がすまんようになりそうやったから会おうとせんかった。

せつかくの夏休みや。

もっとおまえといっぱい遊びに行きたかった。

けど、全然行かれんくて、

めっちゃ寂しかったんやで？

分かるか？おまえに。

「私だって…達也と一緒にいられなかったから寂しかったよ??」

理沙がぼそつと言った。

…理沙も同じ気持ちやったん??

理沙もオレと一緒におれんくてさびしいと思っててくれたん??

うれしくなって、思わず理沙を思いっきり抱きしめた。

「達也…??」

「オレ、おまえが誰かに取られてしまいそうで不安や。」
ずっとこうしてへんかったら、誰かがおまえを奪っていつてしまい
そうで。

「ホンマは…吉沢とも…他の男とも一切話して欲しくない…おまえ
をオレだけのものにしてしまいたい…」

どうすればおまえはオレだけのものになってくれる？

吉沢が言ってみたいに…

キスしたら…

オレのものになってくれるんか…??

「なあ、理沙。」

心の準備なんてできてない。

けど、

理沙が手にはいるんやったら、心の準備なんてどうでもよかった。

オレは、どうかした。

じっと理沙の瞳を見つめる。

「キスしても…いい?？」

理沙の頬が赤くなる。

驚いて、揺らぐ瞳。

そしてこくりと小さくうなずいた。

顔を近づけていくと理沙がぎゅっと目をつぶる。

…理沙も同意してくれてるんやから…

別に…いいよな？

キスくらい…

誰でもしてることやろ…???

けど、

唇に触れるギリギリのところまでやめた。

代わりに理沙の額にでこピンする。

理沙はしばらく反応をせずに、そして急にやっと気がついたのか額を押さえた。

「ったあ〜!!」

潤んだ瞳でオレを見てくる。

「ドッキリ〜!!…びっくりした!?!ほんまにキスされると思ったや

る!？」

思いつきり笑いながら言うと言沙は少しすねた口調。

「思っていないよ!もう!」

「めっちゃ顔赤くなってたくせによう言つわ…ぶっ!」

からかってみると思いつきり頬を殴られて背中を向けられた。

その後ろ姿を見ながら苦笑いする。

ドッキリなわけないやろ…???

ほんまにキスしようと思った。

けど…

多分お互いにファーストキスつちゅうやつやと思っし…

それは、もっと大切なときにとっておきたい。

記念に残るようなものにしたから。

とりあえず…

あとで吉沢をしめあげなあかな(怒

19話 キャンプ 花火 達也 side (後書き)

最後らへん適当です；

すいません；

ホントはもっと深く書こうと思ったんですがね。

とりあえず理沙を自分のものにしたかったみたいな？？ (笑

20話 おやすみ 理沙 side

「そろそろ寝よっか…」

美香があくびをしながら言った。

時刻はあつという間に12時を回っている。

みんなでしゃべったり、トランプをしている間にあつという間に時間は過ぎていた。

「そうだな。そろそろ寝るか。」

吉沢くんも大きなあくびをする。

「まあ…な。そんな時間か。」

達也も時計を見ながら言った。

…私、まだ眠たくないんだけどなあ…

「じゃ、それぞれさつき決めた部屋に戻って寝るってことで！おやすみ！」

美香はよほど眠たかったのかさっさと自分の部屋に入ってしまった。

「じゃ、オレも寝るか！おやすみ！」

吉沢くんもそのあとに続く。

「理沙、オレ達も部屋はいろか。」

そう言っつて立ち上がろうとする達也の服のすそをつかんだ。

「…理沙??」

達也が怪訝そうな顔で私を見る。

どうしよ…

こんなこと達也に言ったら迷惑だよね…

達也も眠たそうだし…

でも…

「…私、まだ眠たくない…」

「はっ?」

だっつていつも寝てるの2時ぐらいなんだもん!

12時になんて眠れるわけないよ!

達也は顔をそむける私を見てふうっと息をつくど、その場にどかっ
と座りこんだ。

「しゃーないなあ!おまえが眠たくなるまでつきあつたるわ!」

「ほんと！？ありがとう、達也！」

やっぱり達也はたまに優しいね！！（ たまに??

とびきりの笑顔で達也に言うと、達也は少し頬を染めてそっぽをむいた。

そんな感じで最初はトランプでスピードをしたりしてただけけど…

「…これで35回目…理沙、まだ眠たくないんか??」

「うん…まだ目、すっごいさえてる。」

流石にスピードばかりはあきてきた。

かといって他のゲームは2人じゃつまないし…

達也の眠たさも限界に近づいてきたようだ。

「ゴメン…ホンマにゴメン…オレ、もう起きてられへんわ…」

達也の首はかくかくと上下し、気を緩めれば眠りそうな感じになっている。

「もう寝よつか…達也もすっごい眠たそうだし…」

達也は何度も謝りながら自分の部屋に戻っていった。

私も、部屋に戻る。

ベッドに横になって、毛布を深くかぶる。

目をぎゅっとなつぶって必至に寝ようとしてみるんだけど…

「…ダメだ、眠れないよ…」

今日にかぎって目がさえまくりだった。

一人でぼーっとしてるとなんとなく心細くなってくる。

…なんか…1人が怖くなってきた…

なぜかこのまま1人きりになってしまいそうで…

そんなこと絶対ないのに…

どうしても、怖くなった。

「達也あ…」

もう我慢できなくてベッドを降りる。

そして達也の部屋に向かった。

迷惑だと思いながらも、ゆっくりと部屋のドアをあける。

「達也…???」

もうとっくに寝てるよね…???

そう思いながらも、なんとなくまだ起きている気がして名前を呼んでみる。

けど、返事はない。

そうっとベッドのそばによつてみた。

…やっぱ、寝てるか…

達也はすでにスースーと寝息を立てて眠っていた。

せつかく気持ちよく眠ってるのに邪魔しちゃだめだよね…？

そう思つて達也の部屋をでようとしてみたけど…

…やっぱ1人は怖い…

もう一度ベッドのそばによる。

そして眠っている達也の体を揺さぶつた。

「ねえ、達也、達也、起きてよ！」

「…ん…何…や…？？」

達也が目を開くあけ。

やった！起きた！

「ねえ、達也。私も一緒に寝ちゃダメかな？」

思い切って聞いてみた。

何言ってるんだろ？私。

そんなのいいって言ってもらえるわけ…

「別に…いい…けど…」

達也は途切れ途切れの声で言うと私の腕を引っ張った。

「わっ!?!」

ぐいっと達也に引き寄せられる。

「ええっ!?!達也!?!」

「…一緒に、寝 へんの…?!?!」

達也が怪訝そうな顔で聞いてくる。

た、確かにそう言ってけど…

い、いいの…?!?!

「う、うん…」

で、でも…

せっかく達也がいいって言ってくれてるんだから…

ここはお言葉に甘えて…

ためらいながらも達也の隣に横になった。

「理沙あ…」

ぎゅっ！

達也が急に抱きしめてきた。

「はっ！？達也！？」

な、何！？

いきなり…！！

ってゆうか、達也絶対寝ぼけてるよね！？

普通ならこんなことしないし…

でも…

達也の暖かさが伝わってくる。

真夏の夜。

ちよつと暑いけど…（汗

それでも気持ち良かった。

「理沙…おやすみ…」

「うん、おやすみ。」

やっぱり達也のそばは安心できる。

何にも怖くない。

達也が私を抱きしめてくれる。

それがすっごい心地よくて…

さっきまで眠れなかったはずなのに…

あっという間に私はねむりについた。

ただただ、達也のぬくもりをそばに感じながら。

おやすみ。

達也。

20話 おやすみ 理沙side(後書き)

すごい適当です；

最後ほぼ同じこと書いてます。

ひさしぶりの更新がこんな話で本当にすいません>m< () m<
ちなみに20話の達也sideはないです；

達也は寝ぼけてるのでほぼ意識はありません。

予告<<<次の話でいきなりキャンプ編終わってます。

21話 花火大会 理沙 side

キャンプから帰ってきた私達。

けど夏休みはまだまだ残ってます！

今日の予定は…

「美香あ。これ、どうやって着るの??」

「も〜！仕方ないわね！私がやってあげる!!」

着慣れていない浴衣に四苦八苦しる私を見て、すでに浴衣を身につけている美香が私の浴衣に手をやった。

そして手なれた手つきで私の浴衣の着付けをしていく。

浴衣…

といえば、わかるよね？

そう！

今日は花火大会なんだ！

で、神社には出店もいっぱいあるから…

夏祭りも一緒に楽しめるといっわけです!!

当然、今回もメンバーはキャンプのときと同じ。

けど、実は…

もう、待ち合わせの時間がやばいんです（涙

「よし！理沙、急ごう！」

「う、うん！！」

必至で走って神社に向かう。

けど…

ゲタって走りづらいよ！

こけそうになりながらもなんとか時間ぎりぎりに到着。

「達也達、もうきてるかな？？」

「うん…あつ！いたいた！」

美香が指さした方を見るとすでに達也と吉沢くんが鳥居のまえでつたっていた。

吉沢くんが私達の姿を確認して大きく手をふってくる。

「三浦〜！立川〜！遅いぞ〜！」

「遅いって…今ちょうど時間になったとこだよ？」

たしかにちょうど時刻は待ち合わせの時間と同じ6時半。

「5分前行動！小学校のとき習っただろ??」

む…

そんなのどうでもいいじゃん！

吉沢くんは変なところで細かいんだから！

「まっ、そんなことはおいといて…さっそく行くっよ！」

美香は吉沢くんの話を軽く流すと吉沢くんの腕に飛び付いた。

「お、おい！」

吉沢くんの頬が少し赤く染まる。

けど美香はそんなことおかまいなし。

なんか…

美香って以外に積極的なんだなあ…

しみじみと考えて横目で自分の彼氏を試してみる。

達也はなぜか財布をじーっと見つめてガクツとつつむいてた。

…???

どうしたんだろ？

さっきから全然しゃべってないし…

…まっ、いつか。

とりあえず…

私には美香みたいなこと、とてもじゃないけどできないよ…

「じゃ、理沙！今からちよつと別行動タイムね！いこ！吉沢くん！」

へ…???

それって一緒にきた意味くない??

私がそれを言おうと思った時にはもう美香は吉沢くんの腕を引つ張って先に行ってしまった。

「行っちゃったよ…よし、私達もいこっか！」

にこつと達也にほほえみかけた。

けどやっぱり達也はうかない顔。

「どうしたの？達也。元気ないよ??」

心配になって達也の顔を覗き込んでみると達也は申し訳なさそうに私に向かって両手を合わせた。

「ゴメン。理沙。ほんまにゴメン。」

いや、いきなりそんなに謝られましても…

「なんで急に謝るの?」

「実は…な?オレ、このまえでござかい全部使ってしまったてん…」

「…へっ?」

このまえって…

キャンプの時?

あるときそんなにお金使うことあったっけ…??

考えてみたところで、すぐに心当たりがあった。

そういえば…

達也、何かいっぱいいらぬもの持ってきてたような…

あれ、全部自腹?

「だからな?出店でおまえに何も買ってやれんけど…ほんまにゴメン。」

達也は本当に申し訳なさそうに両手を合わせる。

最初はえ〜って思ったけど…

よく考えてみたら、なんとなくうれしくなった。

「…いいよ！気持ちだけでうれしいから！さ、いいっ？」

キャンプのときも私を楽しませようと思っていろいろ持ってきてくれたんだよね？

それに…

こんなに謝ってくれるのも…

私に何も買ってあげれないってことで謝ってるわけで…

私のことを考えてくれてるってこと。

たしかに私も達也まかせであんまりお金持ってきてないけど…（汗

物よりも、達也の気持ちだけで私はうれしいよ。

神社の中に入った私達はとりあえず自分のお金でいろいろ買って食べた。

達也の分も買ってあげるって言ったのに…

達也は断固拒否で私がいろいろ回るのについてきてくれた。

何か私一人で楽しんでるみたいで悪い気がするけど…

まっ、ここはお言葉に甘えるってことで！

そんな感じで出店を回っているうちに花火の打ち上げの時間がきた。

「あっ、そろそろ時間だ！」

「そつやな。見えやすそうなところ探すか。」

そう言っつて達也は人ごみをかきわけて進んでいく。

はじめはなんとかついていけたんだけど…

人にいっぱいぶつかっているうちに達也の姿を見失ってしまった。

あれ…??

達也、どこ??

もしかしてはぐれちゃった…??

ど、どうしよー…(涙)

あんまり動かない方がいいかな?と思っつて立ち止まってみる。

まわりの人達を見てみるとみんな友達と一緒にきてたり、カップルできてたりとかばっかで…

なんだか自分がすごくさびしく思えた。

「達也あ…どこ…??」

達也は今私がないことに気づいてくれてるかな？

私のこと、探してくれてるかな？

早く…

見つけて？

むびっいよ…

「達也あ…」

泣きだしそうになったとき。

「理沙っ！？」

私を呼ぶ、聞きなれた声。

見上げてみると、そこには達也の姿。

「急におらんようになったからびっくりしたでっ？？ちゃんとついてきーやっ？」

「だって…達也歩くの早いんだもん…」

「そうか？？じゃ、ゆっくり歩くようにするわ。とりあえず早く場所探さな間に合わんで？」

そう言って達也はまた人ごみをかきわけていく。

人ごみがまた、達也の姿を隠していく。

いや…

待って？

また1人になっちゃうよ…

さつきみたいになるのは嫌で、必至に達也を追いかけて服のすそをつかんだ。

ピタッ。

達也の足が止まる。

振り返ってはあっとため息をついた。

「ったく…しゃーないなあ。」

右手があつたかくて大きなものに包まれた。

「こつしてたらはぐれへんやろ??」

にっこりと私に笑いかける。

「…うん。ありがと…。」

達也は軽くうなずくと今度は私の手を引っ張って人ごみをかきわけていった。

すじい…

心臓がドキドキ言ってる。

たしか…

初めて達也のことを好きだと思った日。

その日も、

達也はこうして私の手を握っててくれた。

他の人から見たら手をつなぐなんて何気ないことなのかなあ？

普通に、いつでもできることかもしれない。

けど、私にとっては…

これが達也を好きになったきっかけ。

手をつなぐってことは、私にとってはすごく特別なこと。

達也は何も思っていないのかな？

今、あなたの気持ちがあつごく気になるんだけど…

達也は神社から少し離れたところで足を止めた。

「ここで見よか。」

なぜか人はいなくて…

私と達也の2人だけだった。

達也がどかっと地面に腰をおろす。

私も隣に腰をおろした。

ドーン！

ちょうど空に光の花が咲く。

「ぎりぎり間に合ったな。」

「うん…すっごい、花火が全部見えるよ。」

まわりには木が茂ってるのに花火の見える場所だけがぼつかりと開いていて…

本当にきれいに見えた。

「ここな？隠れ花火スポットらしいで？さっき吉沢に教えてもらったんや。」

「そうなんだ…。うん、すっごいきれい。」

私達はしばらく無言で光の花を見つめていた。

2人とも何もしゃべらなかつたけど私にとってはすごい幸せな時間だった。

すごいきれいなものを大好きな人と一緒に見てる。

すごい…

幸せ。

「なあ、理沙。」

急に達也が私の名前を呼んだ。

「ん？何？？」

花火から目を離さずに声だけで返事する。

「オレ、理沙のこと…めっちゃ好きやで？？」

「っへ？？」

思わず花火から目をそらして達也の方を見た。

「理沙は？オレのこと好き？」

そんなこと…

いきなり聞かれても…

口にだすのが恥ずかしくてこくつと分かるか分からないか程度でう

なずいた。

達也がほっとしたような笑顔を見せる。

「…うん。そうやんな！知ってる知ってる！」

ぼんぼんと私の肩を叩いてきた。

…あれ？

今ごろなしかすっごいロマンチックな雰囲気になってたのに…

ちよつと雰囲気が悪れたような…

「理沙。」

今度は本当に真剣な声で名前を呼ばれて固まってしまふ。

「オレ、キャンプのとき…」

そこで止まって、ほんのりと頬を染めて目をそらす。

けど、意を決したように私の目をみた。

「…ほんまに理沙にキスしたかった。」

ドキッ。

心臓が高鳴る。

ドーン！

もう終りが近いのか、たくさんの花火が達也の背景で花を咲かせる。花火に彩られた達也の姿がきれいで…

私は今、この世で一番きれいなものを見てるんじゃないかなと思った。

「私も…」

口が勝手に動く。

「私も達也とキスしたかったよ…??」

達也の瞳が少し見開かれる。

そしてにっこりとほほえんだ。

「今更、許可なんかとらんで？」

言葉ではそう言いながらも、私に同意を求めているような声。

許可…

とっってるじゃん…

「…うん。」

小さくうなずいた。

達也の顔がゆっくりと近づいてくる。

ぎりぎりまで達也の顔を見ていようと思ったけど、やっぱり恥ずかしくなって目をつぶってしまおう。

また、でこピンされたらどうしよう？

からかわれてただけだったらどうしよう？

けど、

心配する必要はなかったみたい。

私の唇に、温かいものが触れた。

ドーン……！

今までの花火の中で一番大きな音が鳴った。

多分最後の花火なんだと思う。

空が、鮮やかな光で染まった。

まるで私達の姿を照らすかのように。

これは、私のファーストキス。

きっと達也にとっても同じ。

花火が、私達を祝福してくれてるのかなと思った。

花火の光が消えるのと同時に、達也の唇が名残惜しそうに私から離れていく。

暗がりでもわかるほど私達の顔は赤くなってて…

2人で照れ隠しをするように笑いあった。

今日、

幸せなことがたくさんあった。

けど、

今が今日一番の幸せ。

ねえ、達也。

私ほんとに、

達也のことが大好きだよ。

21話 花火大会 理沙side(後書き)

キャンプ編強制終了(*|* ;

キャンプで花火したばっかなのにまた花火になりました。
読み返すとなんかくさいです；

21話 花火大会 達也 side

キャンプから帰ってきたオレ達。

さあ、やっと家でゆっくり休めるで!…と思ったたらこれがちゃうか
つてんなあ…

「なあ、吉沢。理沙達はいつくるんやろうか?」

「さあな。まあ30分前からきてるオレ達がバカなだけだと思っ
けど。」

只今オレと吉沢の2人は、夏祭りが開催される神社の鳥居のまえで
ぼーっとつつたっている。

お分かりの通り、どっちも彼女待ち。

なぜオレ達が30分もまえにきてしまったかというと…

単純にオレ達が2人とも、6時半集合を6時って聞き間違えたから
や。

「ちなみに!斎藤、おまえ今日、何円持ってきたんだ!？」

「んー。わからん。財布そのまま持ってきたから中身確認してない
わ。」

なんとなく財布の中身を確認してみる。

つと…

小銭入れに50円が一つ…しかない。

あれ？

なんで？？

慌ててカバンの中や財布のいろいろな場所を調べてみる。

けどやっぱりあるのは50円だけ。

な、なんでこんなにお金がないんや…???

そのときキャンプのときの自分を思い出して見た。

たしか、いろいろ余計なもの持っていたなあ…

…そうか！

あれに全部使ってしまったんや！！

なるほどなあ！

納得納得！

自分で勝手に納得して満足していると吉沢がにこにこして言った。

「オレは結構持ってきたぞ！三浦にいろいろ買ってやらなきゃな！
って思ってた。」

ピタッ。

思わず固まってしまっ。

「だってこんな祭りのときと違って普通は男がいろいろおごってやらなきゃいけない気がするし！」

そ、そうなん??

オレがおごらなあかん感じなん???

「当然おまえもいっぱい持ってきてるよなっ？」

「……………どっしょ。」

「はっ？」

小さく小さく言ったオレの声が聞こえなかったのか吉沢が怪訝な顔をした。

「オレ、財布に50円しか入ってないねんけど……」

吉沢の目がみるみる見開かれていく。

「はあ〜!?!おまえ何やってんだよ!?!」

おもいつきりどなられた。

「だ、だってそんなん…ないもんはしゃーないやん……」

「だからって…あゝあ、立川がかわいそうだ。」

ため息をつきながら言う吉沢。

そ、そんなにせめんといてくれや…

オレだって反省してるっちゅうねん…

「仕方ない、立川に謝っておけよ…って、ん？あれ三浦達じゃね？」

吉沢の視線の先を見てみると、そこには夏祭りらしく浴衣に身を包んだ理沙と三浦の姿。

「三浦〜！立川〜！遅いぞ〜！」

吉沢が大きく手をふりながら言った。

理沙は少し息をきらしながら吉沢を上目づかいで見た。

「遅いって…今ちょうど時間になったとこだよ？」

そんな理沙の可愛い動作に何も感じないのか、吉沢は人差し指をピョンと理沙のまえに立てる。

「5分前行動！小学校のとき習っただろ??」

あきらかに不機嫌な顔をする理沙。

「まっ、そんなことはおいといて…さっそく行くつよー！」

三浦は吉沢の言葉を軽く流すと吉沢の腕にとびついた。

「お、おい！」

吉沢の顔がおもしろいくらい赤くなる。

以外にあいつってこういうの慣れてへんよな…

まあそんなことより…

そっと財布をとりだす。

もしかしたらさっきのは見間違えで、実はいっぱいお金があるかもしれないへん。

わずかな期待をだいて財布の中をしてみるも…

やっぱりあるのは50円ただ一つ。

…はあ。

やっぱり見間違えとちゃうかったか…

「じゃ、理沙！今からちょっと別行動タイムね！いこ！吉沢くん！」

三浦はそう言うと吉沢の腕を引っ張って人ごみの中に入ってしまっ
た。

理沙はその様子にあっけにとられていたがすぐにオレの方に向きな

おる。

「行っちゃったよ…よし、私達もいこつか!」

にこつとオレにはほえみかけてくれる理沙。

でもゴメン、理沙。

オレは今喜べる気分とちゃうんや…

「どうしたの？達也。元気ないよ?？」

そんなオレの異変に気がついたのか理沙が心配そうにオレの顔をのぞきこんできた。

どうしよ…

とりあえず…

謝っとくか。

理沙のまえで両手を合わせる。

「ゴメン。理沙。ほんまにゴメン。」

とりあえず心をこめて謝った。

理沙は不思議そうに首をかしげる。

「なんで急に謝るの?」

「実は…な？オレ、このまえでござかい全部使ってしまった…」

「…へっ？」

理沙の顔がピタッと固まる。

どどどっしょー…

絶対怒ってるわあ…

「だからな？出店でおまえに何も買ってやれんけど…ほんまにゴメン。」

全身全霊をかけて謝ってみる。

お、お願いやー！…

これで勘弁してくれー！！

理沙は怪訝そうな顔をしていたが、急ににこっと笑った。

「…いいよ！気持ちだけでうれしいから！さ、いいっ？」

ほ、ほんまに！？

許してくれるん？？

ああ、なんかおまえが神様に見えるわ…

とりあえずオレ達も人ごみの中に入り、いろいろ出店を回った。

理沙はオレの分も買ってくれてくれるって言うてくれたけど…

オレは断固拒否。

とりあえず理沙がいろいろ回って行くのについていった。

「あつ、そろそろ時間だ！」

理沙がふと足をとめて時計を見た。

たしかにもうすぐ花火の打ち上げの時間が近づいている。

「そつやな。見えやすそうなところ探すか。」

実は神社に行く途中、吉沢に花火がめっちゃ見える隠れスポットを教えてもらったんや！

さつさといかな他の奴らも知ってるかもしれんし…

そう思うと自然に早足になって行く。

人ごみをかきわけていくうちに理沙がオレの後ろについてきていいことに気がついた。

あれ！？

理沙おらんやん！？

慌てて人ごみの中を引き返していった。

なぜかキャンプのとき、理沙が知らん男に声をかけられていたことを思い出す。

またあんなことになって…

理沙が連れていかれてたらどうしょ…!?

変な不安が胸にこみあげてくる。

そのとき、人ごみの中で立ち止まっている小さな姿を見つけた。

人ごみの中に咲いてる、小さなピンク。

すぐにそれが理沙だとわかった。

「理沙っ!?!」

理沙はオレに気がつくやと安心してたように息をつく。

「急におらんようになったからびっくりしたで??ちゃんといてきーや?」

「だって…達也歩くの早いんだもん…」

「そうか?じゃ、ゆっくり歩くようにするわ。とりあえず早く場所探さな間に合わんで?」

とりあえず早くいって場所をとらんと!

そう思つてまた人ごみをかき分けていった。

思わずまた早足になりそうになる。

そんなとき。

ぎゅっ。

何かに服のすそをひっぱられた。

ピタツと足を止める。

服をつかんでいるのが理沙だと気がつく、なんか子供みたいやな、
と思つて頬が緩んだ。

振り返つてわざと大きなため息をつく。

「ったく…しゃーないなあ。」

そう言つて、オレの服のすそをつかんでいる理沙の右手を左手でつ
つんだ。

理沙の目が驚きに見開かれる。

「こつしてたらはぐれへんやろ??」

にっこりと理沙に笑いかけると理沙は少し頬を染めてうつむいた。

「…うん。ありがとう。」

オレは軽くうなずくと、急いで人ごみをかきわけていく。

頭の中にはベストポジションを陣どって理沙にきれいな花火を見せてやるうということだけ。

理沙の喜ぶ顔が頭に浮かんで来て、気づかれないように笑みをうかべた。

オレは神社から少し離れた林の中で足をとめた。

「ここで見よか。」

そう言っつて理沙の手を離す。

吉沢の読みどおり、まわりには誰もいなくてオレ達2人だけだった。

オレはとりあえずその場に腰をおろす。

理沙もためらいがちにオレの隣に腰をおろした。

ドーン！

ちょうど頭上に花火があがる。

「ぎりぎり間に合ったな。」

「うん…すっごい、花火が全部見えるよ。」

理沙はうれしそうに空を見上げている。

その理沙の喜ぶ姿に満足しながら、オレも空を見上げた。

「ここな？隠れ花火スポットらしいで？さっき吉沢に教えてもらったんや。」

「そうなんだ…。うん、すごいきれい。」

無言で花火にみとれる理沙。

オレはそれを邪魔しないように、黙って空を見上げていた。

ふと、理沙の方を見る。

笑顔で花火に見とれる理沙の横顔。

急に理沙のことがたまらなく愛しくなった。

「なあ、理沙。」

邪魔してしまうと思いつつも思わず名前を呼ぶ、

「ん？何??？」

花火から目を離さずに返事をする理沙。

「オレ、理沙のこと…めっちゃ好きやで??？」

「っへ??？」

率直に今思ってたことを言つと理沙はとぼけた声をだしてオレの方を見た。

「理沙は？オレのこと好き？」

急に理沙も同じ気持ちなんかどうか不安になってきて、思わず尋ねてみる。

理沙は頬を染めるとこくつと小さくうなずいた。

…そうやんな。

オレだけが理沙のこと好きなんじゃないよな！

「…うん。そうやんな！知ってる知ってる！」

安心してほつと息をつくつと理沙の肩をぽんぽんと叩いた。

オレとしたことが何を不安に思ってるんや！

理沙もオレのこと好きに決まってるやろ!?

…じゃあ、別にこれも言つていいやんな…???

「理沙。」

理沙の体が固まった。

「オレ、キャンプのとき…」

多分今、オレの顔は赤くなってると思う。

だってこれは、口にだすのはちょっと恥ずかしいからな。

けど、理沙に伝えたいから。

あのと時理沙も冗談やって思ってたかもしれん。

けど、一応オレは本気やったってことを伝えたい。

意を決して理沙の瞳を覗き込んだ。

「…ほんまに理沙にキスしたかった。」

理沙は少し目を見開いて、顔をりんごみたいに真っ赤に染めた。

ドーン！

花火の音が鳴ったかと思うと、理沙はうっとりオレを見つめた。

「私も…」

そしてつぶやくように口を開く。

「私も達也とキスしたかったよ…??」

何かにとりつかれたような口調。

熱につかされたような表情に…

思わずドキッとした。

なんや。

理沙も本気やったんやな。

ちょっと安心した。

「今更、許可なんかとらんで？」

けどやっぱり理沙の同意が欲しくて、理沙の返事を待つ。

「…うん。」

理沙はこくりとうなずいた。

それを確認すると、瞳を閉じて、ゆっくりと理沙との距離を縮めていく。

ためらいがちに、理沙の唇に触れた。

ドドーン！

最後の花火特有の、大きな音が鳴る。

ああ、ちょうどこれが最後の花火なんやろうな。

熱につかされた頭でぼんやりと考えた。

あのとぎ…

雪乃とキスせんでよかった。

あのとぎ雪乃とキスしてしまつてたら…

こんな最高のファーストキスにはならんかったから。

男やのにファーストキスとか気にするっておかしいけど…

でも、これが理沙で良かった。

花火が散るのを見計らつて、理沙から唇を離す。

赤くなつた顔で理沙の方を見てみると、

理沙も今までに見たことのないほど真っ赤になっていた。

照れ隠しをするように、2人で笑いあふ。

ああ、今、

オレ、めっちゃ幸せやな。

そう思った。

ガチャッ。

「ただいまー。」

玄関の扉をあける。

居間に入るとなぜかオカンとオトンの2人がテーブルに座ってオレを待っていた。

この感じ…

まえにも見たことがある。

それはたしか…

「達也、グッドニュースになるか、バッドニュースになるかはおまえしだいやけど…」

オトンが笑顔でオレを見た。

多分、今から話すことが、オレにとって良いニュースになると思ってるんやと思う。

けど、

オレはその内容を聞くのがいやで思わず後ずさりした。

…嫌や。

聞きたくない。

けどオトンはそんなオレの様子には気がつかずにとっこりと笑って言った。

「ここでの仕事が終わったで！いきなりやけど、明日には大阪に戻るからな！」

それは、今までの幸せな生活が終わることを告げていた。

オレの中の世界がガラガラと音を立てて崩れていく。

この感じを前に見たのは…

大阪をでて、雪乃から離れないとあかんことを告げられた時。

21話 花火大会 達也 side (後書き)

なぜか達也が女の子みたい…

まあほつといてください；

そして！

達也の引っ越しが決まりました！

ってか、明日って早すぎ…（準備とかは大丈夫なのかよ…

最終話 大好き 理沙 side

プルルル…

携帯の着信音が鳴った。

誰だろ? と思って携帯を開いてみる。

ディスプレイにうつったのは達也の名前だった。

…なんだろう???

さっきのことで少し照れながらも達也からの電話にでる。

「もしもし? 達也?」

『……………』

返事がない。

達也からかけてきたのに…

どうしたの…???

なぜか胸に不安がよぎる。

やっと、電話の向こうで、達也の声がした。

『…理沙、ちょっと外でできてくれる??』

感情のこもっていない、無機質な声だった。

「うん…いいけど…」

様子のおかしい達也が心配になって、電話を切ると、寝まき姿のまま外にでた。

「達也??」

外にでると、家の前に達也が立っていた。

うつむいていて、表情は見えない。

「理沙…」

つぶやくように私の名前を呼ぶと、いきなり私を抱きしめた。

「!?!」

びっくりして、抵抗してみるけど、達也の力は強くてはらいのけられない。

達也は私を押さえつけると、乱暴に私の唇にかみついた。

「んんっ!?!」

達也は何度も角度を変えて、私にかみつくようにキスしてくる。

「やめ…」

息が苦しくなって、しめつけられる体が痛くて、涙がにじんだ。

怖い…

怖い…

どンドン達也に対する恐怖心が大きくなっていく。

たまらなくなつて、なんとか達也の手をふりほどぐと思いつきじりつきとばした。

達也はすんなりときとばされて、しりもちをつく。

私の目からは涙がぼろぼろとあふれでていた。

「達也…どつしちゃったの…??」

「……………」

達也は何も言わない。

私の方を見ようとせずにつつむいていた。

なんであんなことするの…???

達也、さっきはちゃんと私に許可とつてくれたじゃない。

こんなことされたって…

怖いだけだよ…

こんなの、達也じゃないでしょ??

「…ごめん。」

やっと達也が、うつむいたまま口をひらいた。

「ごめんじゃないよ！なんであんなことしたの!？」

思わず少し強めの口調で言ってしまう。

達也は少し間をおくと、しぼりだすように言った。

「理沙…オレ、オレなあ…」

やっと顔をあげた達也の顔は、涙でぬれていた。

「大阪に戻ることになってん…」

「…えっ??」

自分の耳を疑った。

今、達也は何って言ったの…??

たしか…

『大阪に戻る』って…

「ウソ…うそでしょ??」

冗談だと思った。

また達也が笑顔で私にでこピンするんじゃないか、なんて思った。

けど、達也は一向に笑顔を見せない。

涙を隠すようにつつむく反応は、それが本当であることを示していた。

「オレ、理沙と離れたくない…」

達也が声をふるわせながら言う。

私だって…

私だって達也と離れたくないよ…

達也みたいに思いつきとりみだしたくなった。

思いつきり泣きたかった。

けど、こんな達也をほっといて、私がとりみだすわけにはいかない。

いつもどこか、余裕がある達也。

こんなに取り乱すところを見るのは初めてだった。

私が…

すっかりしなくちゃ…

無意識に思っ、震える達也を胸におさめる。

達也は、子供のように私にしがみついていた。

「理沙…オレ、戻りたくないんや…おまえと離れたくないんや…！」

「…うん。私も、同じだよ…」

私は達也が落ち着くまで、達也のそばにいた。

しばらくすると達也は、やはりうつむいたまま立ち上がって「準備あるから。」と一言言い残して帰っていった。

達也が帰ったのを確認すると、ふらふらと家に戻る。

自分の部屋に入るとドサツとベッドに倒れこんだ。

達也が大阪に戻っちゃう…

それはつまり…

達也と簡単には会えなくなっちゃう…

こらえていた涙があふれでる。

「嫌…いや…いやだよ…達也あ…」

達也と離れ離れになっちゃうなんて嫌…

達也と会えなくなっちゃうなんて嫌…

「いけないで…達也あー!」

私は一晩中泣きあかすと、疲れて、眠り込んでしまった。

「……………」

明るい日差しが入りこんできて、眩しくて目を覚ます。

「…もう、朝??」

どうして、朝がきちやっただろう???

今日、達也はいなくなっちゃうんだ。

そっいえば…

達也は何時に出発するんだろう??

とつか、今何時??

寝ぼけながら、携帯を開く。

すると、一通のメールがきていた。

差出人はもちろん達也。

【昨日はごめん。今日、11時の電車に乗るから、できれば来て欲しい。】

達也らしくない、要件だけを告げたメールだった。

11時つて…

時計をチェックする。

時刻は10時半。

あと、30分しかないよ!?

私は飛び起きると、急いで着替えて駅へと走った。

私の足なら、早くて30分。

遅い。

お願い…

お願いだから間に合って!!

急いで駅にかけこんだ。

はあはあ、と息をきらしてホームに入ったとき、

ちょうど、隣を電車が通りすぎた。

びっくりして、その場に崩れおちる。

遅かった…

達也はもう、いっちゃったんだ…

「達也あ…なんでいっちゃったのよあ…」

シヨックで思いっきり泣いた。

私、最悪だ。

寝過ぎして、達也とのお別れに間に合わなかったんだ。

もう、達也と会えない。

大阪に、すっごい遠いところにいっちゃったんだ…

そう思っただきらめかけたとき、

「何そんなところで座りこんでるんや??」

少し、笑みのはいった声。

ありえないはずの、声。

ゆっくりと顔をあげた。

そこには笑って私を見降ろす達也の姿。

「た、達也??? どうして...??」

もしかして、さっきの電車じゃなかったの??

時計を見て見た。

時刻は11時を過ぎている。

…やっぱり、あの電車だったんだ。

なのに、どうして達也はここに残っているの...??

達也は私の頭の中を読み取ったように笑うと、座り込んでいる私の手を引いて立たせながら言った。

「オカンとオトンに頼みこんで、オレだけもう一本後の電車で行くことになったんや。…その、おまえがくるって信じてたから。」

照れ隠しするように頭をかく。

今日が大阪に戻る日だっていうのに、達也は昨日のように取りみだしてはいない。

むしろ、いつものようにどこか余裕があるように見えた。

「…うん。そんなの、来るに決まってんじゃない…」

達也はにこっと笑って私の頭をなでた。

「知ってた」

私達はとりあえず隅の方のベンチに座った。

私の右手は、達也の左手に包まれている。

「ねえ、次の電車っていつくるの??」

「うーん…多分12時ぐらいやったと思うけど…」

達也が時計を見たのを見て、私も時計を見た。

今は11時25分。

達也といられる、残り時間はたったの35分。

短いな…

もっと、もっと一緒にいたいのに。

こんなことなら、昨日達也を引きとめてでも一晩中一緒にいればよかった…

「…昨日は、めっちゃ取り乱してごめんな?」

「へっ??あっ!いいよ、いいよ!大丈夫だから。」

達也はもうしわけなさそうに私を見た。

「いや、ホンマに…ごめん。あんときはオレも何がなんだか分からんようになって…ホンマにごめんやで？」

達也の言葉で昨日の夜のことを思い出す。

無理やりに私にキスを迫ってきた達也。

多分、あのときは頭が真っ白になってたんだろうな…

ぼんやりとそう思った。

「もう、大丈夫やから。昨日は…ありがとつな。」

「うん…」

私、昨日はすっごく冷静に達也を慰めることができた。

けど、それは昨日、達也がすっごく取り乱してたから。

私がすっかりしなくちゃって思ったんだ。

でも、今日の達也はすっごく冷静で…

こんなんじゃ、私、絶対に自分をおさえられなくなっちゃっ…

それから私達は少し、たわいのない話をした。

そして、話しているうちに、達也が乗る電車がきてしまった。

「…じゃあ、理沙。お別れや。」

達也がすっと立ち上がる。

そして電車に乗り込もうとした。

私はその腕を必至になって引き留める。

「嫌！いつちやだめ！」

達也は困ったような笑顔で私を見た。

「理沙…」

達也が私の名前を呼ぶ。

…???

あれ？

この場面…

どこかで見たような…

突然、頭の中にある光景が浮かんだ。

それは、ずっと、繰り返し見てきた夢。

達也に恋してから、見なくなった夢。

私は、達也のことが好きになるまで、ずっとあの夢の中の【彼】が

大好きだった。

でも、【彼】の正体は分からなかったまま。

けど今、【彼】の正体がわかったよ。

あなたは…

達也だったんだね。

夢の中ではずっと呼べないままだったけど…

今は、あなたの名前を呼べるよ。

思う存分、あなたを引きとめることができる。

「やだよ。行かないで？達也…」

あふれだす私の涙をぬぐいながら、さみしそうにはほほ笑む達也。

夢と、ほぼ同じ。…違うのは、私が泣いているところだけ。

達也は、何も言わずに私に口付けた。

昨日みたいな乱暴なキスじゃなくて、いたわるようなやさしいキス。

花火大会の時みたいな甘い甘い幸せなキスじゃなくて、涙で少ししよっぱい悲しいキス。

達也は離れるのを惜しむようにギリギリまで唇を離さなかった。

けど、電車がもうすぐ出発しそうなのに気がついてゆっくりと唇を離した。

そして最後に、私の頭をくしゃくしゃと撫でる。

「そんなに落ち込んでも…オレが死ぬわけやないんやから…」

達也は一瞬間をあけると、さびしそうな雰囲気なんてまったくなく、輝く笑顔で言った。

「きつとまた会える。…いや、絶対に会える。絶対にまた、ここに戻ってくるから。」

電車の扉が閉まる音が鳴り響いて、達也は急いで電車に駆け込んだ。ゆっくりと扉が閉まる。

私は慌てて声を張り上げた。

「絶対、絶対だよ！！会いにこないと許さないんだから！！」

扉の向こうで達也が、いつもの笑顔で親指を立てた。

ゆっくりと電車が動き出す。

私は涙をふきとって、笑って達也を送り出そうと思った。

でも、ムリだった。

涙は止まらなくて、私は夢中になって電車を追いかけた。

「達也！達也あー！！！」

達也は驚いた表情で私を見ている。

そのうち、ホームの端まできて、追いかかれなくなった。

飛び越えてでも、追いかけようと思った。

けど、そうしているうちにも電車はいつてしまう。

私は、電車が見えなくなるまで、ずっとずっと眺めていた。

そつと、指先で唇をなでる。

そこにはまだ、達也のぬくもりが残っていて、やっぱり涙があふれる。

それでも、私は泣きながら笑顔をつくった。

大丈夫。

達也はきつと戻ってくる。

だって、達也が言ったんだ。

本当に決まってる。

それまで…

そのときまで…

私はずっと達也のことが好きだから…

達也のことを待ってるから…

絶対に、絶対に会いにきてよ？

私はずっとずっと…

達也のことが大好きなんだから。

最終話 大好き 理沙 s i d e (後書き)

『大好きです』 完結しました！

といつてもまだ達也 s i d e が残っているのですが…

それにしても達也の行動が意味わかりません…

それと、駅員の人、理沙達のために電車出発させるの待っていてくれてたんですかね？

最終話 会いに行く。 達也 side

オレはふらつく足どりで家をでた。

何も考えられずに向かった先は理沙の家。

…オレは何のためにここにきたんやろう…???

ぼんやりと思いながら携帯をひらき、理沙の電話番号を押す。

プルルルル…

『もしもし？達也？』

何度かコール音が鳴り、理沙の声がした。

「……………」

オレは何も言えなかった。

なんで電話したのかも分からんから。

ただ、なんとなく理沙の家のまえまできて、なんとなく電話をかけてみただけ。

正常に働かない頭でぼんやりと考えながらふと思った。

そうや…

理沙に大阪に戻ることを伝えるんや…

「…理沙、ちょっと外でてきてくれる??」

『うん…いいけど…』

理沙が訝しげに返事をする。

そりゃそうやんな。

こんな夜にいきなり呼び出されたらそんな反応にもなるわ。

理沙が通話を切ったので、パタンと携帯を閉じる。

『明日には大阪に戻るからな!』

頭の中でオトンの言葉が繰り返された。

ああ…

明日には大阪に戻るんやっただなあ…

理沙と離れ離れになるんかあ…

つう…

涙があふれだす。

…嫌や!

理沙と離れたくない…

流れる涙を止めようともせずにつつむいたとき、

「達也??？」

理沙がでてきて、オレの名を呼んだ。

プチッ。

同時に、オレの中で我慢していた何かがきれた。

「理沙…」

つぶやくように理沙の名前を呼ぶ。

そこから、何がなんだかわからなくなった。

自分が何をやっているのかが、わからなくなった。

ズキッ！

腰に鈍い痛みが走って、やっと我に戻る。

「達也…どうしちゃったの…??？」

上から涙の混じった理沙の声がふってきた。

「……………」

理沙の問に何も答えず、働かない頭でぼんやりと考える。

…なんで理沙は泣いてるんやろっ???

オレは何をしたんやろっ???

やっと、自分のしたことを思い出した。

そっや…

オレ、理沙が嫌がってるのに無理やりキスしようとして…

「…ごめん。」

うつむいたまま、つぶやく。

オレのせいで理沙が泣いてる。

そう思うと、罪悪感で胸がいつぱいになった。

「ごめんじゃないよ！なんであんなことしたの!？」

理沙が怒鳴った。

なんでって…

そんなんわからん…

何がなんだかわからんようになって…

それで…

夢中で理沙を感じようとしたんや…

だって…

「理沙… オレ、オレなあ…」

震えてうまく声がでない。

それでも顔をあげて、声をしぼりだした。

「大阪に戻ることになってん…」

「…えっ??」

理沙の目が驚きに見開かれる。

信じられないとでもいうように、口をあんどあげた。

「ウソ…うそでしょ??」

オレがこんなしょーもないウソ、つくわけないやろ…

またあふれだした涙を隠すように、うつむいた。

「オレ、理沙と離れたくない…」

だって…

理沙はせっかくオレが初めて自分で好きって思ったやつなんや…

一緒におって幸せやって思えるやつなんや…

それなのに…

なんで、離れなあかんことになるん??

オレは、幸せになったらあかんのか???

ふわりと体が何かに包まれた。

それが理沙だと知ると、オレは体面も気にせず、無我夢中で理沙にしがみつく。

「理沙…オレ、戻りたくないんや…おまえと離れたくないんや…！」

おまえと離れてしまったら…

オレは…

「…うん。私も、同じだよ…」

理沙はオレが落ち着くまでそばにいてくれた。

しばらくして、なんとか落ち着いたオレは理沙の手をはらいのけて、謝罪も、感謝もせずに「準備あるから。」と一言残して家路についた。

家に帰って、いつの間にか片付けられた自分の部屋に横になる。

…オレって、ホンマ最低なやつやな…

思わず苦笑する。

勝手に取り乱して…

理沙にひどいことして…

拳句の果てには、理沙に慰めてもらったのに、謝罪も感謝もせずにかうして帰ってきた。

オレって、ホンマ最低や。

自分を悔んでいるうちに、オレはいつの間にか夢の世界におちていった。

「達也ー！起きやー！」

オカンの怒声で目を覚ます。

…もう、朝か…

今日でここを出発しなあかんのやな…

寝ぼけた頭で考えながら、そばにあった携帯をとった。

少しためらって、意を決して理沙にメールを打つ。

たしか…

11時の電車にのるんやったな…

ゆっくりと確かめるように本文を打ち、送信した。

【昨日はごめん。今日、11時の電車に乗るから、できれば来て欲しい。】

メールが届いたのを確認すると、パタンと携帯を閉じる。

理沙は、きてくれるかな？？

昨日、あんな最低なことをしてしまったんや。

もしかしたら来てくれへんかも知れへん…

それでも、オレは信じたいな。

理沙は絶対にきてくれる。

もし、きてくれたなら…

今度は昨日みたいに取り乱さないようにしよう。

むしろ余裕を持って…

そう、理沙を慰められるくらい…

そして、わかれるときは笑ってわかれたいな。

…大丈夫や。

オレは昨日泣きつくして、涙は枯れた。

今日は笑って、理沙に手をふれる。

決意するようにこくっとうなずくと、着替えて下におりた。

オレ達はバスで駅に向かった。

ホームに入ったときはちょうど10時50分だった。

こんなぎりぎりでもいいんかいな…

どうでもいいことを思いながら、理沙の姿を探した。

けど、そんな姿はない。

やっぱり…

きてくれへんかったかな…??

まあ、昨日のことを考えたら当然かもしれん…

あきらめたように苦笑しながらも11時になるまでの10分間、オレは理沙の姿を探し続けた。

シュー…

そしてちょうど11時。

オレ達がる電車ホームに到着した。

結局…

きてくれへんかった…

おちこみながら、電車にのりこもつとする。

けど、途中でその足は止まった。

…いせ、

理沙はきつときてくれる。

もうちょっとしたら…

絶対に来てくれる。

さつき信じたかって思ったばかりやる？

ぎりぎりまで信じて、きてくれへんかったんやったらそれでいいや
ん。

「達也、何してるん？早く乗りや??」

オカンがいつまでたっても乗らないオレを見て訝しげに言った。

…言わな。

オレのためにここにきてくれるやつがおるんや。

だからオレまだ乗られへんって…

「オカン、オトン、ごめん。オレのためにここにきてくれるやつがおるんや。オレはそいつを待つときたい。」

オカンはわずかに目を見開いた。

けど、すぐになつこりと笑顔をつくる。

「じゃ、次の電車に乗っておいで。たしか次は12時にあつたはずやから。」

「あ、ありがとう!!」

慌ててお礼を言った。

プシューと音がして、扉が閉まる。

電車が動き出したそのとき、

改札口から、誰かがかけこんできた。

走ってきたのか、息をきらしてその場に立ち止まる。

あれは…

理沙…???

やわらかい、栗色のショート。

ぱっちりとした大きな目。

それは間違いなく理沙の姿だった。

理沙は電車が目の前で通りすぎるのを確認すると、顔を蒼白させてその場に崩れおちた。

ぼろぼろと瞳から大粒の涙を流す。

「達也あ…なんでいっちゃったのよお…」

そうつぶやく理沙を見て、オレはため息をついた。

何言ってるんや…

オレはまだここにおる。

「何そんなところで座りこんでるんや??」

理沙のすぐそばまで近づいて、苦笑しながら言った。

理沙が目を見開いて、ゆっくりと顔をあげる。

オレの姿をみとめると、ありえないとも言いたげな表情をした。

「た、達也???どうして…???」

理沙は時計を見て首をかしげた。

多分、さっきの電車であってるのになんかどうして?とか思ってるんやろな。

ホンマに…

こいつの考えてることは分かりやすい。

座り込んでいる理沙の手を引いて立たせながら言った。

「オカンとオトンに頼みこんで、オレだけもう一本後の電車で行くことになったんや。…その、おまえがくるって信じてたから。」

なんとなく照れくさくて、軽く頭をかく。

理沙は泣きながらも、にこっと笑顔をつくった。

「…うん。そんなの、来るに決まってるじゃん…」

オレも笑顔をつくって理沙の頭をなでる。

「知ってた」

オレ達はホームの隅の方のベンチに座って、次の電車がくるまでの時間を過ごすことにした。

少しでもお互いに触れていたくて、オレは理沙の右手をぎゅっと握りしめていた。

「ねえ、次の電車っていつくるの??」

「うーん…多分12時ぐらいやったと思うけど…」

オレが時計を見ると、理沙もそれにつられたのか、時計を見た。

時刻は11時25分。

残り時間はたった35分。

短すぎるやろ。

もっと、できることならずっと理沙と一緒にいたいのに…

もっと一緒にあって…

もっともっと幸せを味わいたかった。

まあどうせ、

幸せなんてのは長くは続かんって知ってたけどな。

あ、そうや…

昨日のこと、謝らな…

「…昨日は、めっちゃ取り乱してごめんな?」

「へっ??あっ!いいよ、いいよ!大丈夫だから。」

理沙は顔のまえで手をぶんぶんとふった。

ホンマに理沙は優しいなあ…

けど、もっと謝らんと…

オレの気がすめへん。

「いや、ホンマに…ごめん。あんときはオレも何がなんだか分からんようになって…ホンマにごめんやで？」

ホンマに…

何がなんだか分からんかったんや…

あんなこと、するつもりはなかったんや…

けど、我慢していた何かがきれて…

「もう、大丈夫やから。昨日は…ありがとつな。」

オレはちゃんと反省した。

もうあんなことせへんって誓える。

「うん…」

理沙が小さく首を縦にふった。

それからオレ達は悲しさをまぎらわすように、たわいのない話をした。

そして、話しているうちに、オレが乗る電車がきた。

「…じゃあ、理沙。お別れや。」

そう言って立ち上がる。

これ以上一緒におつたら余計にさびしくなりそうだから…

オレはさっさと電車にのってしまおうと、足を進めた。

グッ！

その腕を理沙が必至でつかむ。

「嫌！いつちゃだめ！」

必至でオレを引きとめる理沙を見ると、気持ちが揺れ動いてしまふ。

いつそ、このままこの町に残ったら…

ずっと理沙と一緒にられる…

いや、あかんのや。

オレはオカンと約束した。

次の電車に絶対にのるって。

それに…

今日の朝、せっかく決心したんや。

理沙と笑って別れるって。

それなのに…

残ろうと思うなんて…

何をしてるんや？オレ。

「理沙…」

けど、必至な理沙の顔を見て、たまらず愛しい名前を呼ぶ。

「やだよ。行かないで？達也…」

ぼろぼろとあふれだす理沙の涙をぬぐった。

そして無理やりに笑みをつくる。

…最後に、理沙にもう一度キスしたいな。

理沙は困るかな？

けど、この気持ちを全部吹き飛ばしてしまいたいから…

まだ未練タラタラのオレの気持ちを吹き飛ばしてくれや。

これは昨日の夜と同じ。

オレの我儘のキス。

そつと、理沙に口付けた。

それは、理沙の涙が混じって、少ししょっぱいキス。

ずっと、ずっとこのままでいたい。

けど、もうすぐ電車は出発してしまう。

オレは何が何でもこの電車にのらなあかんのや。

これ以上引き延ばすわけにはいかん。

名残惜しさを感じながらも、オレはゆっくりと唇をはなした。

そして理沙の頭をくしゃくしゃとなでる。

「そんなに落ち込んでも…オレが死ぬわけやないんやから…」

そうや。

二度と会われへんようになるわけじゃない。

会おうと思ったら会える。

絶対に会うって決めたら、いつかまた会えるんや。

オレはできるかぎり、オレの中での最高の笑顔をつくった。

「きつとまた会える。…いや、絶対に会える。絶対にまた、ここに戻ってくるから。」

オレがおまえに会いに行く。

おまえがオレのことを忘れさえてなければ、絶対におまえに会いに行くから！

電車の扉が閉まる音が鳴り響いた。

オレは慌ててかけこむ。

ゆっくりと扉が閉まり始めた。

理沙は呆然として、ふと気がついたように声を張り上げた。

「絶対、絶対だよ！！会いにこないと許さないんだから！！」

理沙の声がぎりぎりオレの耳に届いたところで、扉が完全に閉まった。

オレは笑顔で、親指を立てる。

分かってる。

おまえの許さないは怖いからな。

絶対に約束は守る。

理沙は涙をふきとって、笑顔をつくろうとした。

けど、涙は止まらんかったみたいで…

ぼろぼろと涙を流しながら、ゆっくりと進んでいく電車の横を追いかけるように走ってきた。

り、理沙！？

何してるんや！？

危ないで！？

理沙はホームのぎりぎりまで走り続けて、もう追いかけれないとわかったのかその場に立ち尽くした。

オレはその理沙の姿が見えなくなるまでずっとずっと、理沙を見ていた。

ぼろっ。

瞳から一粒の雫がおちる。

それをふきとって、オレはやっぱり笑顔をつくった。

…大丈夫。

約束や。

オレは何があっても絶対におまえのことを忘れへん。

たとえどんなことがあっても、おまえに会いに行くから。

それまで、オレのことを待っててな？

理沙、

おまえはオレが本気で好きになったやつ。

絶対に、絶対に、今のこの気持ちを忘れへん。

好きだけではあらわされへん気持ち。

オレは、おまえのことが大好きや。

最終話 会いに行く。 達也 side (後書き)

正真正銘の『大好きです』 完結です。

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

達也 side でも大好きつていれたくて無理やりにいれました；

また、この話を呼んでくれた方で感想とか記入していただければうれしいです

まあとりあえず『大好きです』は完結したんですが…

実は、『大好きです 2』も投稿しようと思つています。

他に小説の設定考えるのめんどくさいだけです；

多分内容は、理沙に会いにきた達也が事故で記憶喪失になって…みたいな感じですよ！

また暇なときにでも読んでやってください！

それでわ、今までここまで読んでくれた方、いらっしやったら、本当にありがとうございます > m () m <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9888g/>

大好きです

2010年10月17日02時22分発行